

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第14集

UCHIYASHIKI

内 屋 敷 遺 跡

県立小林高等学校生徒寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 9 9 年

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第14集

UCHIYASHIKI

内 屋 敷 遺 跡

県立小林高等学校生徒寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 9 9 年

宮崎県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深いご理解をいただき厚くお礼申し上げます。

このたび宮崎県教育委員会では、県立小林高等学校生徒寮建設に伴い、内屋敷遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

今回の調査では、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されました。特に縄文時代の生活の痕跡が数多く確認され、当時の人々の暮らしを垣間見ることができたことは、調査の大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導・ご助言をいただいた先生方、ならびに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成11年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 田中 守

例 言

1. 本書は、県立小林高等学校生徒寮建設に伴い、宮崎県教育委員会が行った内屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、2次に分けて実施し、それぞれ次の期間で行った。
平成8年度（第1次調査）平成9年1月29日～同3月14日（担当：東憲章）
平成9年度（第2次調査）平成9年4月14日～同8月21日（担当：甲斐貴充）
4. 現地での実測・写真撮影等の記録は、主に東憲章・甲斐貴充・米久田真二が行った。
5. 空中写真撮影は(株)スカイサーベイに、テフラ分析・プラントオパール分析は(株)古環境研究所に委託した。
6. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレス・写真撮影は、東と甲斐が整理補助員の協力を得て行った。
7. 本書で使用した位置図は国土地理院発行の5万分の1図を基に作成し、調査範囲図は小林市都市計画図の2.5千分の1図を基に作成した。
8. 土層断面及び土器の色調は『新版標準土色帖』に拠った。
9. 本書で使用した方位は、第1・2・4・10・36図は座標北（座標第Ⅱ系）で、その他は磁北（磁針方位は西偏約5.5°）ある。レベルは海拔絶対高である。
10. 本書使用した遺構略号は以下のとおりである。
SA・・・竪穴住居跡 SB・・・掘立柱建物跡 SI・・・集石遺構
11. 本書の執筆は、第I章-1を石川悦雄が、その他は東と甲斐が分担し、編集は甲斐が行った。
12. 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第II章 調査の概要	
第1節 遺跡の位置と環境	2
第2節 調査の経過	3
第3節 基本層序	5
第III章 調査の記録	
第1節 縄文時代の遺構と遺物	6
第2節 弥生時代の遺構と遺物	52
第3節 その他の遺構と遺物	57
第IV章 自然科学分析の結果	
第1節 内屋敷遺跡の土層とテフラ	60
第2節 内屋敷遺跡における植物珪酸体分析	64
第V章 まとめ	70

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 内屋敷遺跡発掘調査範囲図	4
第3図 内屋敷遺跡土層断面図	5
第4図 縄文時代早期遺構分布図	7~8
第5図 集石遺構(1)	9
第6図 集石遺構(2)	10
第7図 集石遺構(3)・配石遺構	12
第8図 掘立柱建物跡(平地住居跡)(1)	14
第9図 掘立柱建物跡(平地住居跡)(2)	15
第10図 縄文時代早期遺物分布図	17~18
第11図 縄文時代早期土器(1)	19
第12図 縄文時代早期土器(2)	20
第13図 縄文時代早期土器(3)	21
第14図 縄文時代早期土器(4)	22
第15図 縄文時代早期土器(5)	23
第16図 縄文時代早期土器(6)	24
第17図 縄文時代早期土器(7)	25
第18図 縄文時代早期土器(8)	26

第19圖	縄文時代早期土器 (9)	27
第20圖	縄文時代早期土器 (10)	28
第21圖	縄文時代早期土器 (11)	29
第22圖	縄文時代早期土器 (12)	30
第23圖	縄文時代早期土器 (13)	32
第24圖	縄文時代早期土器 (14)	33
第25圖	縄文時代早期石器 (1)	35
第26圖	縄文時代早期石器 (2)	36
第27圖	縄文時代早期石器 (3)	37
第28圖	縄文時代早期石器 (4)	38
第29圖	縄文時代早期石器 (5)	40
第30圖	縄文時代早期石器 (6)	42
第31圖	縄文時代早期石器 (7)	43
第32圖	縄文時代早期石器 (8)	44
第33圖	縄文時代早期石器 (9)	45
第34圖	縄文時代早期石器 (10)	46
第35圖	縄文時代早期石器 (11)	47
第36圖	第Ⅲ層検出遺構分布図	49~50
第37圖	縄文時代前期・後期 土器・石器	51
第38圖	1号竪穴住居跡	52
第39圖	1号竪穴住居跡出土土器・石器 (1)	53
第40圖	1号竪穴住居跡出土土器 (2)	54
第41圖	2号竪穴住居跡	55
第42圖	2号竪穴住居跡出土土器・石器・鉄器	56
第43圖	掘立柱建物跡 (1)	57
第44圖	掘立柱建物跡 (2)	58
第45圖	表土・包含層出土遺物	59

表 目 次

第1表	出土土器観察表 (1)	74	第6表	出土土器観察表 (6)	79
第2表	出土土器観察表 (2)	75	第7表	出土土器観察表 (7)	80
第3表	出土土器観察表 (3)	76	第8表	出土石器観察表 (1)	81
第4表	出土土器観察表 (4)	77	第9表	出土石器観察表 (2)	82
第5表	出土土器観察表 (5)	78	第10表	出土遺物観察表	82

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

県教育委員会文化課が平成7年度に実施した平成8年度開発事業調査で、県教育委員会学校施設課から県立小林高等学校体育コース生徒寮整備事業の回答があった。

建設予定地（小林市大字真方字内屋敷）は「周知の埋蔵文化財包蔵地」ではなかったものの、分布調査を実施した結果青磁片等が採集されたので、試掘調査を実施することとした。平成8年7月12日に、県の開発部局担当者を召集し開催した「開発事業と埋蔵文化財発掘調査の調整会議」において正式にその旨を学校施設課に通告し、その後協議を重ね、平成8年12月13日に試掘調査を実施した。

試掘調査では、アカホヤ層下位で黒曜石のチップ、アカホヤ層上位で前期の曽根式、剥片利用の縦長石匙等を検出し、青磁片を耕作土中から採集した。

この結果を受けて当該地を字名から「内屋敷遺跡」と命名し、県文化課と埋蔵文化財センターは学校施設課と事前調査の協議を行い、調査対象面積約3,600㎡のうち、進入路部分及び外溝部分の約400㎡を平成8年度に、建物本体部分等約3,200㎡を引き続き平成9年度に実施することにした。

第2節 調査の組織

内屋敷遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	藤本健一
副 所 長	岩永哲夫（平成9年度 調査第二係長兼務）
庶 務 係 長	三石泰博
調査第二係長	北郷泰道（平成8年度）
主査（調整担当）	谷口武範
主事（調査担当）	東 憲章（平成8年度）
主事（調査担当）	甲斐貴充（平成9年度）
調査員（囑託）	米久田真二（平成9年7月～8月）
試掘・事業調整担当	石川悦雄（県教育委員会文化課）

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と環境 (第1図)

内屋敷遺跡(第1図1)は、宮崎県小林市大字真方字内屋敷に所在する。小林市は、北の裏日向山地、東の諸県山地北西支脈、南の霧島火山、西の加久藤盆地に囲まれた小林盆地に位置する。

本遺跡は、小林盆地底部の石氷川と種子田川に挟まれた、標高約212mのシラス台地上に立地する。調査時点で台地は東部及び南西部が削平され、各々水田と住宅地となっていた。また、本遺跡の西側に隣接して、縄文・弥生時代の散布地である種子田遺跡群(第1図2)が周知の遺跡として存在する。

その他、本遺跡の周辺遺跡について時代別に概略を述べる。縄文時代の遺跡としては、本田遺跡(大字東方字坂下・第1図3)や平木場遺跡(大字南西方字平木場・第1図4)がある。本田遺跡では、押型文土器・前平式土器・塞ノ神式土器・曾畑式土器・石器類が出土している。平木場遺跡では、押型文土器・曾畑式土器が出土している。また、本田遺跡では、縄文時代前期の竪穴住居1基が確認されている。弥生時代の遺跡は調査例が少ないが、水落遺跡(大字細野字水落・脇ノ上・第1図5)があり、弥生時代後期の土器が出土するとともに、6基の竪穴住居が確認されている。



- | | | |
|---------|----------|--------|
| 1 内屋敷遺跡 | 2 種子田遺跡群 | 3 本田遺跡 |
| 4 平木場遺跡 | 5 水落遺跡 | |

第1図 遺跡位置図

第2節 調査の経過

内屋敷遺跡の調査対象面積は3,600㎡である。建設工事の工程上、平成8年度に車両進入路となる調査区東側約15mと外周擁壁部分（幅約10m）の調査を先行して行い（400㎡）、残りを平成9年度に行うこととなった。

平成8年度の調査では、重機により表土を除去し、黒色土（後述する第Ⅱ層）と褐色土（第Ⅲ層）を人力にて掘り下げた。遺構検出面はアカホヤ火山灰層（第Ⅳ層）上面である。Ⅱ・Ⅲ層からの遺物出土はほとんど見られなかった。精査の結果、調査区南東部でピット群を、外周南側で竪穴住居1基と溝状遺構2条を検出した。ピット群では4棟の掘立柱建物を確認した。

遺構完掘後、実測・写真撮影を行い調査第1面（第1文化層）を終了した。その後、再度重機を用いて第Ⅳ層の除去を行い、縄文時代早期（第2文化層）の調査に着手した。トレンチを設定し、土層の確認と並行しながら掘り下げを行った。その結果、集石遺構5基が検出され、多数の土器片・石器類が出土した。遺構実測と遺物の取り上げを行った後、トレンチによりさらに下層からの遺構・遺物の検出がないことを確認して調査を終了した。

平成9年度の調査は、前年度の外周擁壁建設工事の継続により、西側半分のみからの着手した。前年度の調査結果を受け、第1文化層検出のため、表土（第Ⅰ層）と黒色土（第Ⅱ層）の除去を重機によって行った。作業員による掘り下げを開始したところ、遺物が散見し始めた。精査の結果、竪穴住居1基と溝状遺構が3条を検出した。遺物は、古墳時代の土師器、弥生土器、縄文土器がほぼ同じレベルから出土した。

西側の第Ⅳ層上面の調査を終了した後、第2文化層検出のためにアカホヤ火山灰層（第Ⅳ層）の除去を重機により行った。作業員によって掘り下げを開始したところ、黒色土（第Ⅵ層）と黒褐色土（第Ⅶ層）中より、多量の石器、縄文土器が出土し、集石遺構3基と配石状遺構3基を検出した。

外周擁壁建設工事終了後、東側の第1文化層の調査を西側同様に行った。その結果、掘立柱建物1棟を含むピット群が確認された。第Ⅳ層上面の調査終了後、アカホヤ火山灰層の除去を行い、西側と併せてアカホヤ火山灰層下の第2文化層の調査を行った。西側同様多量の石器、縄文土器が出土し、集石遺構2基・多数のピット群が検出された。ピット群では平地住居11基が確認された。

現地での記録図面作成のため、両年度の調査を通じて国土座標（XY座標）に乗じた共通の10mグリッドを設置した。

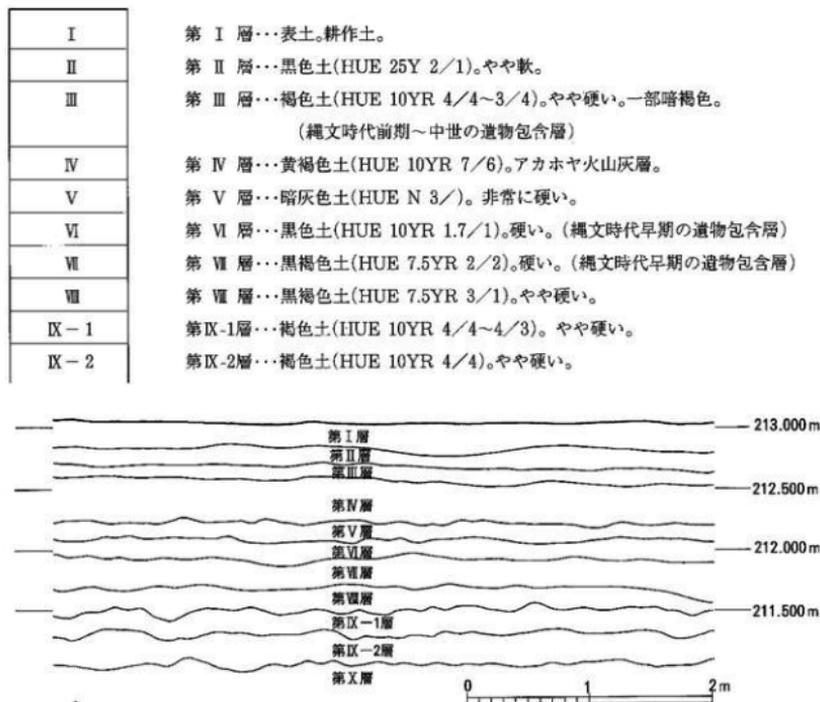


第2図 内屋敷遺跡発掘調査範囲図 (1/2,500)

第3節 基本層序

内屋敷遺跡の基本層序を第3図に示した。第I層(表土)は、最近まで茶園に利用され、30cm前後の厚みがある。第II層は、やや軟質の黒色土で、部分的に茶園による攪乱を受けている。第III層は、やや硬質でしまりのある褐色土層である。縄文時代前期から中世までの遺物包含層である。第IV層は、アカホヤ火山灰層(一次堆積)であり、下部に火山豆石を含む。第V層は、非常に硬い暗灰色土層で、牛の脛ロームを含む。第VI層は、硬質な黒色土層で、白・黄色軽石粒を少量含む。第VII層は、硬質な黒褐色土層で、白・黄色の軽石粒を含む(特に白色軽石粒が多い)。第VI層・第VII層は縄文時代早期の遺物包含層である。第VIII層は、やや硬質な黒褐色土層で、白・黄色軽石粒を含む。第IX層はやや硬質な褐色土層で、粘性をわずかにもち、少量の白色と多量の黄色軽石粒を含む。上部と下部の色調が違い、暗い上部をIX-1層に明るい下部をIX-2に分層した。

なお、内屋敷遺跡では、テフラ分析・プラントオパール分析を実施している。その結果については第IV章を参照されたい。



第3図 内屋敷遺跡土層断面図 (1/40)

第三章 調査の記録

第1節 縄文時代の遺構と遺物

・集石遺構

集石遺構は、10基が検出された。土坑（掘り込み）の有無、礫の被熱度合、炭化物の有無などによりいくつかの段階（準備礫の集積や使用状態に近いものなど）を想定し得る。

S I 1（第5図1）

S I 1は、掘り込みを持たず、20個あまりの礫が疎に集まったものである。礫のほとんどは安山岩で、比較的偏平なものが並ぶように配置されていた。炭化物は見られず、礫の赤変も顕著ではない。準備礫の集積の可能性がある。

S I 2（第5図2）

1.33×1.18mの楕円形の土坑を有し、底面付近には大型で偏平な礫を配置している。礫は砂岩と安山岩であり、密集して検出された。礫の多くに赤変が認められたが、割れたものは少なく丸みを帯びたものが多い。礫間からは炭化物も多く検出された。周辺から貝殻腹縁刺突文を持つ土器片（下剥峰式土器）が出土している。

S I 3（第5図3）

0.65×0.55mと小振りの土坑を有し、比較的大型で偏平な礫による配石を持つ。検出された礫の数は多くはないものの、全体に大振りな礫が目立ち、遺構を中心として周囲に広げられたような状態で検出されている。礫は砂岩と安山岩で、赤変が顕著である。埋土には炭化物が認められた。

S I 4（第6図1）

1.22×1.04mの楕円形の土坑を有す。面を揃えてはいないものの、大型の礫が下部に配されている。比較的大振りて丸みの強い礫が用いられており、赤変は認められるものの割れたものは少ない。礫間からは炭化物が多く検出され、貝殻腹縁刺突文やへら状工具による綾杉文を有する土器片（下剥峰式土器）が出土している。

S I 5（第6図3）

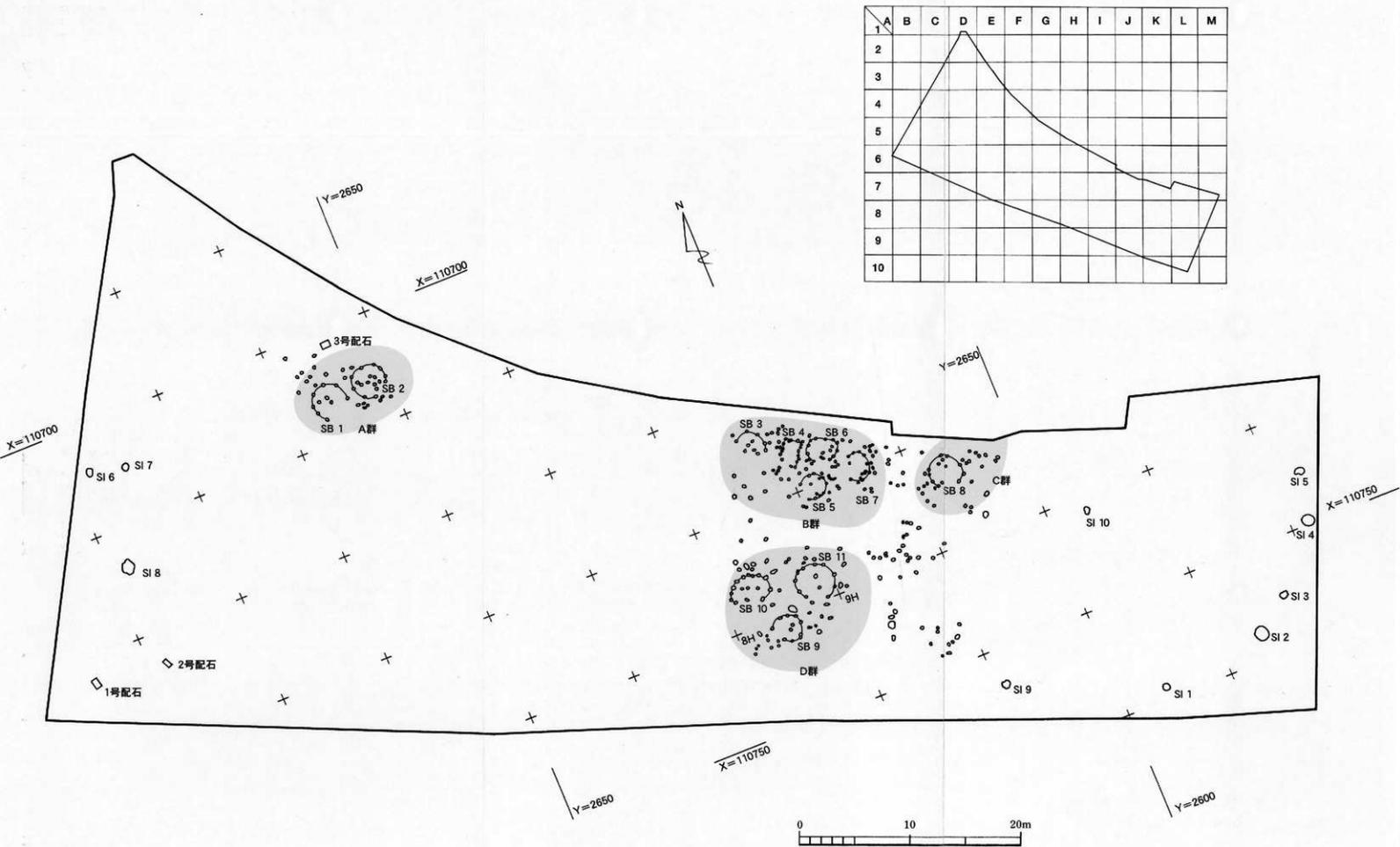
掘り込みは認められない。礫の重なりは見られず、安山岩を主とする数10個の礫が疎に配されている。礫の赤変は認められたが、炭化物は見られなかった。廃棄礫の集積の可能性がある。

S I 6（第6図2）

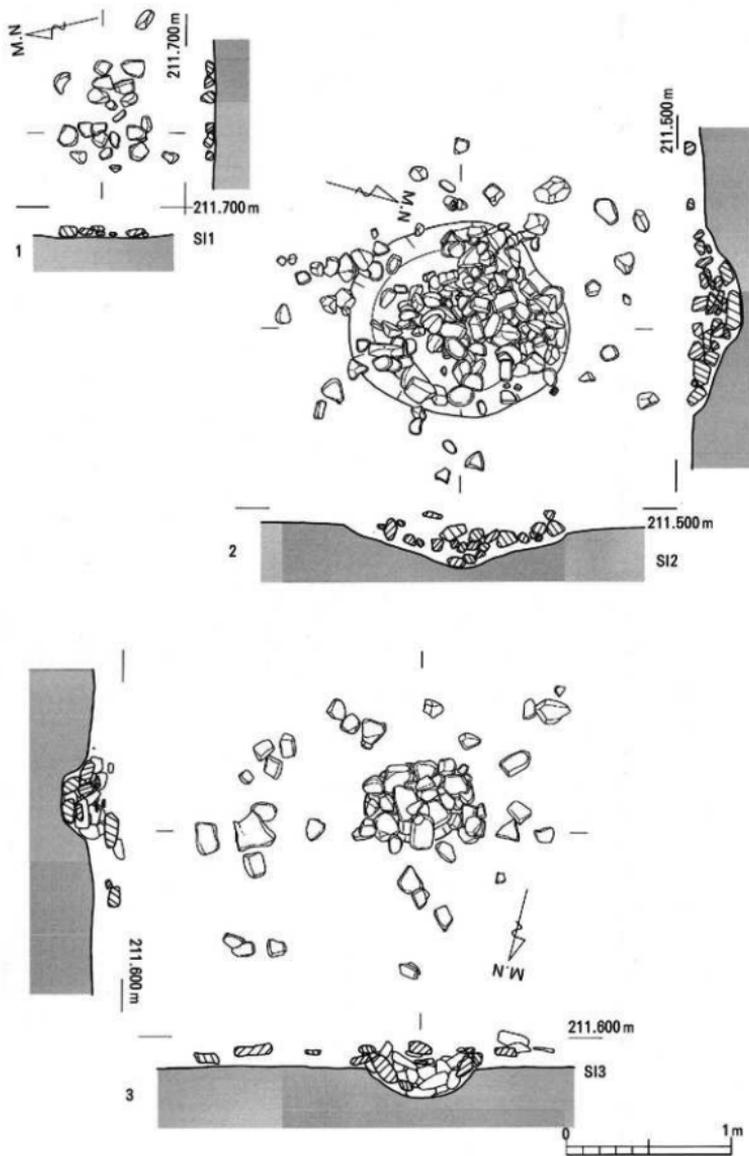
掘り込みは認められない。安山岩を主とする20個程の礫が集められている状態である。礫の赤変、炭化物ともに認められなかった。準備礫の集積の可能性がある。

S I 7（第6図4）

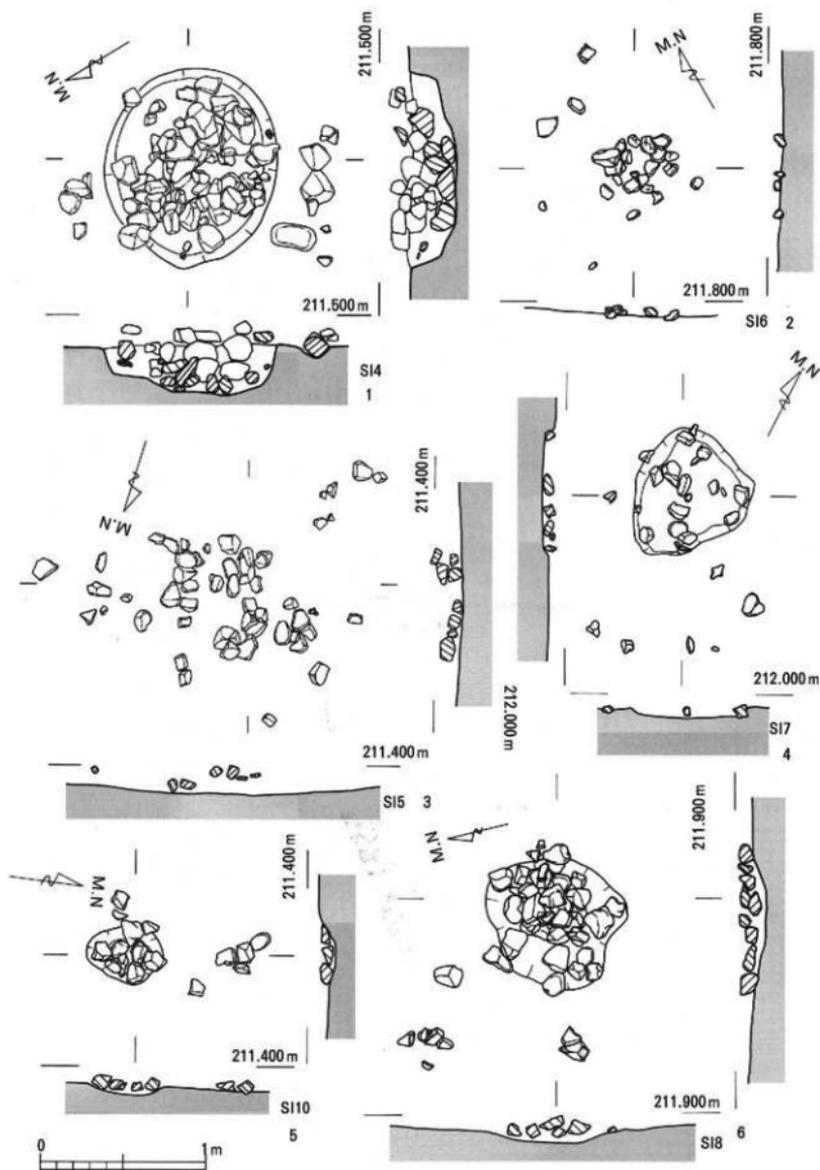
0.77×0.72mの浅い土坑を有する。土坑の中外に20数個の礫が散逸した状態で検出された。安山岩を主とする比較的小振りな直角礫を利用している。礫の赤変、炭化物ともに認められなかった。土坑内より石器（黒曜石製チップ）が1点出土している。準備礫の集積の可能性がある。



第4圖繩文時代早期遺構分布圖(1/300)



第5図 集石遺構 (1) (1/30)



第6図 集石遺構 (2) (1/30)

S18 (第6図6)

0.84×0.81mの土坑を有する。礫は比較的大振りな亜円礫を利用している。礫は主として安山岩であり、赤変は若干認められたが、炭化物は見られなかった。

S19 (第7図1)

0.76×0.71mの浅い土坑を有する。礫は主として安山岩であり、赤変が認められる。礫間の埋土中に3cm前後の炭化物粒数点、土坑床面直上で長さ約13cmの木炭1点が検出された。

S110 (第6図5)

0.46×0.39mの小型の土坑を有する。安山岩を主とする10数点の礫が密集している。礫は顕著ではないものの赤変が認められ、被熱のためか割れたものが多い。炭化物は見られない。

・ 配石遺構

配石遺構は3基検出された。本報告では、集石遺構と異なり大型の板石状の礫で構築された配石遺構として扱う。配石遺構は、一般的に炉などに関連した遺構として想定されている。しかし、本遺跡検出のものは、炭化物の存在の有無や被熱の痕跡の有無など不明な点が多く、今後の検討を要する。

1号配石 (第7図2)

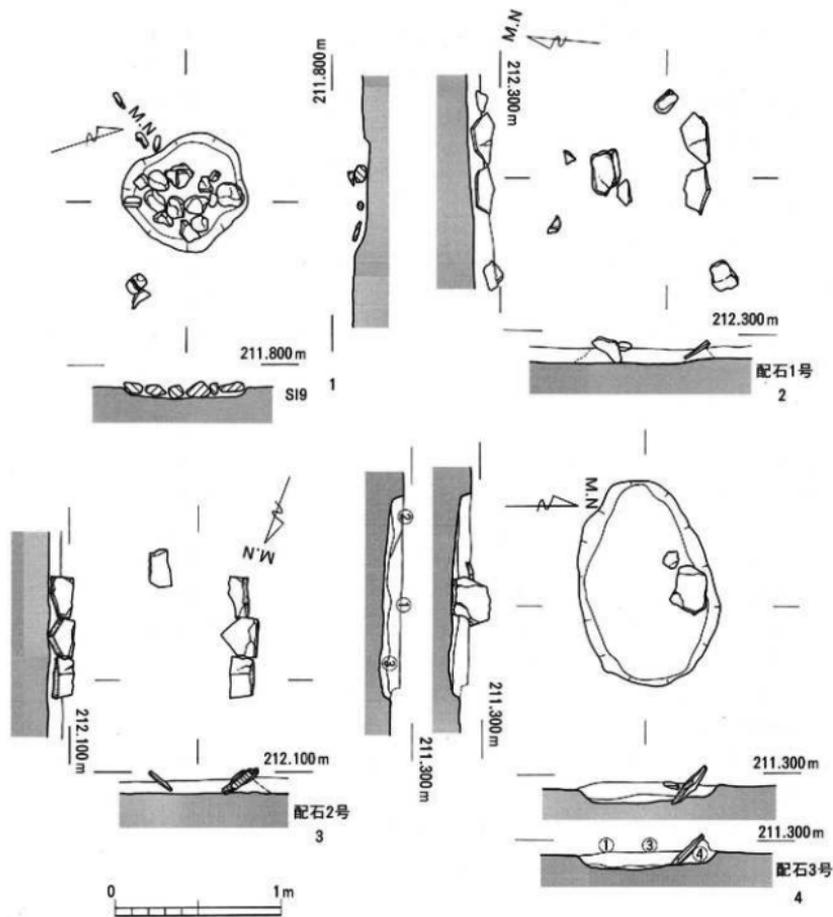
幅30cm前後の板石状の輝石安山岩を、一辺に2枚、対辺に1枚、斜めに配する。掘り込みは確認できなかったが、配石の背後下部に裏込め土を確認したことにより、掘り込みの存在が考えられる。焼土や炭化物、礫の被熱の痕跡は認められなかった。また、台石からの転用と考えられる石(第35図-301)が、遺構の構成礫の一つとして確認された。配石は0.74×0.68mの長方形の範囲内である。

2号配石 (第7図3)

幅25cm前後の板石状の輝石安山岩を、一辺に3枚、対辺に1枚、斜めに配する。掘り込みは確認できなかったが、1号同様、配石の背後下部に裏込め土を確認し、掘り込みの存在が考えられる。焼土や炭化物、礫の被熱の痕跡は認められなかった。配石は0.90×0.67mの長方形の範囲内である。

3号配石 (第7図4)

1.24×0.86mの楕円形の土坑を有し、一辺のみに幅30cmの板石状の輝石安山岩を1枚、斜めに配する。配石は赤変し、被熱の痕跡が認められる。焼土や炭化物は見られなかった。配石の背後下部の裏込め土が確認されたことから、土坑を掘り込んだ後に礫を配したと考えられる。



【3号配石土層註記】

- ① 黒褐色土層 やや硬 1m前後の黄・白色軽石粒
- ② 暗褐色土層 やや軟 3m前後の白色軽石粒を極少量含む。
- ③ 褐色土層 やや硬 5m前後の黄色軽石粒を極少量含む。しまりあり。
- ④ 黒褐色土層 やや軟 1m以下の白色軽石粒を極少量含む。しまり弱し。表込め土。

第7図 集石遺構 (3)・配石遺構 (1/30)

・ 掘立柱建物跡（平地住居）

第Ⅷ層直上から、直径10~25cm、深さ20cm前後のピット群が多数検出された。精査の結果、掘立柱建物11棟が確認された。内訳は馬蹄形9棟、方形1棟、半円形1棟である。馬蹄形のは、主柱穴の有無に差異が見られるものの、求心型で10本前後の側柱穴がめぐり、一方に開口部をもつ。伏屋式かドーム屋根式のどちらかの可能性がある。方形のは壁立式の一種と考えられ、壁柱を30~60cmの間隔を立て、馬蹄形のもの同様一方に開口する特徴をもつ。建物は、1~5棟による4群に分かれ、それぞれA~D群と呼称する。

A群（SB1-第8図1・SB2-第8図2）

SB1は、開口部に対して直行する2本の主柱穴に、9本の側柱穴が直径約3.2mで馬蹄形にめぐる。

SB2は、開口部に対して平行する2本の主柱穴に、11本の側柱穴が直径約3.2mで馬蹄形にめぐる。

B群（SB3-第8図3・SB4-第8図4・SB5-第8図5・SB6-第8図6・SB7-第9図1）

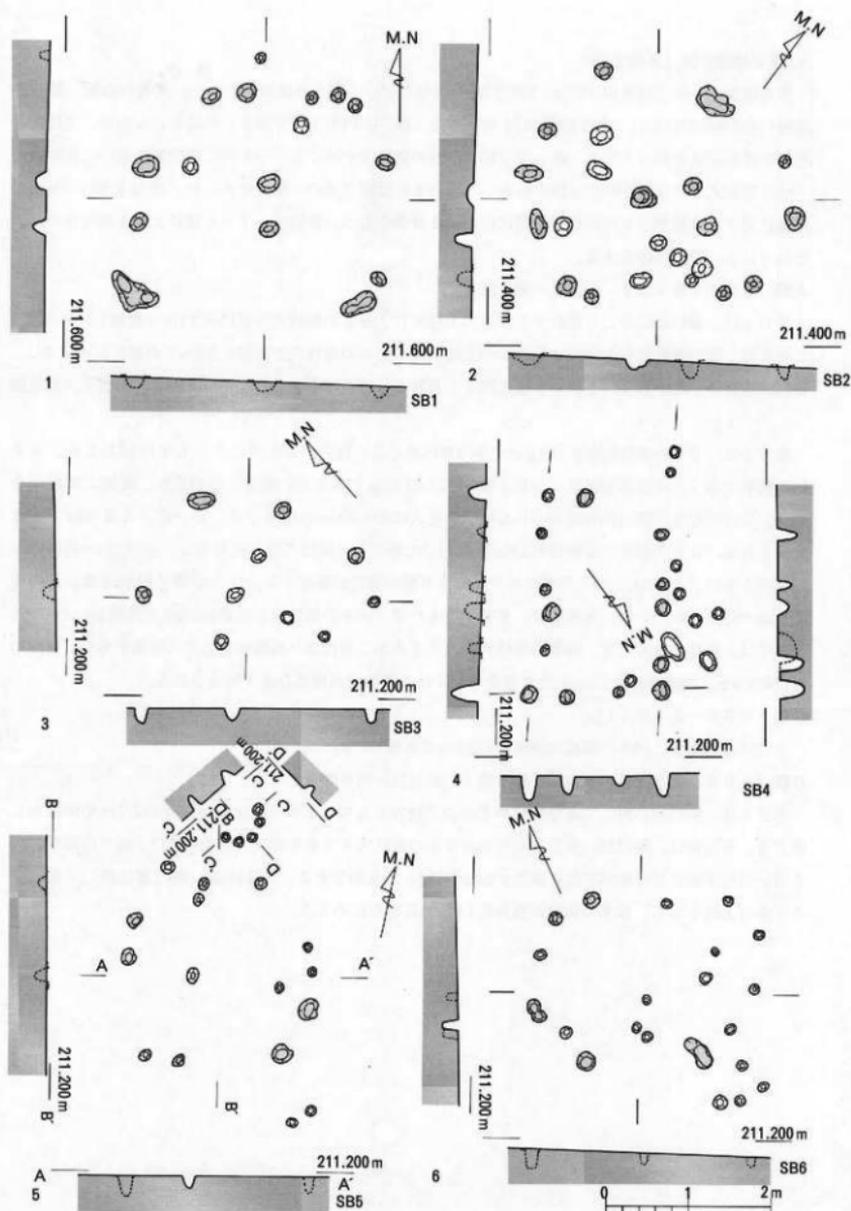
SB3は、5本の側柱穴が直径2.9mで半円形にめぐる。柱穴の未検出によって半円形となり、本来は馬蹄形であった可能性もある。SB4は、2.43×1.58mの長方形に壁柱穴がめぐり、南側に開口部をもつ。主柱穴や屋内棟持柱穴は見られない。壁柱穴は30~60cmの間隔で立てている。SB5は、主柱穴はもたず、9本の側柱穴が直径約2.6m馬蹄形にめぐる。開口方向の反対側に、直径10cm前後の小型柱穴5本が、直径50cmの半円形にめぐる性格不明の遺構が隣接する。この小型半円形遺構はその他1カ所で確認されている。SB6は、主柱穴はもたず、10本の側柱穴が直径約2.5mで馬蹄形にめぐる。SB7は、主柱穴はもたず、10本の側柱穴のうち7本が二重になり馬蹄形にめぐる特徴をもつ。外側の直径約2.9m、内側の直径2.2m。立て替えもしくは二重の屋根構造存在が想定される。

C群（SB8-第9図2）

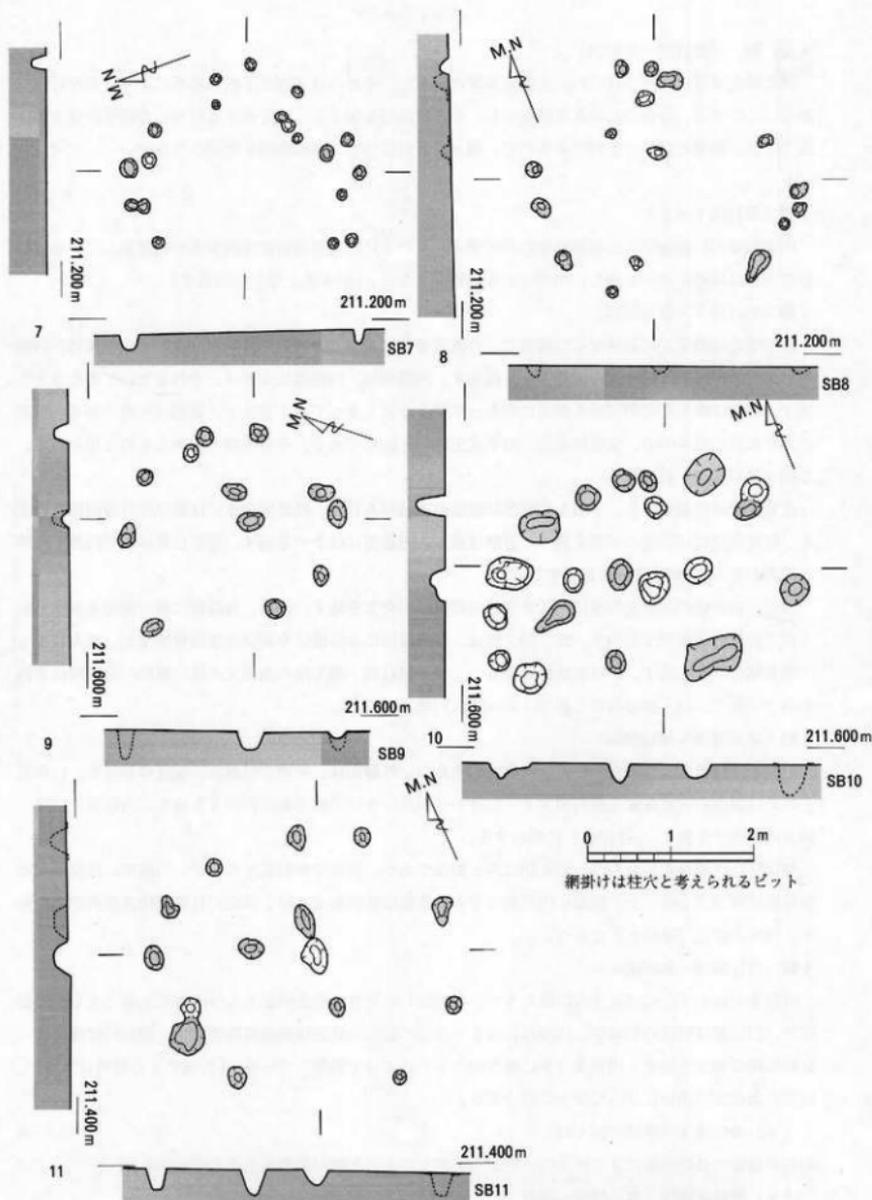
主柱穴はもたず、10本の側柱穴が直径約3.0mで馬蹄形にめぐる。

D群（SB9-第9図3 SB10-第9図4 SB11-第9図5）

SB9は、開口部に対して直交気味の2本の主柱穴をもち、8本の側柱穴が直径約2.7mで馬蹄形にめぐる。SB10は、開口部に対して平行する2本の主柱穴に9本の側柱穴が直径約3.2mで馬蹄形にめぐる。他の平地住居に比べて柱穴直径が35cm前後と大きめである。SB11は、開口部に対して斜行する2本の主柱をもち、10本の側柱が直径約3.4mで馬蹄形にめぐる。



第8図 獨立柱建物跡(平地住居跡)(1)(1/80)



第9図 掘立柱建物跡(平地住居跡)(2) (1/60)

・土器（第11図～第24図）

縄文時代早期に位置づけられる土器が多数出土した。それらは文様や手法、器形により分類が可能である。ここでは、分類の基準と根拠を示し、若干の説明を加える。全ての土器に対して観察所見を述べることは、紙数の関係上無理であるので、個々の資料については観察表を参照されたい。

1類（第11図1・2）

内湾気味の口縁部で、口唇部外側に押圧刻み、その下に横位の貝殻腹縁刺突文を数段施している。口唇部内側は斜めにナデを施し、山形に尖る口唇部となる。「岩本式土器」に相当する。

2類（第11図3～第12図23）

直立またはわずかに外反する口縁部で、外器面全体に斜方向の貝殻腹縁条痕文を施文した後に、口縁部上端に斜位の貝殻腹縁連続刺突文を1段施す。内器面は、口唇部にミガキ、それ以下に丁寧なナデを施す。器形は膨らんだ胴部から底部に向かって緩やかにしまっていく形状で、底部は平底である。器形の面では異なるものの、文様構成は「前平式土器」と同じであり、その系譜上にあるものと思われる。

3類（第13図24～37）

直立気味の口縁をもち、平坦な口唇部に縦位の連続刻み目を、外器面全体には縦位の貝殻腹縁刺突文を、底部周辺には縦位の刻線を施す。器壁は薄く、内器面にはナデを施す。器形は蘭鉢状で円筒と角筒の両方がある。「知覧式」に相当する。

24は、斜方向の条痕文の後に三叉方向の貝殻腹縁刺突文を施す。27は、外器面に横方向の条痕文と斜方向の貝殻腹縁刺突文を施す。25・26・28は、貝殻腹縁による横位や縦位の連続刺突文と、刻み目をもつ楔形貼付突帯を施す。25は波状口縁をもつ。32～34は斜・横方向の条痕文の後に縦位の貝殻腹縁連続刺突文を施す。24・25は角筒土器で、26～37は円筒土器である。

4類（第13図38～第14図58）

円筒形土器であり、わずかに外反する口縁をもつ。外器面は、平坦な口唇部に縦位の刻線を、口縁部上端には数段の貝殻腹縁連続刺突文を、口縁から胴部にかけて横方向の押引文を施す。内器面には横・斜方向のナデを施す。「吉田式」に相当する。

48は穿孔（補修孔）をもつ。57と58は同一個体であり、胴部に押引文をもつが、口縁部に横位の貝殻腹縁連続刺突文2段以上、胴部に円形刺突をもつ連続瘤状突起文2段と斜位の貝殻腹縁連続刺突文を施す。円形の穿孔（補修孔）をもつ。

5類（第15図59～第16図96）

直立またはわずかに外反する口縁をもち、やや膨らむか直線的な胴部をもつ円筒形土器である。外器面は、口唇部に縦位の刻線を、口縁部には2～3段の横位の貝殻腹縁連続刺突文を、胴部には横方向の貝殻腹縁条痕文を施す。内器面は主に横方向のナデによって調整している。「石坂式」の範疇に入るが、胴部の条痕文の違いによって2つに細分する。

(a) 横位施文（第15図59～87）

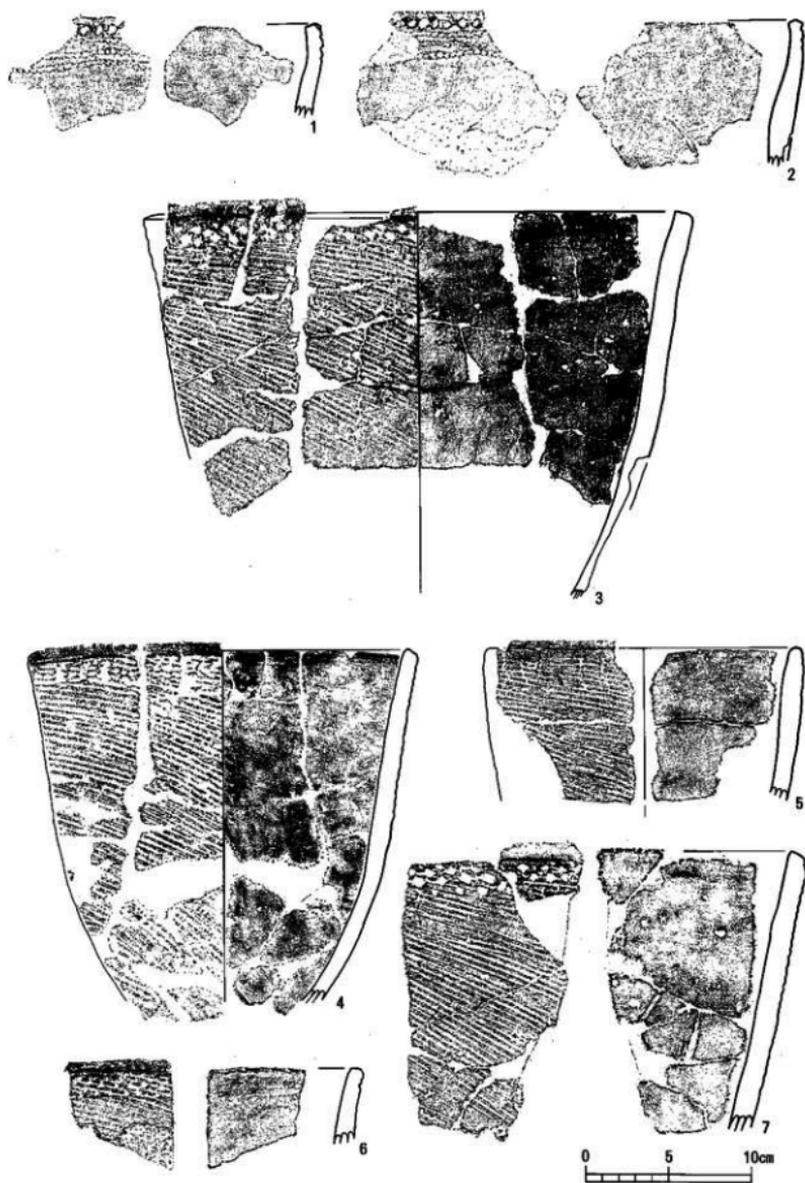
胴部の横位の貝殻腹縁による施文に、完全な条痕文のものと押引風条痕文のものがある。

(b) 綾杉状施文（第16図88～96）

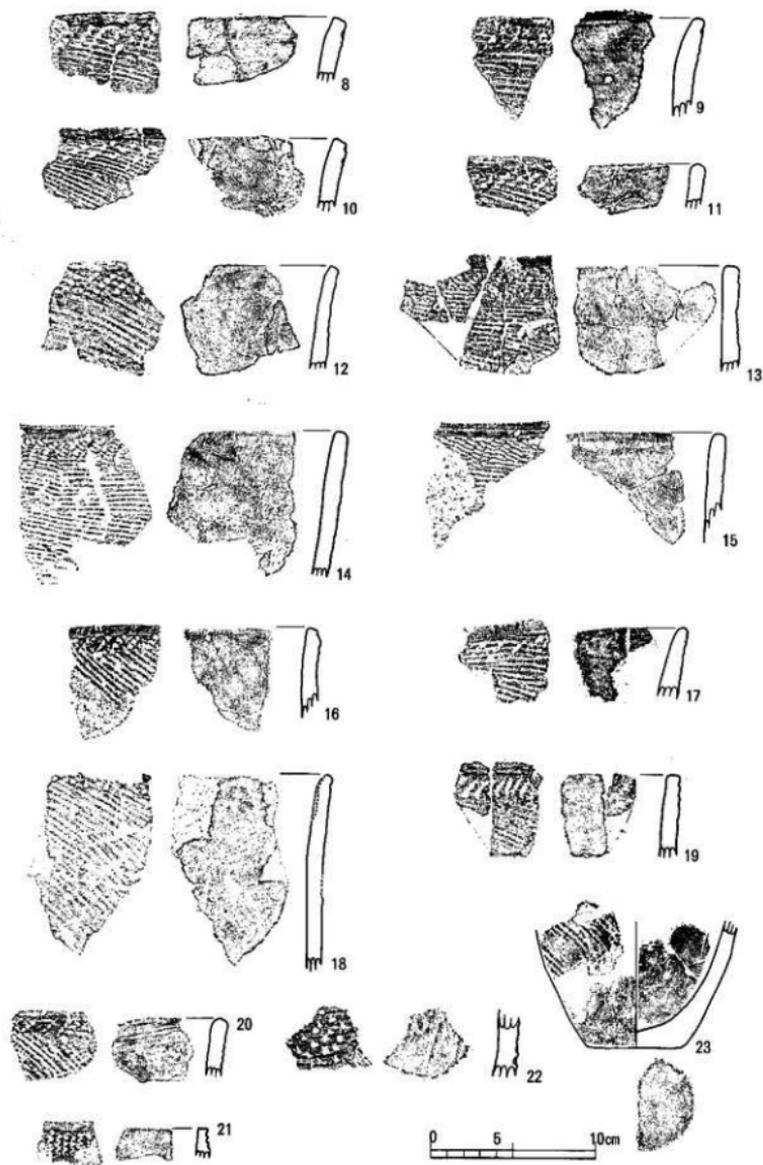
胴部は全て綾杉状に施文してあるが、口縁部の施文にはバリエーションがある。88は口縁部に羽状の貝



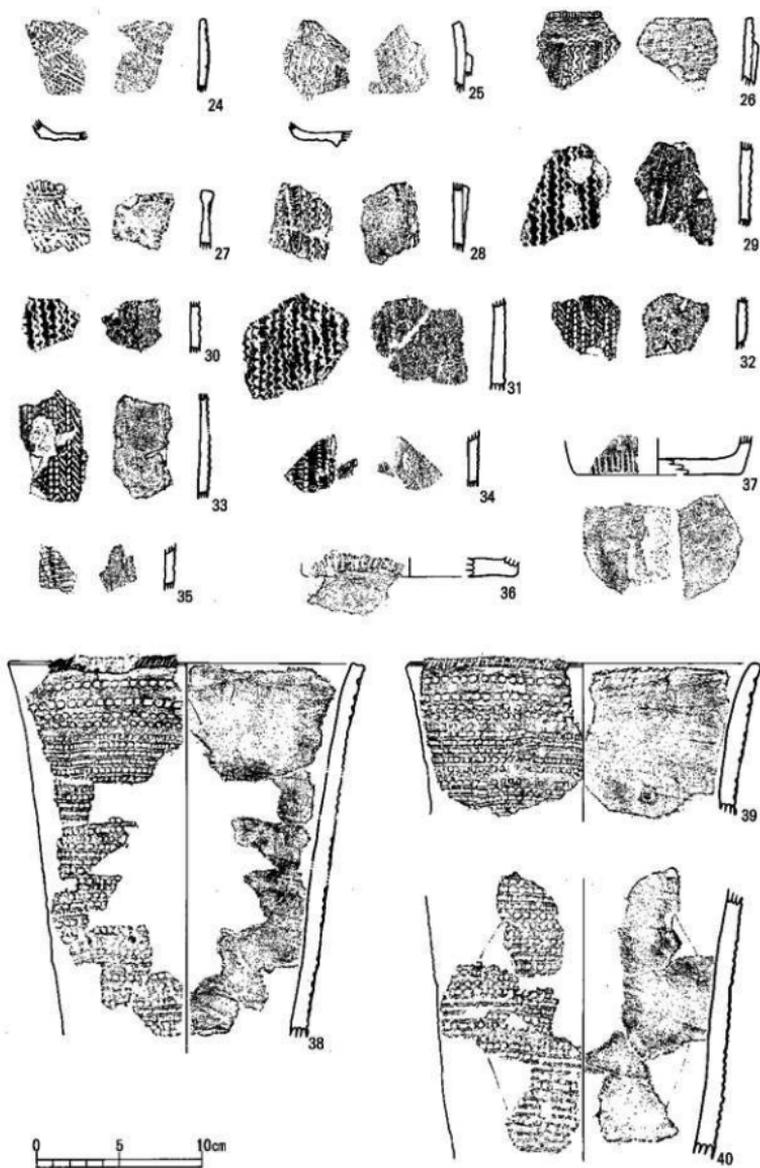
第10図 縄文時代早期遺物分布図 (1/300)



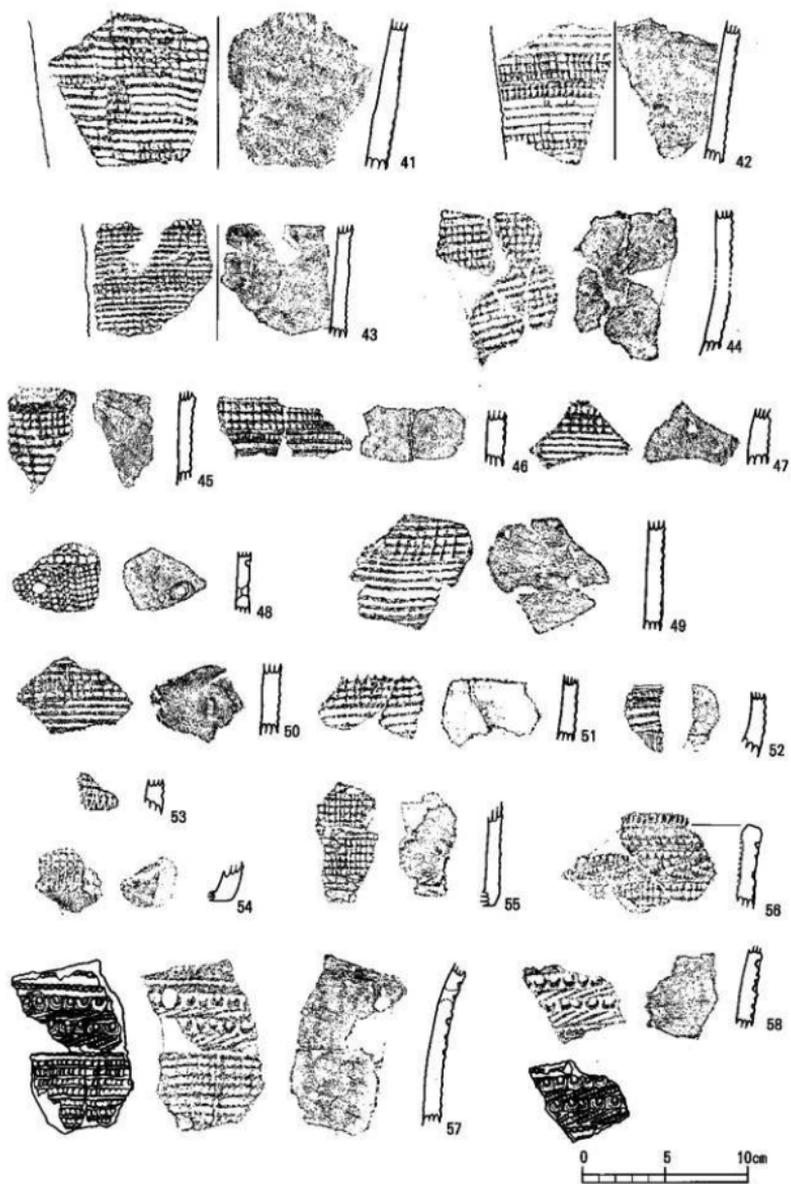
第11圖 縄文時代早期土器 (1) (1/3)



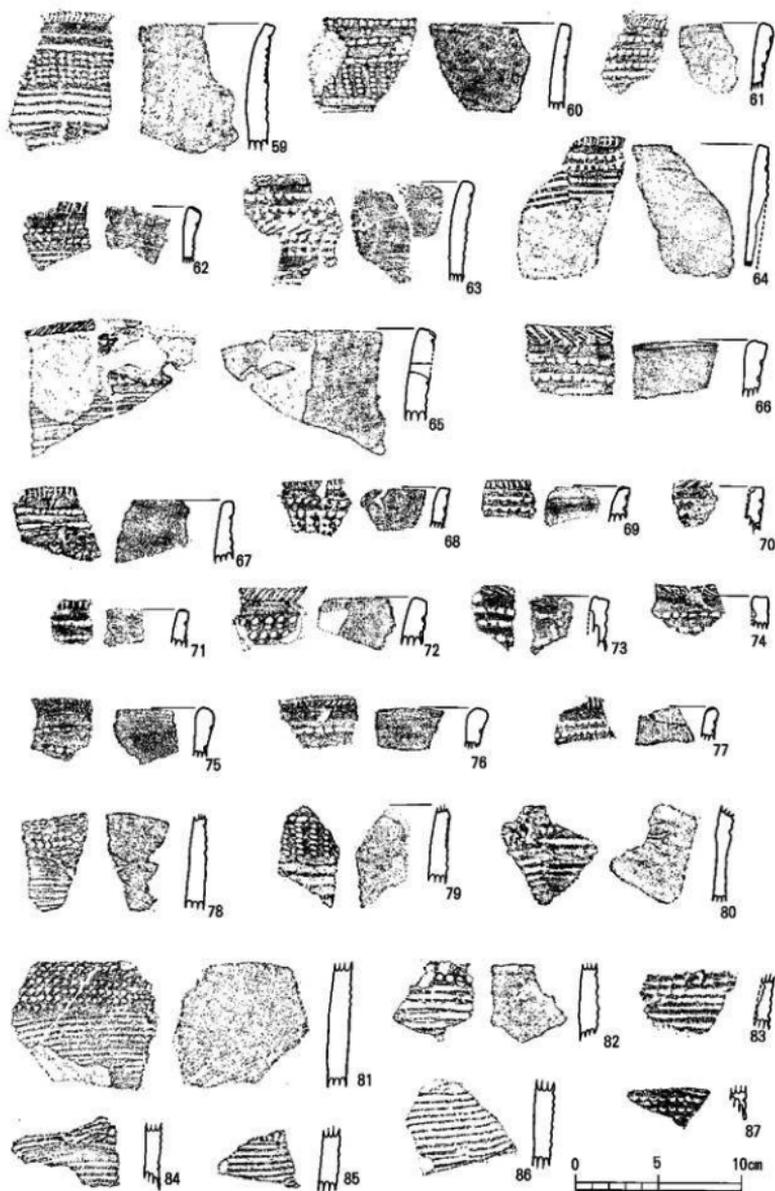
第12図 縄文時代早期土器 (2) (1/3)



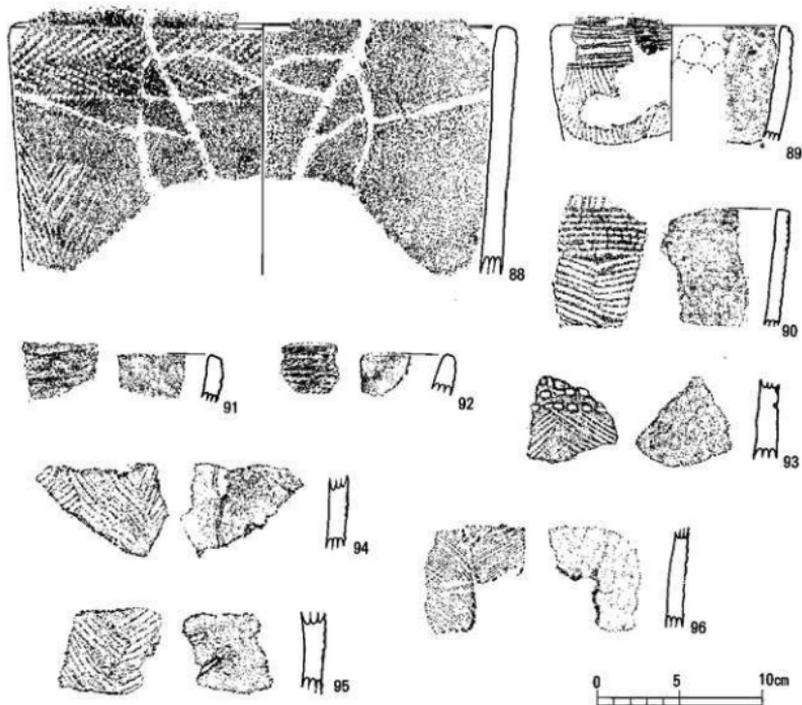
第13図 縄文時代早期土器 (3) (1/3)



第14回 縄文時代早期土器 (4) (1/3)



第15圖 縄文時代早期土器 (5) (1/3)



第16図 縄文時代早期土器 (6) (1/3)

殼腹縁刺突文を施す。89～93は口縁部に数段の横位の貝殻腹縁連続刺突文を施す。

5 a 類は「倉間B式」に、5 b 類は「石坂式」に相当する。

6 類 (第17図97～109)

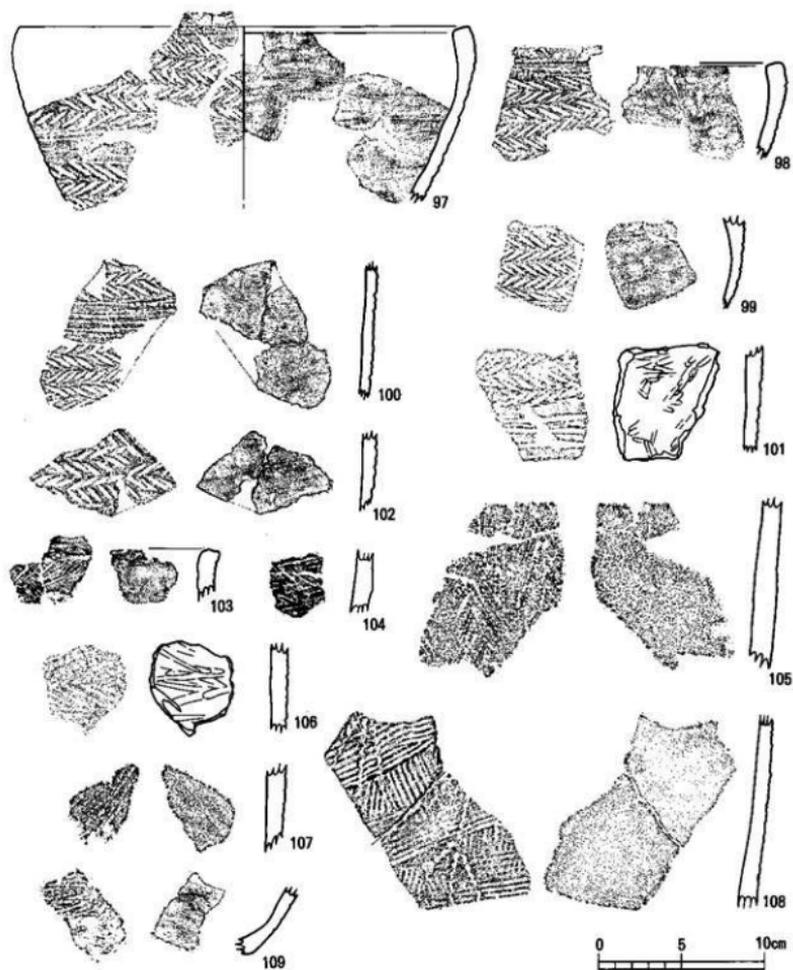
やや内湾気味の口縁部は、口唇部を平坦にナデている。口縁部から底部まで、貝殻腹縁刺突文と篋状工具や貝殻による綾杉文を数段づつ交互に施文する。内器面はミガキ、あるいは丁寧なナデである。底部は平底で、胴部に向け膨らみ気味に立ち上がる。「下剝峰式土器」に相当する。

7 類 (第18図110～第19図123)

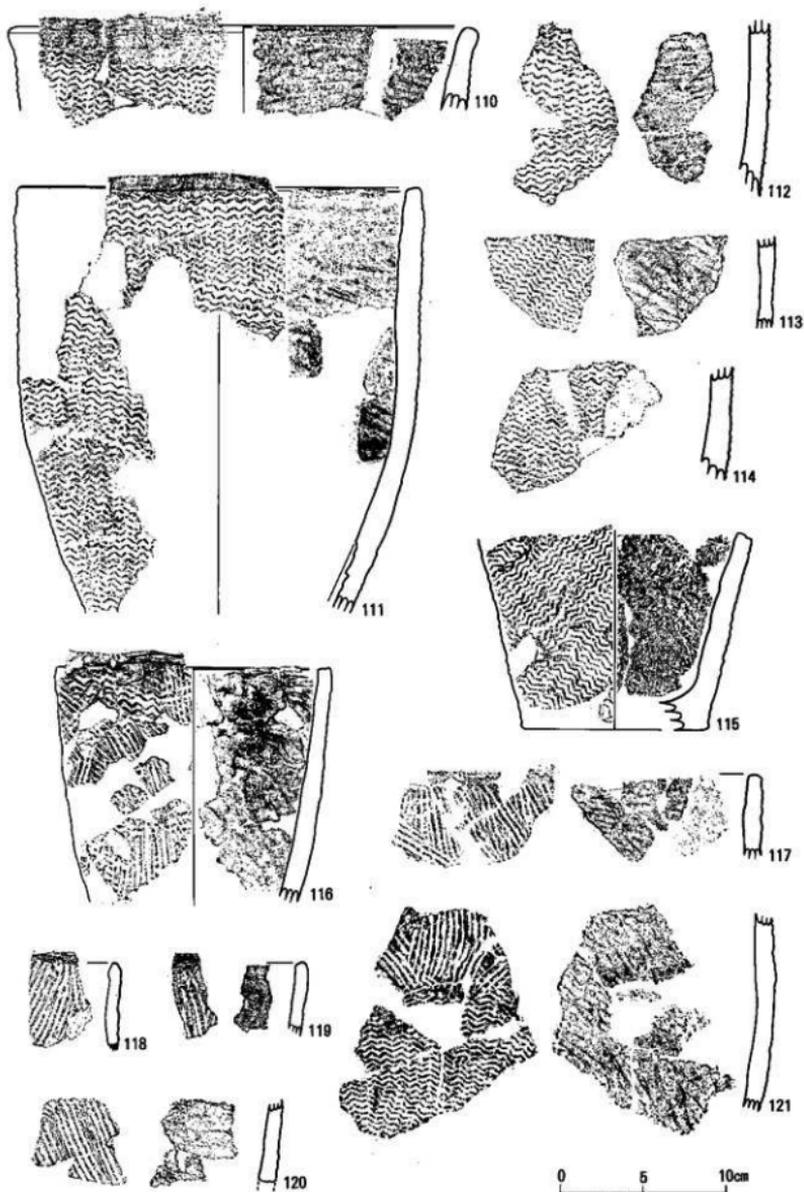
「押型文土器」である。施文具の種類によって2つに細分する。

(a) 山形押型文 (第18図110～121)

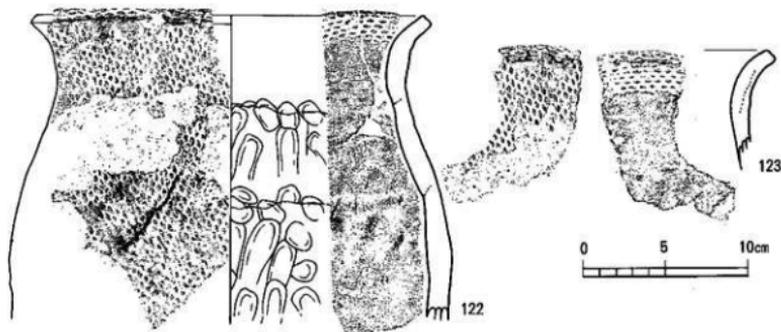
直行気味の口縁、わずかに丸みをもつ胴部に平底をもつ器形。内器面は、丁寧なナデで、口唇部付近のみミガキを施す。110～114は外器面全体に押型施文を、115・116・121は押型施文と原条条痕を施す。118～120は原条条痕だと考えられる。



第17圖 縄文時代早期土器 (7) (1/3)



第18圖 縄文時代早期土器 (8) (1/3)



第19図 縄文時代早期土器 (9) (1/3)

(b) 楕円形押型文 (第19図122・123)

122・123は同一個体である。平坦な口唇部に、外反する口縁、膨らみのある胴部をもつ器形。外器面には口唇部から胴部にかけて全体的な押型施文が、内器面の口縁部にも2cm幅の押型施文帯が見られる。

8類 (第20図124～第22図163)

「凹筒形条痕文土器」である。

丸みを帯びた口唇部に、直行もしくははや外反気味の口縁をもち、器壁が厚く、内器面に横・斜方向のミガキや丁寧なナデを施す。外器面の施文方法や施文範囲によって4つに細分する。

(a) 外器面の口唇部から口縁部上部の狭い範囲に貝殻腹縁連続刺突文を施す。(第20図124～第21図143)

124～128・140・143は、外器面の口唇部に1段、口縁部に3段前後の密な貝殻腹縁刺突文を施す。131～135は外器面の口縁部に3段前後の疎なる貝殻腹縁刺突文を施す。131は、穿孔(補修孔)が確認され、132と同一個体である。129・130・136～139・141・142は、外器面の口唇部から口縁部にかけて3段前後の押引状貝殻腹縁刺突文を施す。

(b) 外器面の口縁部から胴部上部まで横方向の貝殻腹縁条痕文を施す。(第21図144～第22図153)
144～150は直線状の条痕であるが、151・152は微妙な波状の条痕である。153は斜方向の条痕であり、穿孔(補修孔)をもつ。

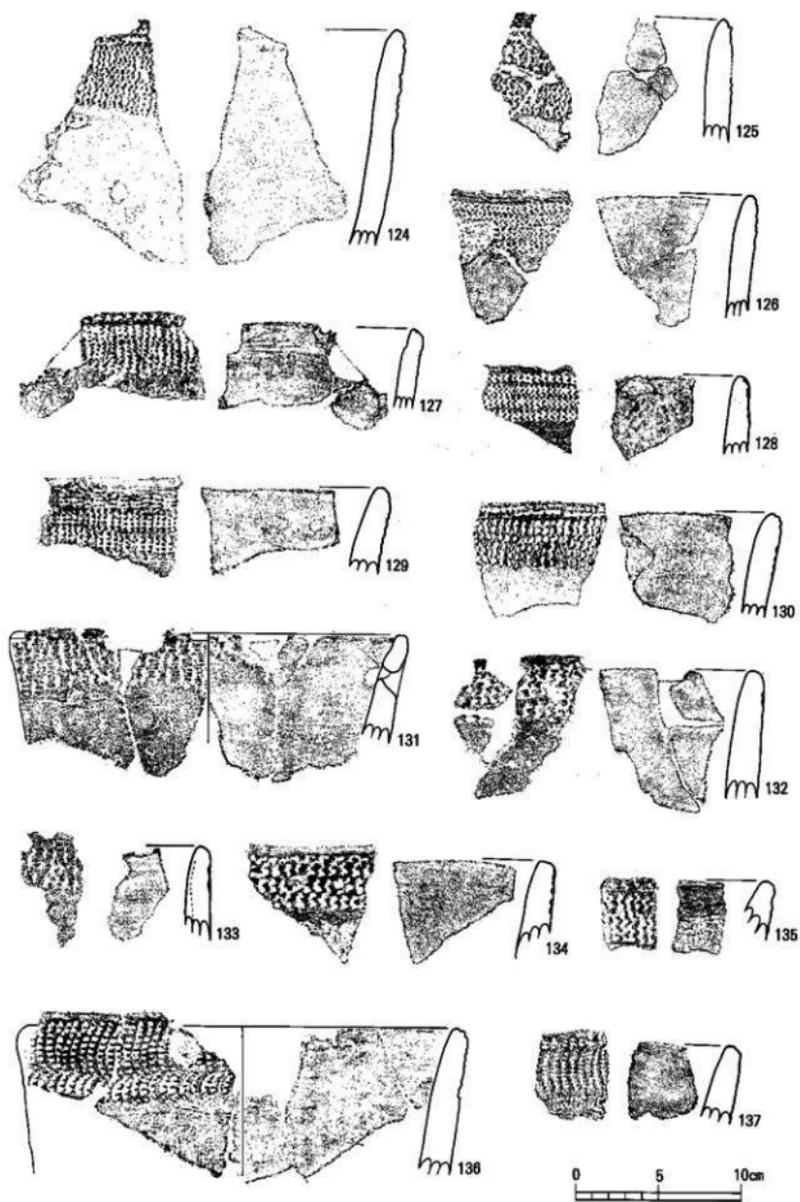
(c) 外器面の口縁部から胴部全面にかけて横方向の貝殻腹縁条痕文を施す。(第22図154～158)
154～158のいずれも8b類に比べて条痕の間隔が広い。

(d) 小破片で施文範囲が特定できないが、横方向の貝殻腹縁条痕文を施す。(第22図159～163)

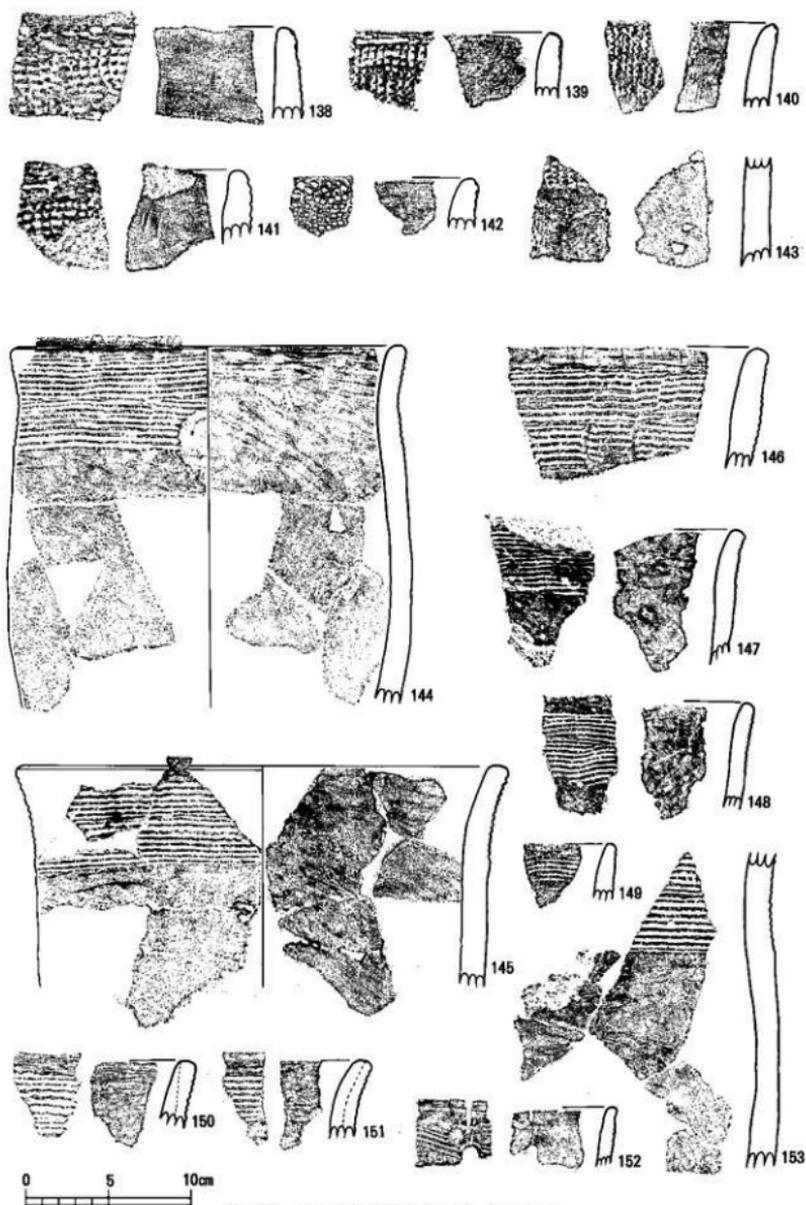
9類 (第23図164～174)

1～8類以外の「条痕文土器」である。

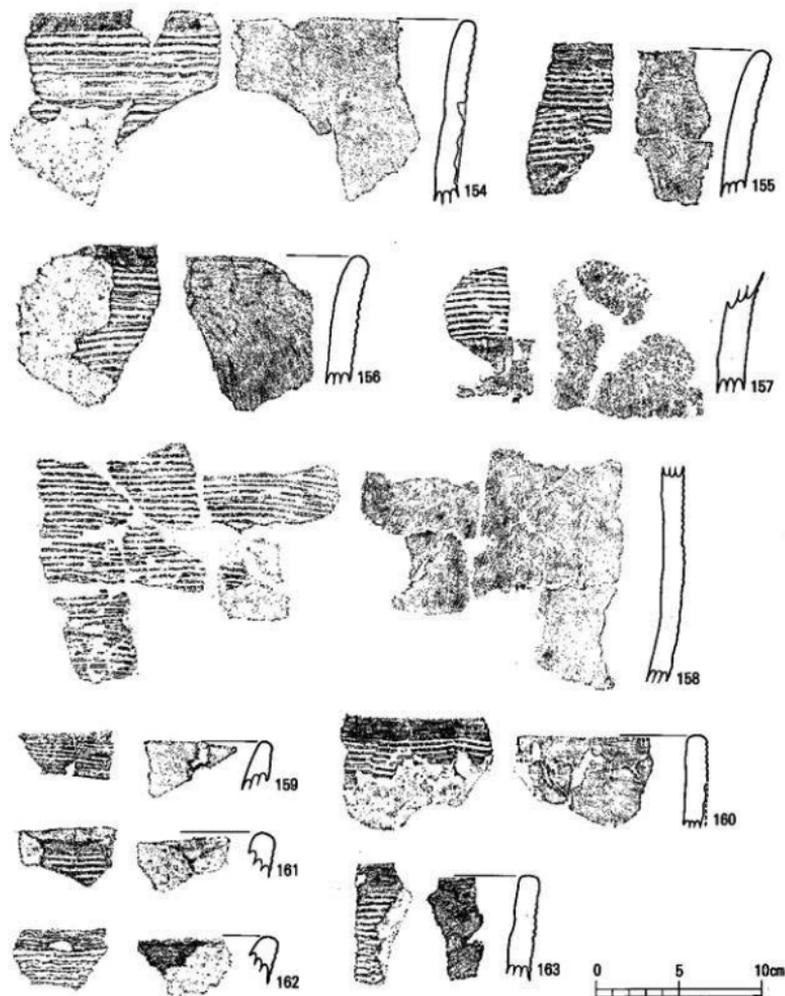
164・165は同一個体で、バケツ状の器形で全体に横位の条痕を施す。口唇部は平坦、底部は厚みのある平底である。166・170は胴部片で、器壁は厚く、横位・斜位の条痕が施される。167～169・171・172は胴部片で、明確な横位の条痕が施される。173は胴部片で、斜方向の貝殻腹縁条痕施文の後ナデを施している。174は横位・斜位の条痕が施される。器壁は湾曲しており、底部付近と思われる。



第20圖 縄文時代早期土器 (10) (1/3)



第21圖 縄文時代早期土器 (1) (1/3)



第22図 縄文時代早期土器 (12) (1/3)

10類 (第23図175~180)

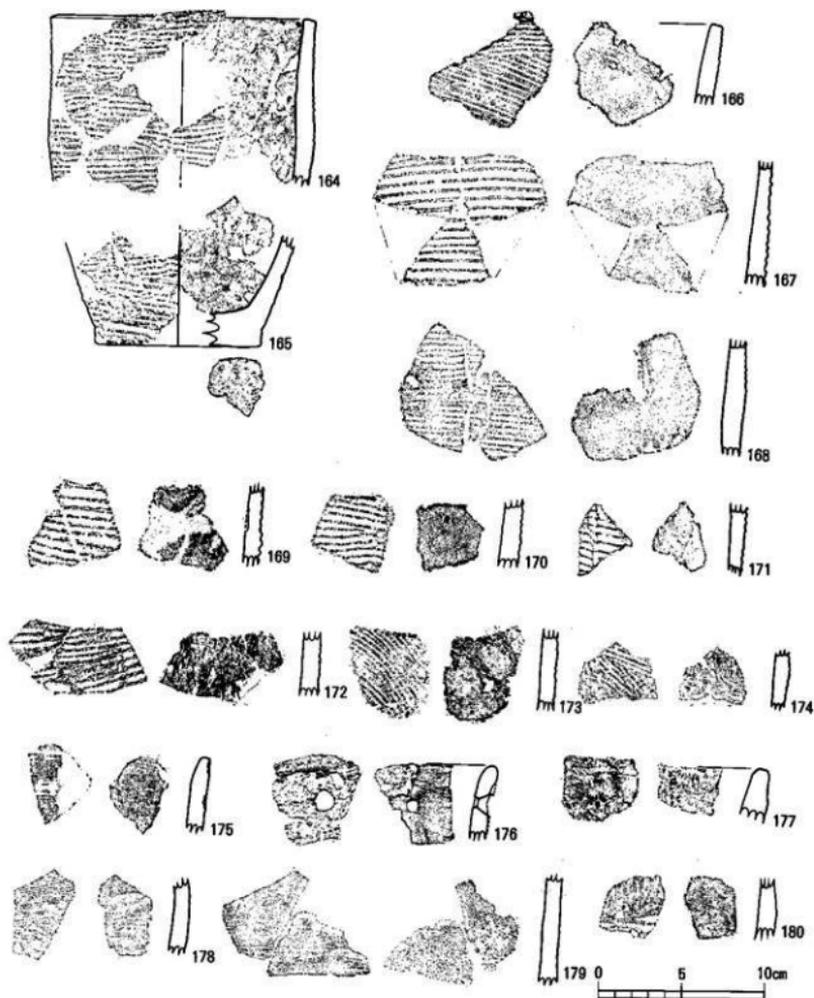
型式不明の口縁部・胴部を一括した。

175は外傾する口縁部に、幅 1.2cmに割った貝殻による刺突文を2段に施している。176は内器面にミガキと丁寧なナデを施している。外器面が剥落しているが、僅かに横方向の貝殻腹縁条痕らしき条痕が確認できる。この内外の様子から、8類に入る可能性がある。また、内外面より穿孔(補修孔)を施している。177は口縁部片で、外器面は無文で、ミガキを施している。178・179は胴部片で、外器面は丁寧なナデの後に横方向の細沈線が施される。180は底部片で、外器面に丁寧なナデの後に縦位の細沈線を施している。

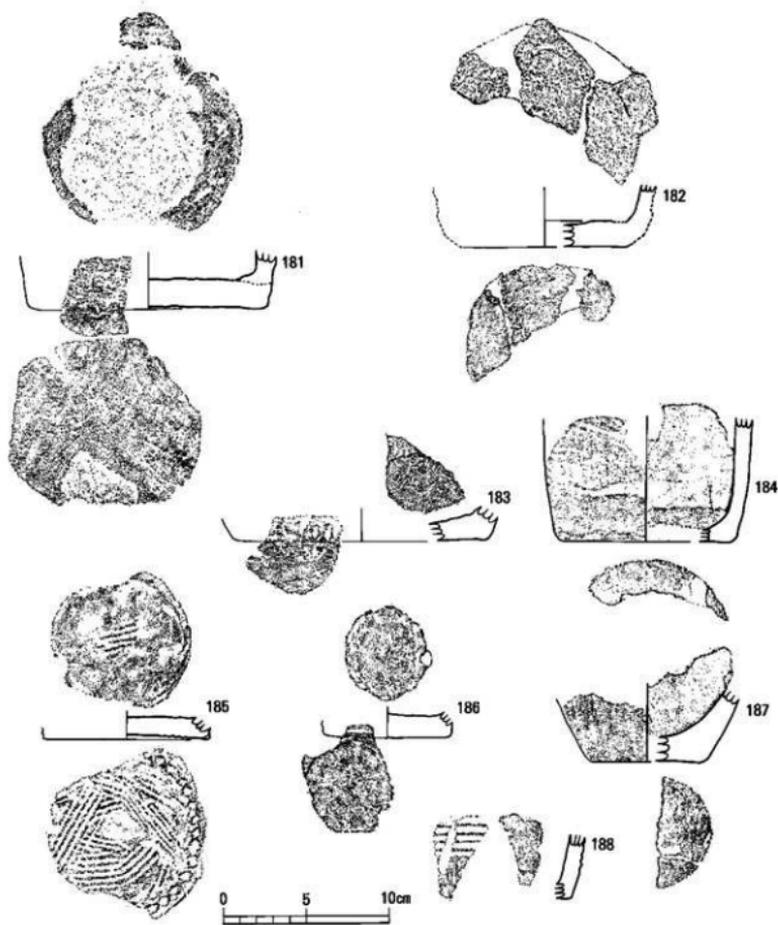
11類 (第24図181~188)

型式不明の底部を一括した。

181・182は、底部から垂直気味に胴部が立ち上がる円筒形の底部である。181は、器壁が厚く径14.3cmの大型で底面にナデを施す。182は径10.2cmで底面にナデを施す。183も垂直気味に胴部が立ち上がるタイプで、全体にナデを施した後に縦位の短刻線を施す。184は外器面に丁寧なナデを施してあり、わずかではあるが、斜方向の条痕が確認される。185は径10.0cmの底面に、ナデ調整の後貝殻腹縁条痕と縦位の短刻線を施す。187は外器面に縦方向のミガキが確認される。188は胴部に横方向の貝殻腹縁条痕と縦位の細刻線を施す。



第23図 縄文時代早期土器 (13) (1/3)



第24図 縄文時代早期土器 (4) (1/3)

・石器（第25図～第35図）

ここでは、アカホヤ火山灰層下の第2文化層出土の石器を扱う。内訳は石鏃45点、尖頭状石器7点、削器9点、石錐2点、石核3点、楔形石器2点、折断剥片1点、使用痕のある剥片12点、加工痕のある剥片4点、不明剥片2点、局部磨製石斧1点、不明楕円形石製品1点、磨石・敲石16点、台石・石皿13点である。

石鏃（第25図189～第26図234）

石鏃は45点出土した。189は石英製で、鏃身の両側縁が屈曲し五角形をなす凹基無茎鏃である。190～199は無茎の基部にU字状の深い抉りを持ち、脚部を顕著にもつ鏃形鏃である。196のみ黒曜石製で、190～195、197～199はチャート製である。200は石英製で、無茎の基部に明確ではない抉りを持ち凹基に近いが、脚部らしき屈曲をもつので鏃形鏃である。201～214は二等辺三角形タイプの無茎凹基鏃である。201は青色系チャート製で、他の無茎凹基鏃の側縁が直線状の三角形平面とは異なり、両側縁が屈曲している形である。209は黒曜石製・212は赤色系チャート製で、両側縁の調整が鋸歯状に施されている。215～220は全て黒曜石製の小型正三角形タイプ無茎平基鏃である。221～225は小型二等辺三角形タイプの無茎平基鏃である。全て黒曜石製である。226～233は小型三角形タイプの無茎凹基鏃である。黒曜石製の226～231は両側縁が直線状であるのに対し、チャート製である232・233は基部の抉りが深く脚部を顕著にもつ。234は黒曜石製で二等辺三角形を呈するが、側縁長が基部長に比べて極端に長い特徴をもつ。小型のものには、剥片素材から片面のみや両面の縁辺付近のみを調整した、いわゆる剥片鏃の類が多く確認される。ここでは、215～234が剥片鏃の類だと考えられる。

尖頭状石器（第26図235～240）

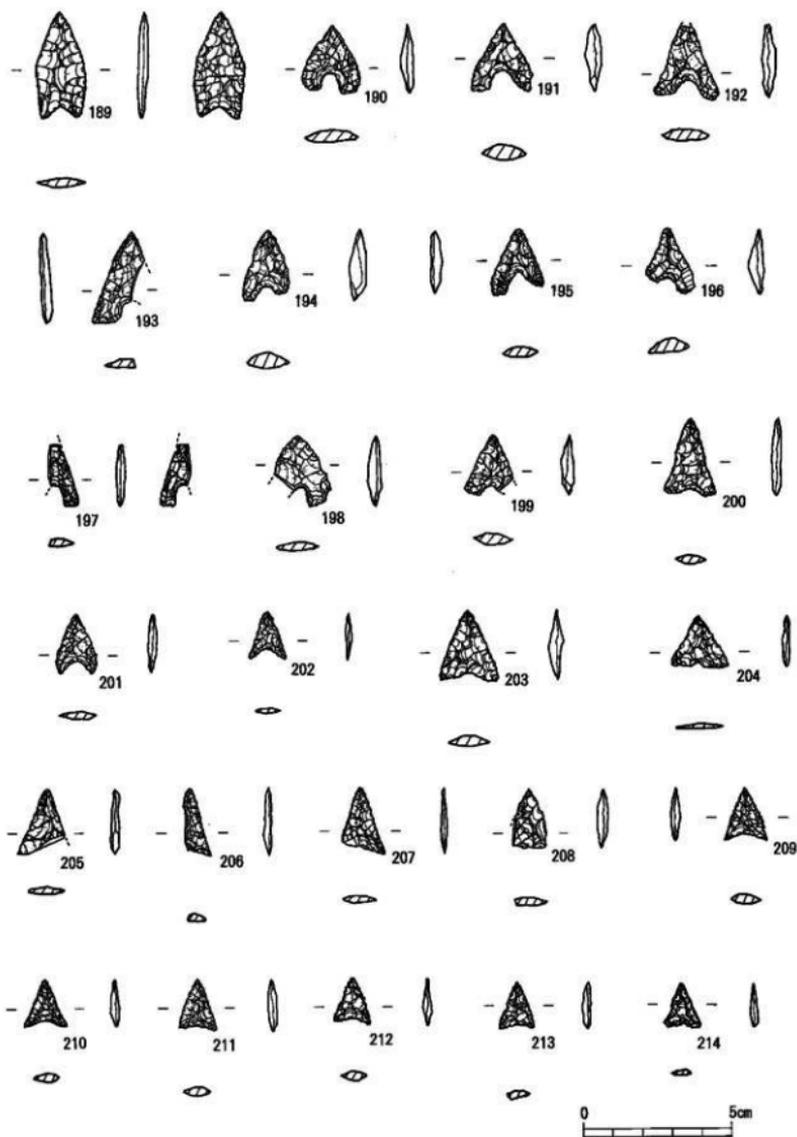
尖頭状石器は6点出土した。全てチャート製である。石鏃に近い形をとるが、石鏃に比べて大きく、重量も重い。235は先端が欠損しているものの、現存長38mmの大型二等辺三角形平基タイプである。236・237は正三角形平基タイプであり、先端を鋭く加工している。238・239は正三角形凸基タイプである。特に239は基部を舌部のように作りだしている。240は基部が欠損しているが、おそらく正三角形凸基タイプである。

削器（第27図241～249）

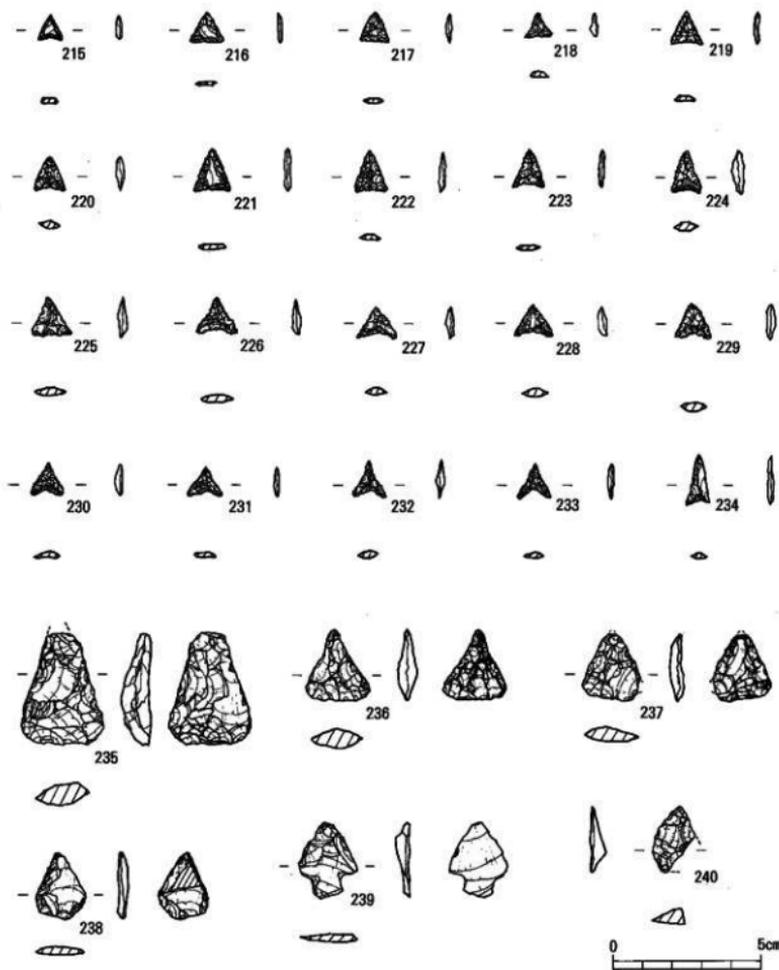
剥片の側縁部の一部に連続して加工を施したもので、9点出土した。241はチャート・244は黒曜石の縦長剥片を素材とし、両側縁辺に片面のみの加工を施している。242・243はチャートの縦長剥片を素材とし、両側縁辺に両面から明瞭な加工を施している。245はチャート製で、下側縁辺に両面から加工を施している。246は黒曜石製・247はチャート製で、下側縁辺に片面のみの加工を施している。248は赤色系のチャート製で、不定形剥片を上下両側縁辺に加工を施しているが、使用痕跡は下側縁のみである。249は黒曜石製で、不定形の剥片の上側を除く側縁全体を大きく打ち欠き整形することによって刃部を作りだしている。

石錐（第27図250・251）

不定形の剥片の一端に加工調整を行ったもので、2点出土した。250、251ともに黒曜石製で、いずれも不定形剥片を素材とし、五角形に近い形に整えた後に、一端に丁寧な調整を加えて錐部を作りだしているが、251の両面に調整を行っているが、250は片面のみの調整である。



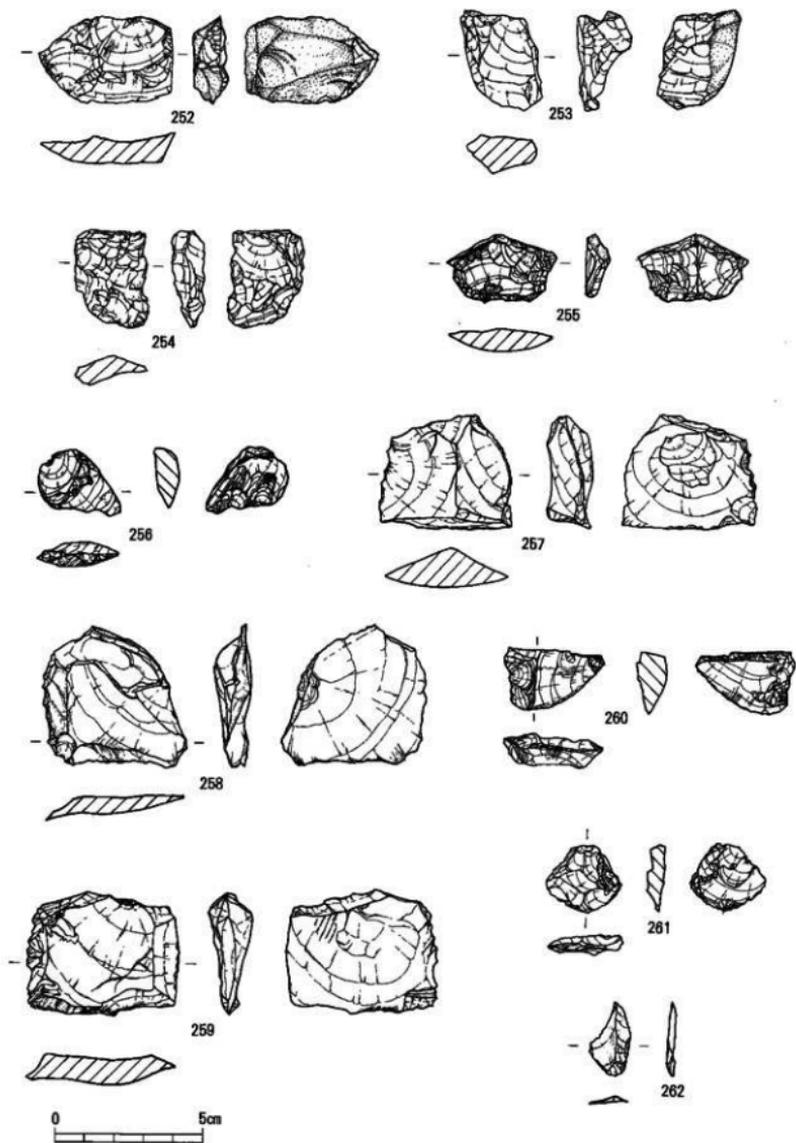
第25圖 縄文時代早期石器 (1) (3/5)



第26圖 縄文時代早期石器 (2) (3/5)



第27図 縄文時代早期石器 (3) (3/5)



第28圖 縄文時代早期石器 (4) (3/5)

石核 (第28図252~254)

石核は3点出土し、いずれも黒曜石製である。252は片面のみ利用で、一定方向ではなく不規則に剥離を行っている。253・254は不整形の剥片を表裏両面のほぼ全周にわたって剥離を行っている。

楔形石器 (第28図255・256)

向かい合った縁辺部に階段状の対向する剥離痕跡が確認されるもので、2点出土した。255は、上端に打撃面を残した状態のチャート製不定形剥片素材で、両側縁から剥離を行い、下・両側縁にエッジを作りだす。縦断面は楔形を、横断面はレンズ形をなす。256は黒曜石製不定形剥片素材で、両側縁とくに片側縁に集中した剥離を行い、下・両側縁にエッジを作りだす。縦断面は楔形を、横断面はレンズ形をなす。

折断剥片 (第28図257)

剥片を折断することによって使用面を作りだすもので、1点出土した。257はホルンフェルス製であり、先端部を折断しているが、先端部だけでなく両側縁辺両面にも使用痕をもつ。

使用痕のある剥片 (第28図258~269)

剥片の側縁の一部に使用の痕跡が認められるもので、全部で12点出土した。258・259はホルンフェルス製不定形剥片の下部及び片側縁辺面に使用の痕跡が見られる。260は黒曜石製横長剥片の下側縁辺両面に使用痕が見られる。261は黒曜石製不定形剥片の下側縁辺面に使用痕が見られる。263は砂岩製横長剥片の下側縁辺面に、刃こぼれのような使用痕が見られる。264・265は黒曜石製縦長剥片であり、264は片側縁辺面に、265は片側縁辺面に、使用痕が見られる。266・267は黒曜石製不定形剥片であり、266は両側縁辺両面に、267は下側縁辺両面に、使用痕が見られる。262・268・269はチャート製不定形剥片であり、262・268は片側縁辺片側に、269は両側縁辺片側に使用痕が見られる。

二次加工のある剥片 (第29図270~273)

剥片の側縁の一部に未連続の加工を施したものの。全部で4点出土した。270はチャート製で、不定形剥片の下側縁両面に加工痕が見られる。271・273は黒曜石製で、不定形剥片の両側縁両面に加工痕が見られる。272は黒曜石製で、不定形剥片の片側縁片面のみに加工痕が見られる。

不明剥片 (第29図274・275)

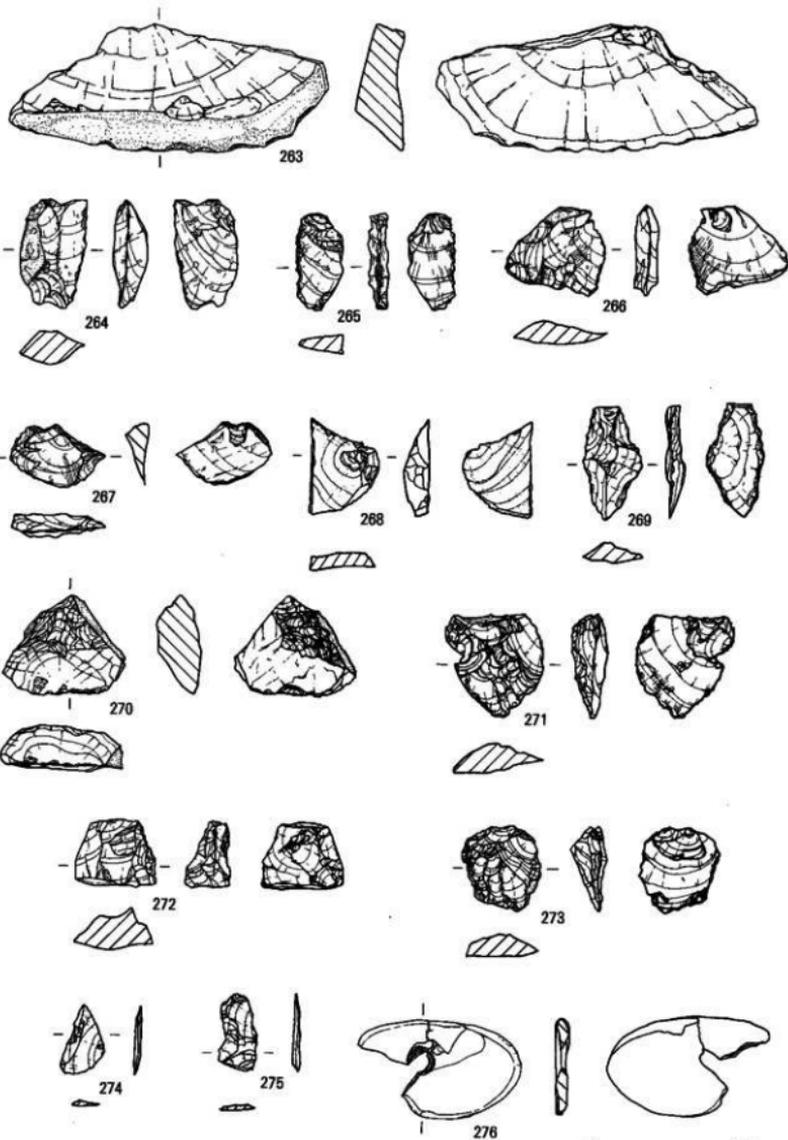
274は珪質岩製で、二等辺三角形形状の剥片。特に意図的な加工は見られない。275はチャート製である。

不明楕円形石製品 (第29図276)

276は粘板岩製である。1/4程の欠損と片面の剥落で完全な形でないが、残存状態から推定復元すると、長幅58mm(現存長は55mm)、短幅33mm、厚さ4mmの扁平楕円形をなす。中心部付近に直径約7mmの穿孔が認められる。穿孔部から続く切れ目が存在するようにも見えるが、欠損のため判断しづらい。耳飾りなどの垂飾品の可能性がある。

局部磨製石斧 (第30図277)

1点出土した。277は石材がホルンフェルスで、基部から刃部にかけてほぼ同じ幅である。基部から胴部にかけて大きく剥離を行っている。刃部は、両面を研磨することにより蛤円形に作りだしている。また、刃部には、全体的に研磨痕とは別に磨痕が、端部には刃こぼれらしき使用痕が確認できる。



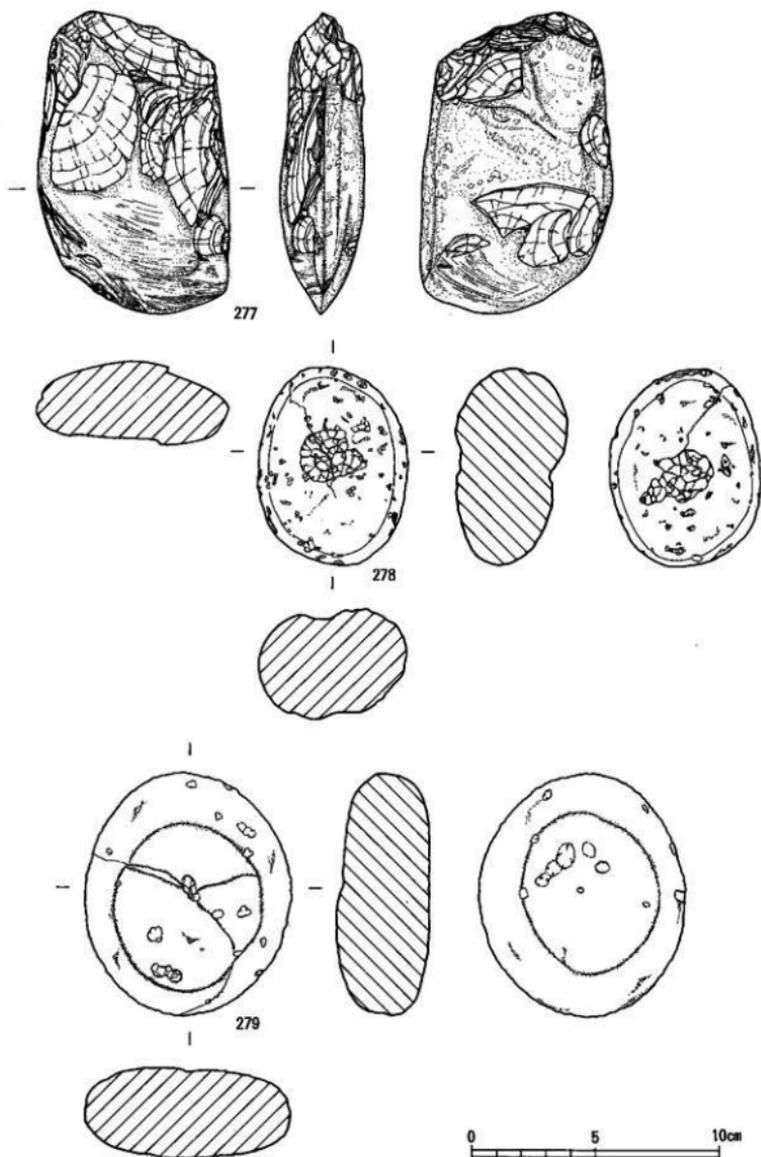
第29圖 繩文時代早期石器 (5) (3/5)

磨石・敲石（第30回278～第33回293）

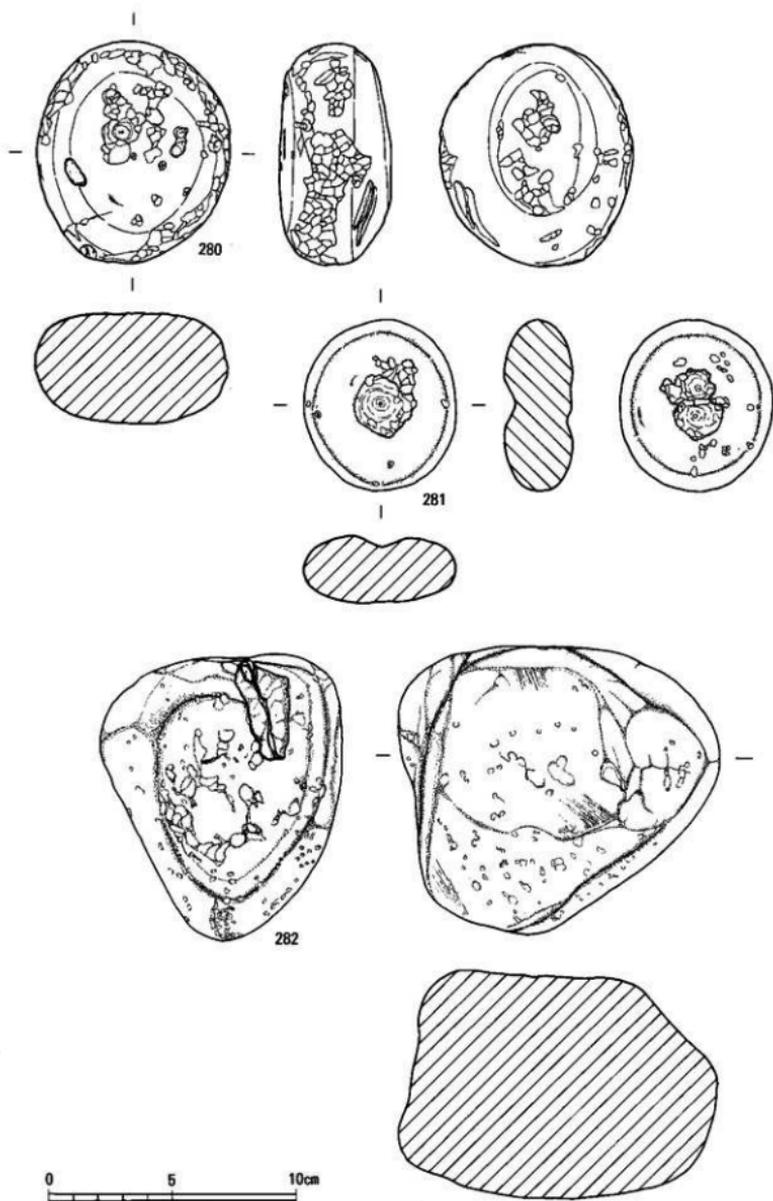
合計16点出土した。使用痕として敲打痕をもつもの、磨痕をもつもの、敲打痕と磨痕の両方をもつものがある。石材は、278・279・284が凝灰岩、280・283・285・291が尾鈴山系酸性凝灰岩、281・286～290・292・293が砂岩、282が輝石安山岩である。278・279は楕円形を呈し、風化のため判断しがたい部分もあるが、278は河面中央部と両側に、279はさほど顕著ではないが河面全体に、敲打による凹部が認められる。280は楕円形を呈し、河面中心部と両側面を中心に敲打痕が認められる。281も楕円形を呈し、河面中心部に顕著な敲打痕が確認できる。282は他の敲石に比べ石が大きく、底部に敲打痕をもつ。底部には使用時のものか判断しづらいが、欠損部分が確認される。283・286は片側面に、284は片面中心部付近に、偏った敲打痕が認められる。285は欠損しているものの楕円形を呈していたと思われ、側面に敲打痕と磨痕が同じ箇所に認められる。287は棒状を呈し、上下両端部両面に敲打痕が認められる。288は片面中心部に敲打痕を、289は片側面に磨痕を、293は顕著ではないが側面に敲打痕を、それぞれ有する。この3点は、使用痕跡のある面の裏側を打ち欠いており、使用後の欠損の可能性もあるが、おそらく握り易いように調整したと考えられる。いずれも欠損しているが、楕円形を呈していたと思われる。290～292はそれぞれ欠損しているが、290は片面中心部に敲打痕が、291は側面に敲打痕が、292は端部に磨痕が認められる。

台石（第34回294～第35回306）

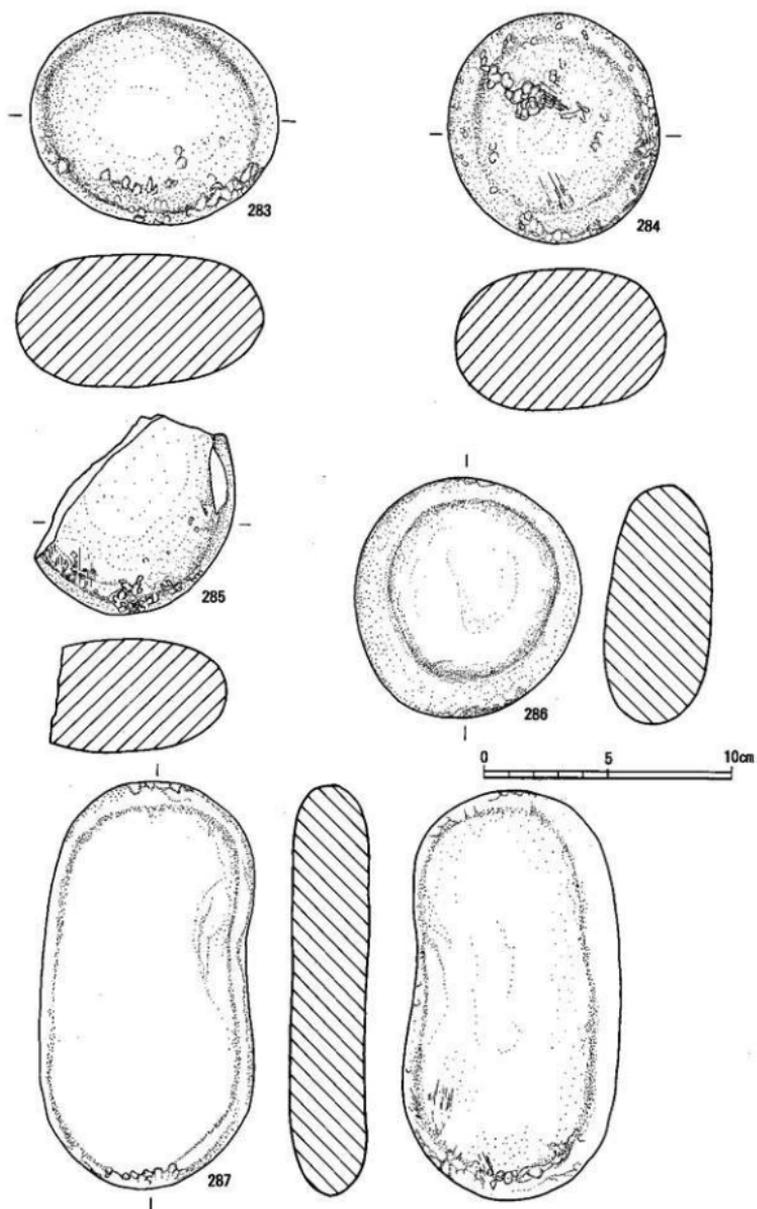
13点出土した。使用痕として敲打痕（剥離痕も含む）をもつもの、磨痕をもつもの、敲打痕と磨痕の両方をもつものがある。石材は、294～301・304～306が輝石安山岩、302・303は凝灰岩である。294は平坦部に敲打による剥離痕が顕著である。295は平坦部に敲打による剥離痕、及び磨痕が顕著に認められる。296・299は平坦部に顕著ではないが磨痕が、297は平坦部一面に敲打痕が認められる。298は平坦部中心ではなく、側縁近くに磨痕が確認される。300は、平坦部中心と、側縁近くに敲打による剥離痕が顕著ではないが確認される。301は前述したように2号配石状遺構（第7回2参照）に用いられていたものである。表面の中心は窪んでおり、石皿にも見えるが、磨痕は確認されず、敲打痕のみが確認される。いずれにしても廃棄後、配石状遺構に転用したものだと考えられる。302・303は僅かではあるが磨痕が見られる。303の平坦部にある窪みは磨痕ではなく、自然のものである。304～306は敲打による剥離痕が認められる。



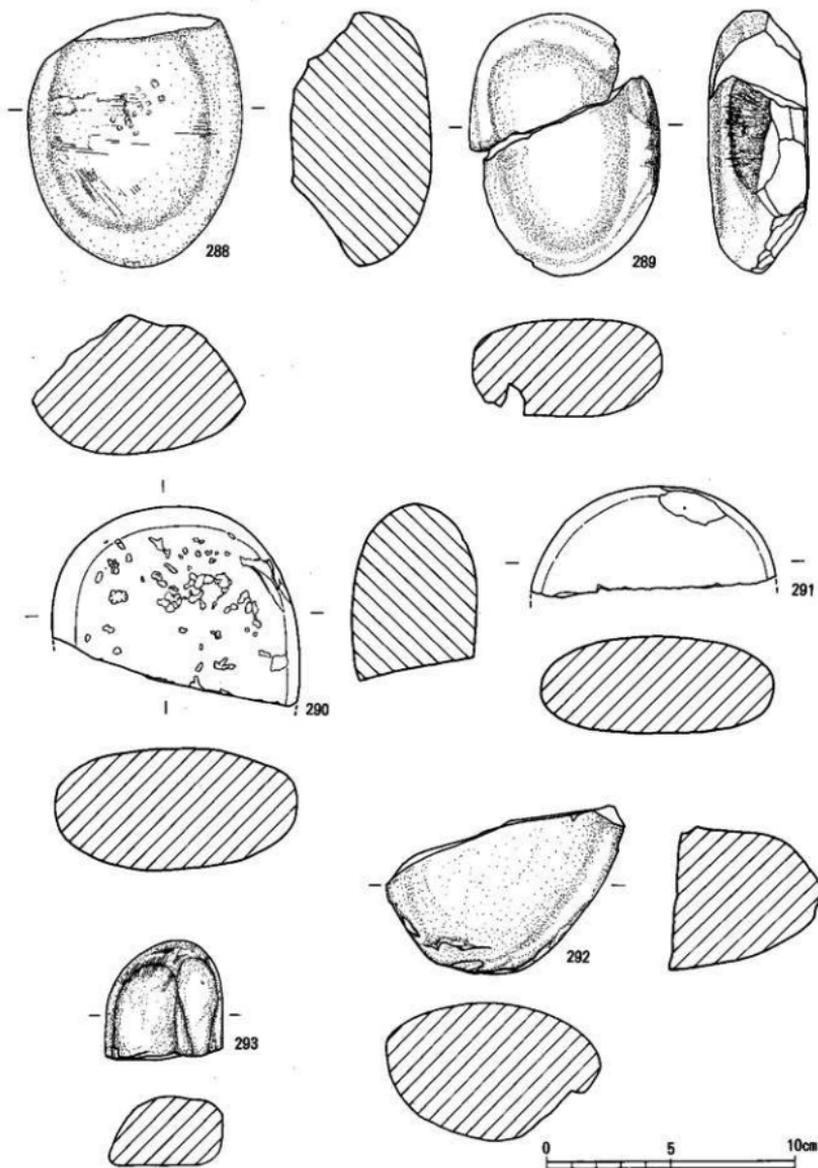
第30圖 縄文時代早期石器 (6) (1/2)



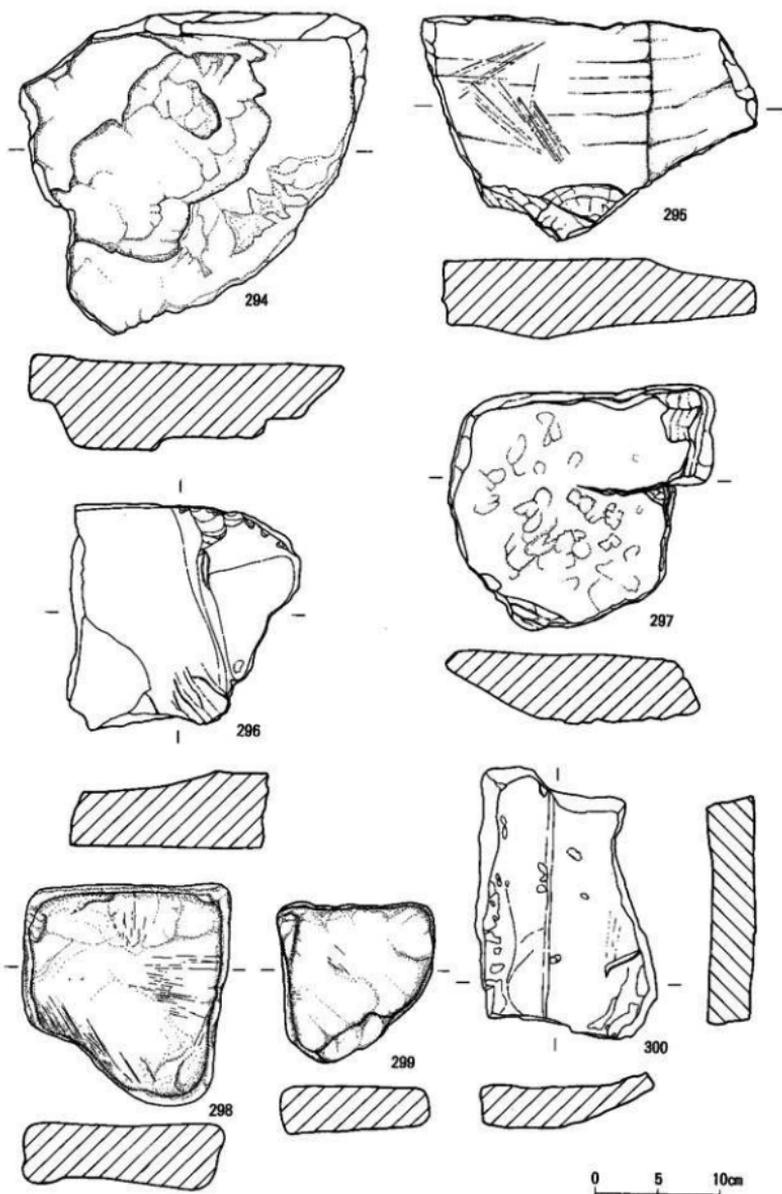
第31圖 縄文時代早期土器 (7) (1/2)



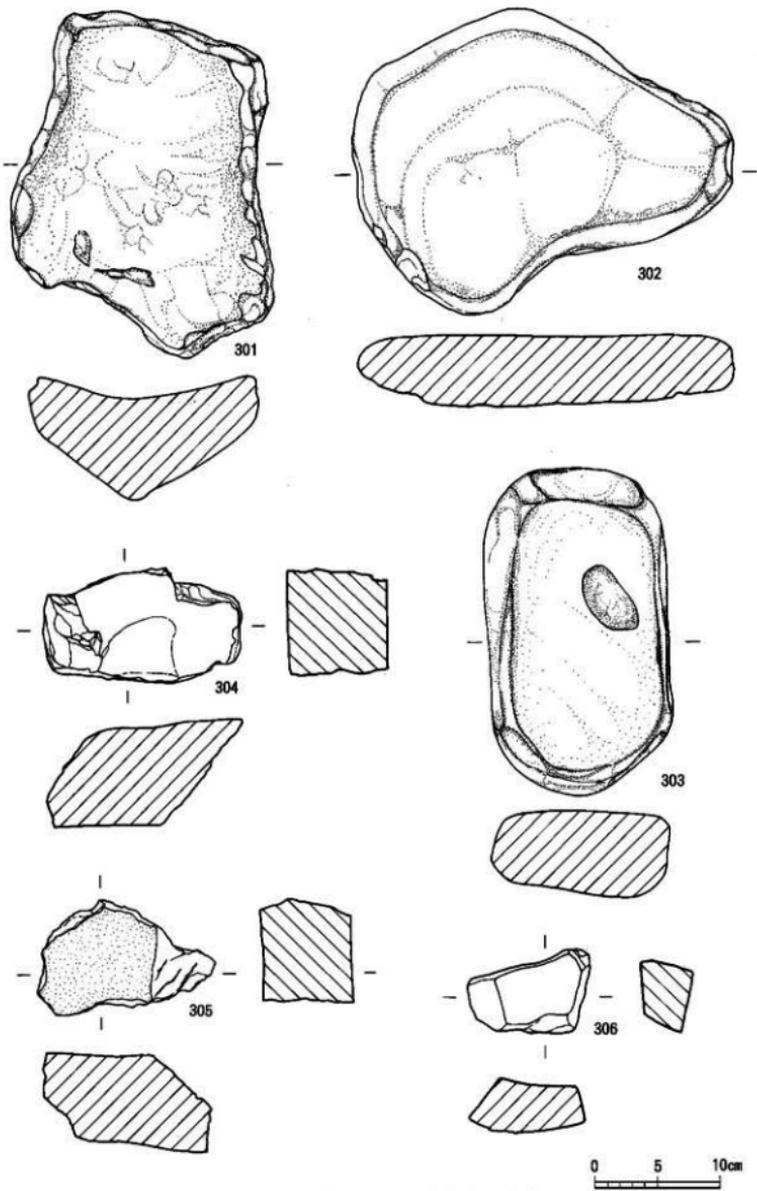
第32圖 縄文時代早期石器 (b) (1/2)



第33圖 縄文時代早期石器 (9) (1/2)



第34圖 繩文時代早期石器 (10) (1/4)



第35図 縄文時代早期石器 (Ⅱ) (1/4)

・縄文時代前期～後期の遺物（第37図）

第Ⅲ層中より、縄文時代の土器・石器が出土した。

土器（第37図307～330）

縄文時代前期・後期の土器片が出土した。307～329は、短沈線による施文が主体であり、縄文時代前期の曾畑式土器の系譜をひくと考えられる。330は、精製磨研土器であり、縄文時代後期の西平式と考えられる。

307～312は深鉢の口縁部である。外器面は、斜方向の沈線と横方向の短沈線を施す。内器面は、横方向のナデ後横方向の短沈線を施す。口唇部は平坦で、斜・横位の刻目を施す。307～309・312は、やや外反した口縁に紐状の貼付突帯をもつ。310・311は、横方向の沈線のみである。

313～329は深鉢の胴部である。313～317は、外器面に縦・斜方向の短沈線と横方向の沈線を施す。314と316は同一個体である。319・320は、紐状貼付突帯をもち、突帯付近を沿う形で刺突文を施す。外器面は、縦・横・斜方向の沈線を施す。318・322・324・326は、外器面に横・斜方向の沈線を施す。323・325・327・328は、連続山形文を重ねた複合文を施す。

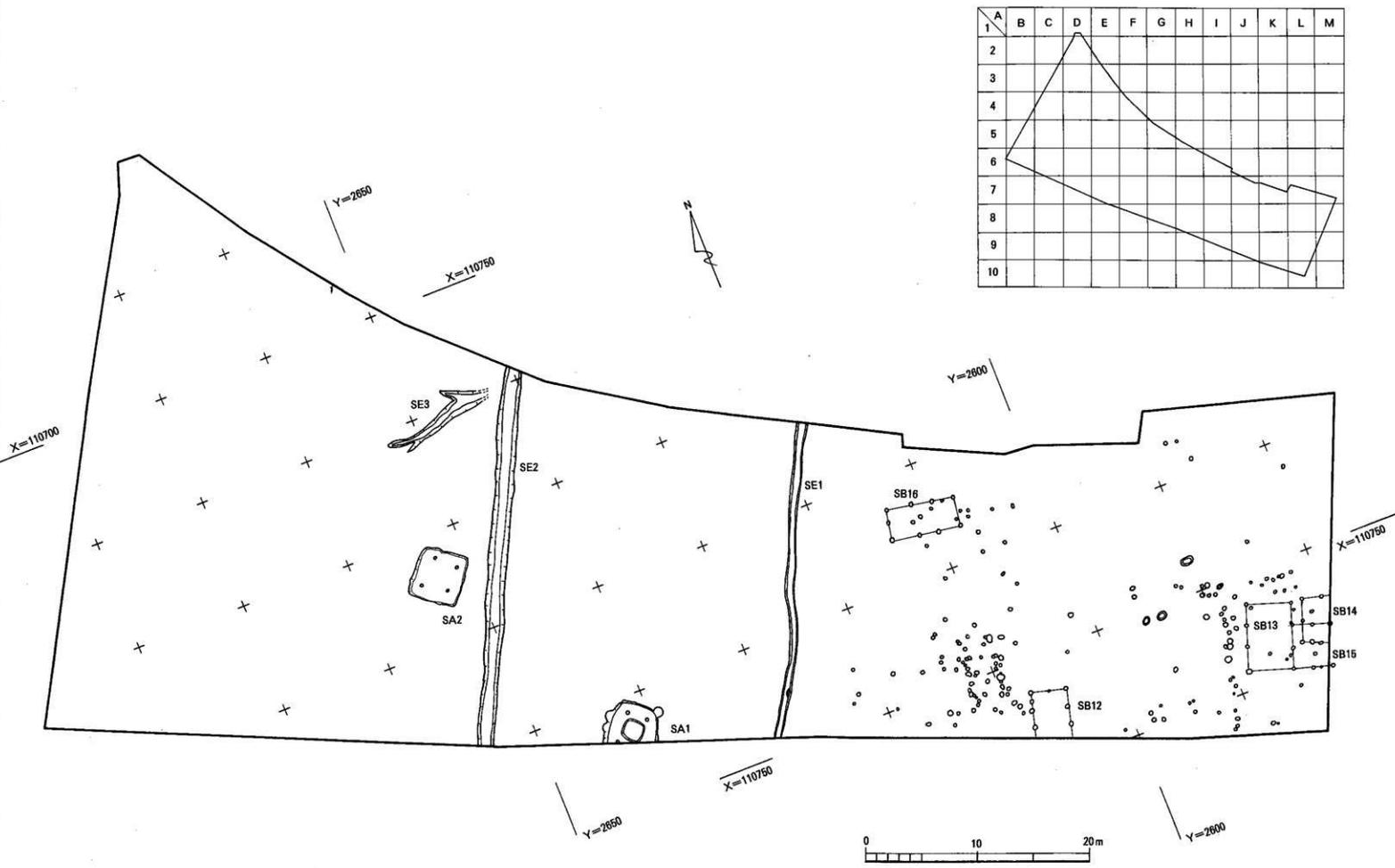
330は深鉢口縁部である。波状口縁で、波頂部に逆S字状の沈線文を施す。口縁部の屈曲部には、横位の沈線を施す。

石器（第37図331～334）

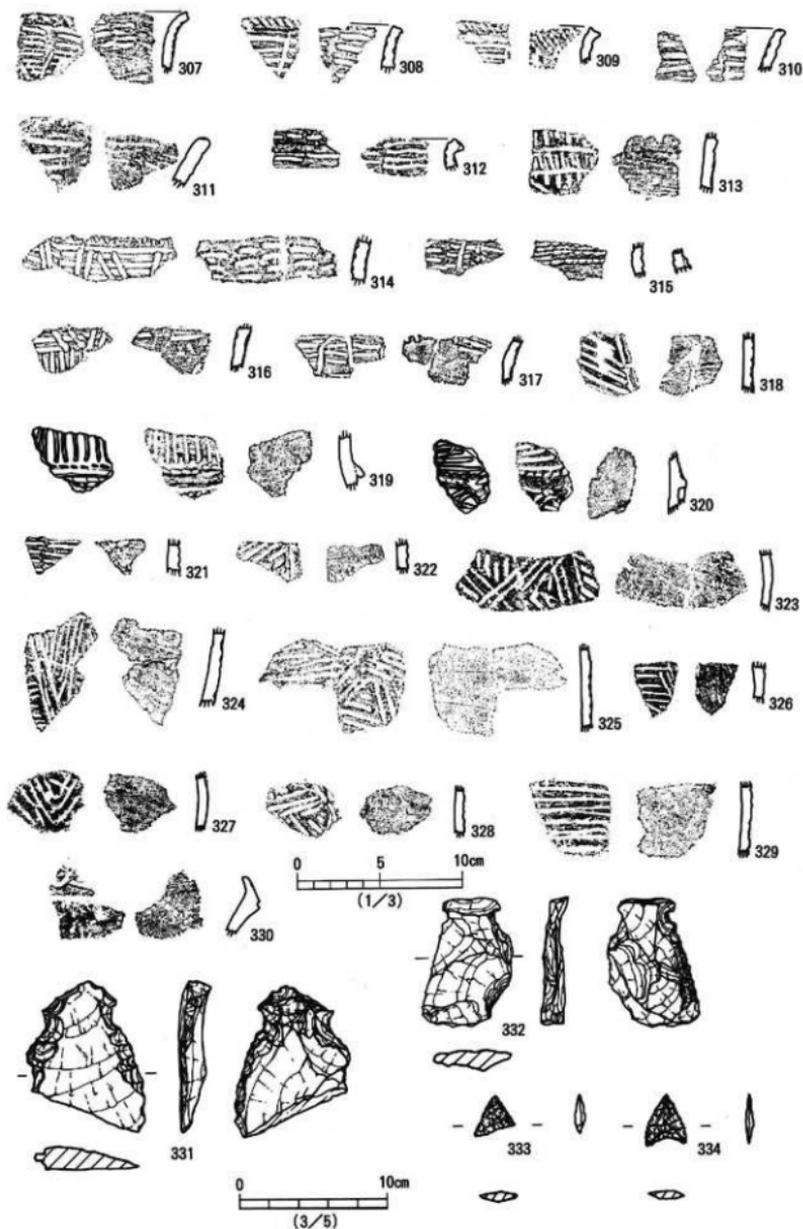
石匙2点と石鏃2点が出土した。

331・332は珪質岩製の石匙である。両方とも欠損しているが、打面下方の両側辺を加工して、つまみ部を作りだしている。片側縁片面全体に加工を施す。

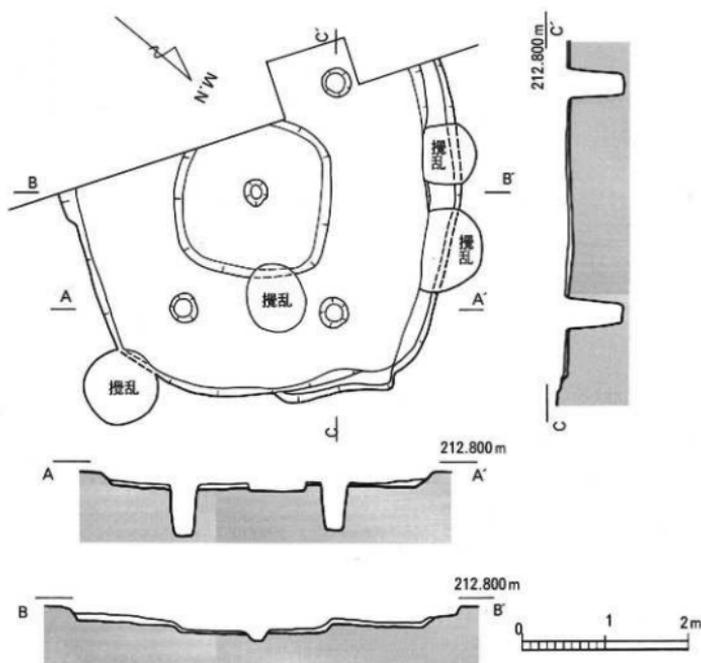
333・334は石鏃である。333は黒曜石製で、基部の一部が欠損しているが、小型正三角形無茎凹基である。334は黒曜石製で、両側縁が緩やかに湾曲する二等辺三角形無茎凹基である。



第36圖 第三層檢出遺構物分布圖 (S=1/300)



第37圖 縄文時代前期・後期 土器 (1/3)・石器 (3/5)



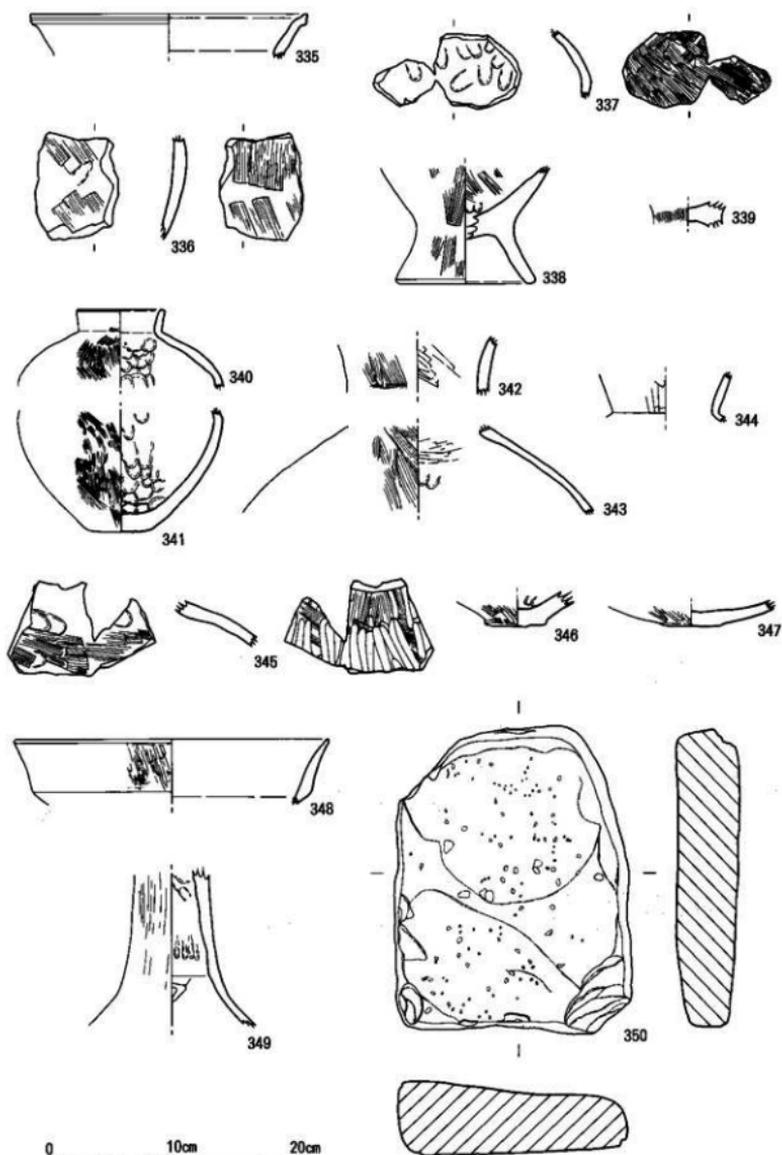
第38図 1号竪穴住居跡 (1/60)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

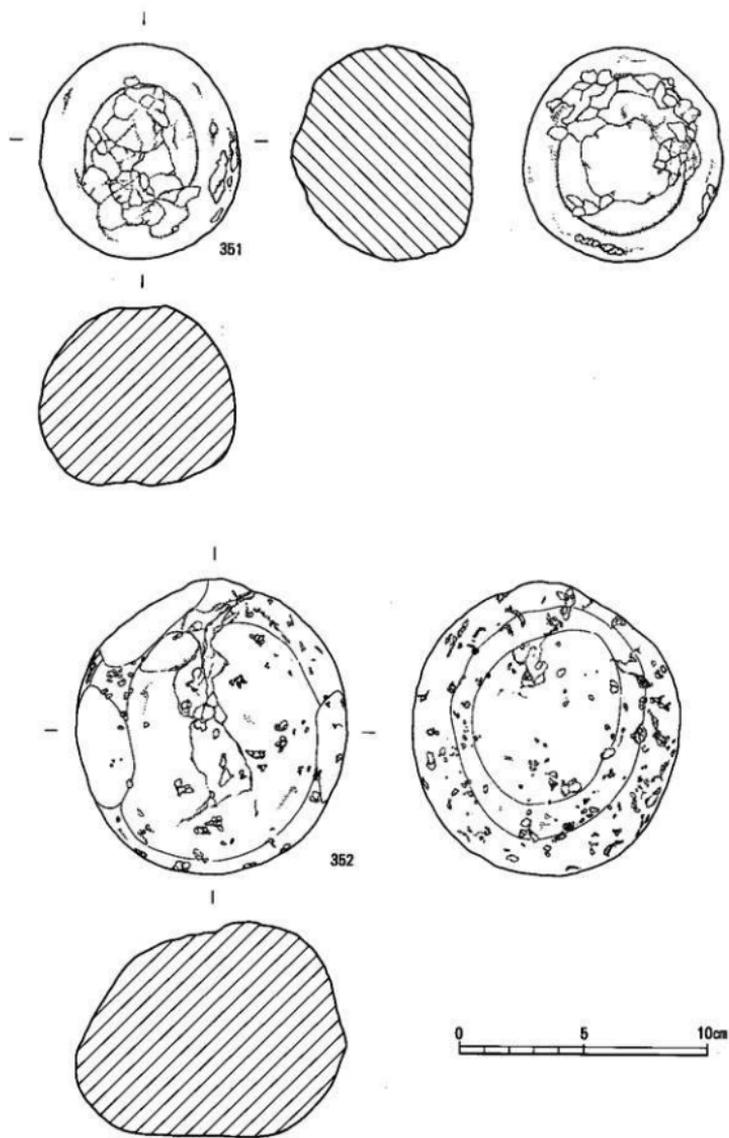
竪穴住居跡2基が検出され、土器・石器・鉄器が出土している。

SA1 (第38～40図)

調査区南縁の8F区に検出した。一辺3m強の隅丸方形プランで、床面中央に方形の土坑を有し、周囲がベッド状となる。遺構の依存状況は悪く、検出面からの深さは約20cmである。床面は、アカホヤ火山灰と黒色土の混土による貼り床で、柱穴は貼り床を除去した段階で確認した。主柱穴は方形配置の4本柱で、1基は調査区外にあり検出していない。床面中央の小ピットは、掘り形も浅く柱穴とは見なし難い。焼土・炉などの火処は不明である。遺物は検出面付近で土器の小片が出土した。床面から浮いた状態ではあるものの、遺構の残存状態が悪いため、レベル的には住居埋土の下位に位置し、遺構と遺物の時期差はさほど大きくはないと思われる。

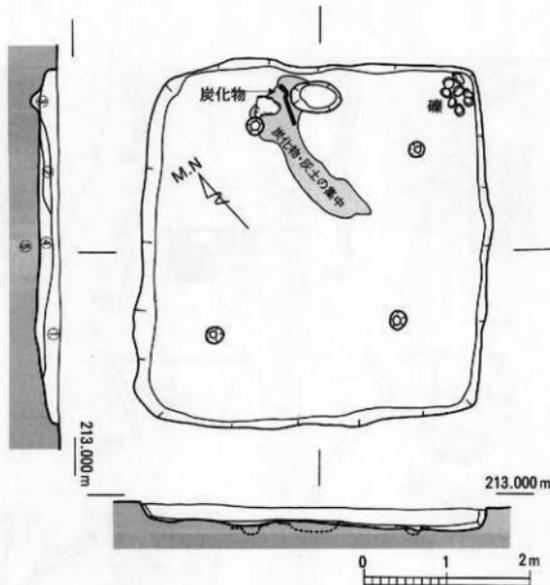


第39图 1号竖穴住居跡出土土器・石器 (1) (1/4)



第40图 1号竖穴住居跡出土土器・石器 (2) (1/2)

- ① 彩色土層 中・下部、黒土層の厚層部と区別している。厚土層と区別される。
- ② 厚土層の上部層 厚い、底が少し凹んだ上部多量の炭化物層。
- ③ 厚土層の下部層 厚い、底が少し凹んだ下部多量の炭化物層。
- ④ 厚土層の上部層 厚い、底が少し凹んだ上部多量の炭化物層。
- ⑤ 厚土層の下部層 厚い、底が少し凹んだ下部多量の炭化物層。



第41図 2号竪穴住居跡 (1/60)

335~339は甕である。335は「く」字形に屈曲する口縁部で、端部は受け口状に小さく屈曲する。

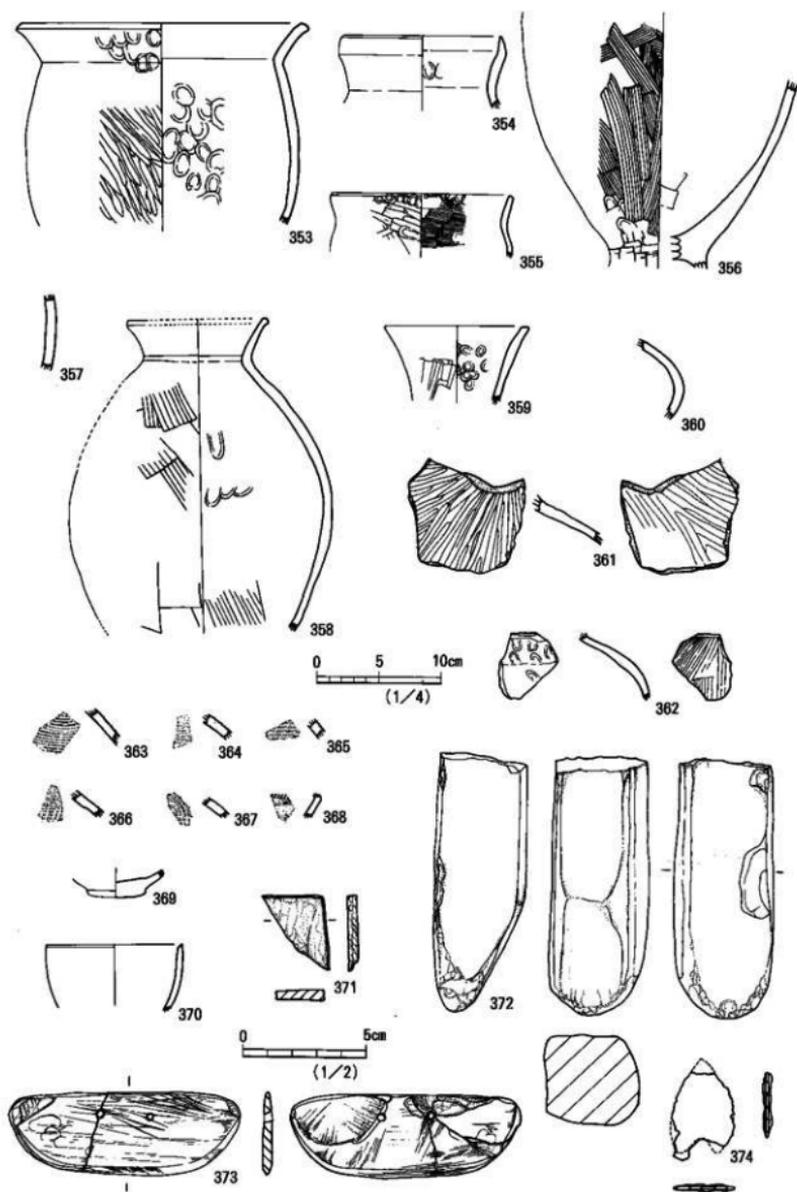
336・337の胴部は、外器面に密なハケ目が見られる。338・339は脚付きの底部で、「ハ」字状に外に張り出す。340~347は壺である。340・341は同一個体で、短い直口縁に球形の胴部、しっかりとした平底を持つ。調整は粗いハケ目である。342・343は大型壺の同一個体で、外反気味の口縁部と肩張りのない胴部である。355は胴部で、ハケ目の後ミガキを施す。346・347は底部で、小さく突出するボタン状の平底を持つ。348・349は高坏で、同一個体である。外反気味で短い坏口縁と、円柱状に長く延びる脚、明瞭な稜を持たずに滑らかに開く裾部である。

350は台石、351・352は敷石である。350・351は輝石安山岩、352は凝灰岩で、敲打痕が明瞭に認められる。

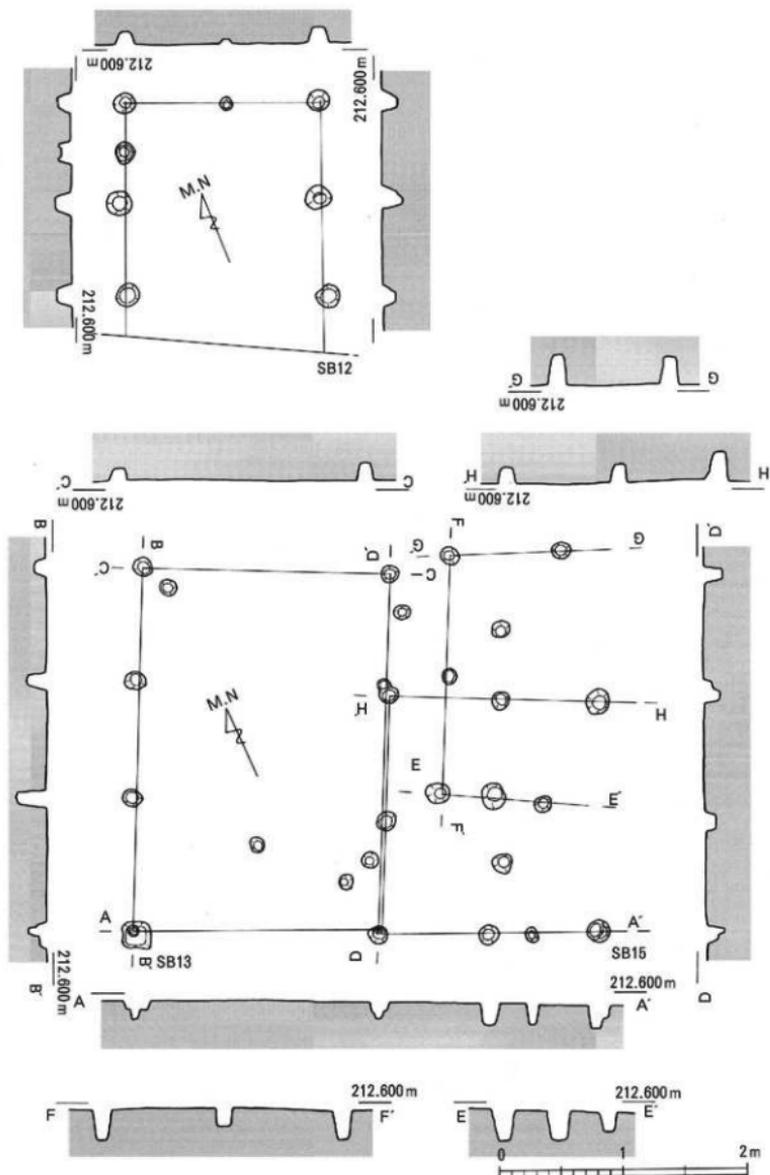
SA 2 (第41・42図)

調査区中央部からやや西寄りの6 E区で検出された。一辺約4.2mの隅丸方形プランで、第Ⅲ層から第Ⅳ層を掘り込んでいる。床面は、アカホヤ火山灰土を僅かに含む褐色土の貼り床である。主柱穴は貼り床段階で確認し、方形配置の4本柱である。北辺中央部に、長さ60cm短径40cmの楕円形の掘り込みが確認された。この掘り込みの西側には集中した炭水化物の広がりと、長さ60cmの木炭片が確認されたことから、炉跡などの火処の可能性がある。また、北東隅に拳大の円礫が10数個、また周辺に土器の集中が確認され、作業の場などの空間利用が想定される。遺物はレベル的にほとんどが床面直上から出土した。

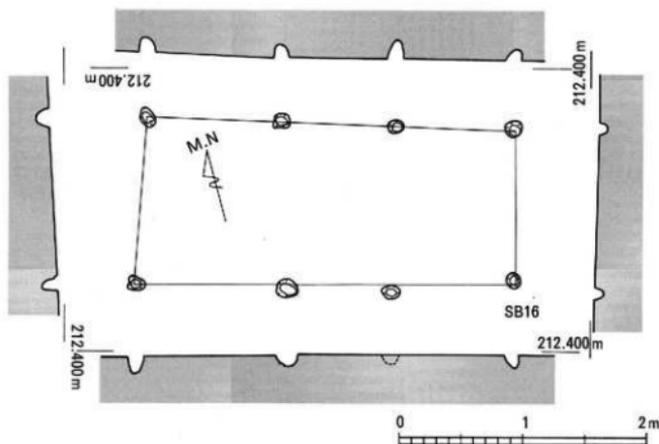
353~357は甕である。353はく字形に屈曲する口縁をもつ。356は上げ底をもつ底部である。358~369



第42图 2号竖穴住居跡出土土器(1/4)·石器(1/2)·铁器(1/2)



第43图 掘立柱建物跡 (1)



第44図 掘立柱建物跡 (2) (1/40)

362は肩部で、外器面にミガキを施す。363~368は、いずれも免田式土器の長頸壺の胴部であり、重弧文が施してある。369は小さく突出したボタン状の平底をもつ底部である。壺の底部だと考えられる。370は鉢で、ハケ目の後ナデを施す。371は粘板岩製、372はホルンフェルス製の砥石である。373は粘板岩製の石廬丁である。374は欠損部分が多いが、三角形兩脚式の無蓋鉄鉢だと考えられる。

第3節 その他の遺構と遺物

時期を限定し得ない遺構として、掘立柱建物5棟と溝状遺構3条を検出した。また、遺構に伴わない遺物が若干出土している。

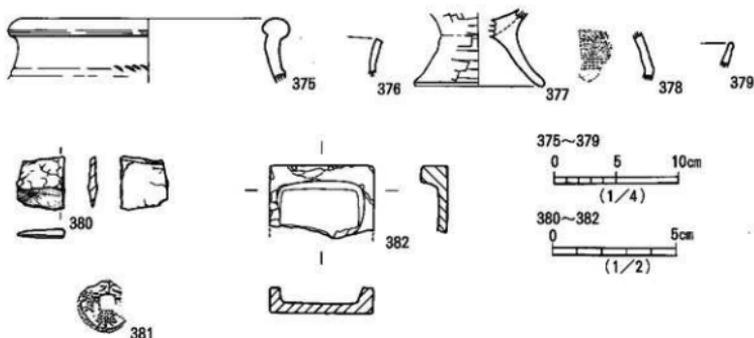
・掘立柱建物

SB12 (第43図上)

SB12は、調査区南縁に検出された。南の調査区外に延びており、現状で桁行3間以上・梁行2間である。棟方位はN-22°-Eで、柱間の平均は157cmである。

SB13~15 (第43図下)

SB13~15は、調査区南東隅に重複して検出された。SB13は、3×1間で、桁行柱間は平均で194cm、梁行は397cmである。棟方位はN-26°-Eである。SB14は、東側調査区外に延びており、現状で桁行2間以上・梁行2間である。棟方位はN-63°-Wで、柱間の平均は桁行で172cm、梁行で194cmである。SB15は、SB14同様調査区外に延びる。SB13と柱穴の一部(3基)が重複しており、本来的にL字形の平面形を持つ同一の建物であった可能性も否定できない。棟方位はSB13に直交するN-64°-Wで、柱間の平均は桁行で171cm、梁行で190cmである。



第45図 表土・包含層出土遺物 (375~379は1/4、380~382は1/2)

S B 16 (第44図)

S B 16は、調査区北側に検出された。3×1間で梁行は平均で133cm、桁行306cmである。梁行の柱間の平均は99cmである。棟方位N-18°-Wである。

・溝状遺構 (第36図)

溝状遺構は全部で3条検出された。S E 1は幅約70cm、深さ約20cmで調査区を南北に縦断する形で検出された。S E 2はS E 1平行する形で幅約160cm、深さ約35cmである。S E 3はS E 2に付属する溝である。いずれも第Ⅱ～Ⅲ層の面で検出された。年代については不明である。

・表土・包含層出土の遺物 (第45図)

375は弥生土器の甕の口縁部である。口縁部は玉縁状をなし、口縁部には紐状の貼付突帯と爪痕が認められる。

376は小破片で風化が著しく詳細は不明であるが、弥生土器の甕の口縁部だと考えられる。

377は弥生土器の口縁部であるが、小破片で外器面が黒変しており器種等の詳細は不明である。

378は免田式長頸壺の胴部である。外器面は少し風化しているが、「く」の字形に屈曲した上半分に上向きの重弧文と横線文が認められる。

379は弥生土器脚付き甕の底部である。「ハ」の字状に外に張り出す。工具によるナデをほどこしている。

380は砂岩製の石器である。欠損しており器種については判別し難いが、稜線を設けてある面に磨痕が確認でき、磨製石器の一種だと考えられる。

381は貨幣で、永楽通宝である。裏面は剥落が著しく不明である。

382は石製碗である。端正な長方形の造りで、幅4.2cm、墨溜まり深7mmである。

第IV章 自然科学分析の結果

第1節 内屋敷遺跡の土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

宮崎県中南部の火山灰土中には、霧島火山や桜島火山などから噴出したテフラが認められる。テフラの中には、噴山年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡において求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで年代の不明な土層の認められた内屋敷遺跡において地質調査と屈折率測定を行い、示標テフラの層位を求めて、土層の形成年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった地点は、9-Iグリッドである。

2. 土層の層序

9-Iグリッドでは、下位より褐色スコリア混じり黄褐色土（層厚20cm以上、スコリアの最大径8mm, X IX層）、灰色がかった褐色土（層厚11cm, X VIII層）、灰褐色土（層厚11cm, X VII層）、褐色がかった灰色土（層厚4cm, X VI-2層）、褐色スコリア混じりで褐色がかった灰色土（層厚13cm, スコリアの最大径10mm）、褐色スコリアに富む灰色土（層厚8cm, スコリアの最大径14mm, 以上X VI-1層）、褐色スコリアを多く含む灰色土（層厚15cm, スコリアの最大径14mm, X V層）、褐灰色土（層厚11cm, X IV層）、褐色スコリア混じり黄褐色砂質土（層厚16cm, スコリアの最大径9mm, 石質岩片の最大径13mm, X III-2層）、褐色スコリア混じり黄褐色土（層厚23cm, スコリアの最大径12, 石質岩片の最大径24mm, X III-1層）、褐色スコリア混じり灰褐色土（層厚14cm, スコリアの最大径11mm, X II層）、褐色がかった灰色土（層厚4cm, X I層）、成層したテフラ層（層厚61cm）、黄色軽石混じり暗褐色土（層厚22cm, 軽石の最大径26mm, IX-2層）、暗灰色土（層厚21cm, IX-1層）、黒褐色土（層厚22cm, VIII層）、黄色細粒軽石に富む灰色土（層厚7cm, 軽石の最大径3mm）、黄色軽石混じり黒褐色土（層厚8cm, 軽石の最大径6mm）、黄色軽石混じり暗褐色土（層厚13cm, 軽石の最大径6mm）、黒褐色土（層厚7cm, 以上VII層）、黒色土（層厚9cm, VI層）、黒灰色砂質土（層厚9cm）、成層したテフラ層（層厚31cm）、黄灰色土（層厚9cm）、黒色土（層厚8cm）、盛土（層厚20cm以上）が認められる。

これらの土層のうち、下位の成層したテフラ層（X層）は、下位より青灰色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）、黄色軽石および赤褐色軽石混じり黄灰色粗粒火山灰層（層厚6cm, 軽石の最大径20mm）、赤褐色軽石混じり黄色軽石層（層厚6cm, 軽石の最大径19mm, 石質岩片の最大径4mm）、青灰色粗粒火山灰層（層厚0.6cm, 以上X-4層）、赤褐色軽石層（層厚3cm, 軽石の最大径17mm, 石質岩片の最大径3mm）、黄色軽石層（層厚6cm, 軽石の最大径21mm, 石質岩片の最大径3mm）、逆極化構造の認められる黄色軽石層（層厚7cm, 軽石の最大径19mm, 石質岩片の最大径8mm, 以上X-3層）、赤褐色軽石層（層厚3cm, 軽石の最大径19mm, 石質岩片の最大径8mm）、粗粒の黄色軽石層（層厚29cm,

軽石の最大径62mm, 石質岩片の最大径27mm, 以上X-2・X-1層)の連続から構成されている。このテフラ層は、その層相から約1.4~1.6万年前に霧島火山から噴出した霧島小林軽石(Kr-Kb, 伊田ほか, 1956, 町田・新井, 1992)に同定される。

V層には、その層位や層相などから、約6,300~6,500年前に霧島火山から噴出した霧島牛ノ徑テフラ下部(Kr-USL, 井ノ上, 1988, 早田, 1997)に由来する粗粒火山灰が多く含まれていると考えられる。

上位の成層したテフラ層(IV層)は、下部の火山豆石混じり橙色軽石層(層33cm, 軽石の最大径7mm, 火山豆石の最大径4mm)と、上部の橙色細粒火山灰層(層厚28cm)から構成されている。このテフラ層は、その層相から約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 町田・新井, 1978)に同定される。

3. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

起源や噴出年代がとくに不明な試料番号4~1の4試料中に含まれるテフラ粒子について、屈折率測定を行って示標テフラとの同定を試みた。測定は、位相差法(新井, 1972)による。

(2) 測定結果

9-Iグリッドの試料番号4のスコリアには、班晶として量の多い順に、単斜輝石、カンラン石、斜方輝石が認められる。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.702-1.707である。このスコリアについては、その層位から約1.8万年前に霧島火山から噴出した韓国岳スコリア(井村, 1991)由来している可能性が大きい。

試料番号3の軽石には、班晶として量の多い順に、斜方輝石と単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.706-1.710である。試料番号2の軽石にも、班晶として量の多い順に、斜方輝石と単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.706-1.710である。さらに試料番号1の軽石にも、班晶として量の多い順に、斜方輝石と単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.706-1.710である。岩相をあわせて考慮すると、これら3試料中の軽石は同一テフラに由来していると考えられる。このテフラ層は、その層位や特徴などから、約9,100年前に霧島火山から噴出した霧島瀬田尾軽石(Kr-St, 井ノ上, 1988, 早田, 1997)に由来すると考えられる。

4. 小結

内屋敷遺跡において、地質調査と屈折率測定を合わせて行った。その結果、本遺跡では下位より韓国岳スコリア(約1.8万年前)に対比される可能性のあるスコリア、霧島小林軽石(Kr-Kb, 約1.4~1.6万年前)、霧島瀬田尾軽石(Kr-St, 約9,100年前)、霧島牛ノ徑テフラ下部(Kr-USL, 約6,300~6,500年前)、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約6,300年前)が認められた。本遺跡の周辺では、これらのテフラを利用して後期旧石器時代後半から縄文時代にかけての詳細な編年学的研究が可能である。

文 献

- 新井 房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノ ロジーの基礎的研究, 第四紀研究, 11, p.254-269.
- 伊田 一善・本島公司・安国 昇 (1956) 宮崎県小林市付近の天然ガス調査報告. 地調報告, 168, p.1-44.
- 井村 隆介 (1991) 霧島火山地質巡検コースガイド, 日本火山学会.
- 井ノ上幸造 (1988) 霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史. 岩鉱, 83, p.26-4 1.
- 町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p.143-163.
- 町田 洋・新井 房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
- 奥野 充 (1996) 南九州の第四紀末テフラの加速器¹⁴C年代 (予報). 名古屋大学 加速器質量分析計業績報告書, VI, p.89-109.
- 早田 勉 (1997) 火山灰土と土壤の形成. 宮崎県史通史編, 1, p.33-77.

表1 内屋敷遺跡の屈折率測定結果

グリッド	試料	重鉱物	斜方輝石 (γ)
9-I	1	opx>cpx	1.706-1.710
9-I	2	opx>cpx	1.706-1.710
9-I	3	opx>cpx	1.706-1.710
9-I	4	cpx>ol>opx	1.702-1.707

ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石. 屈折率の測定は位相差法 (新井, 1972) による.

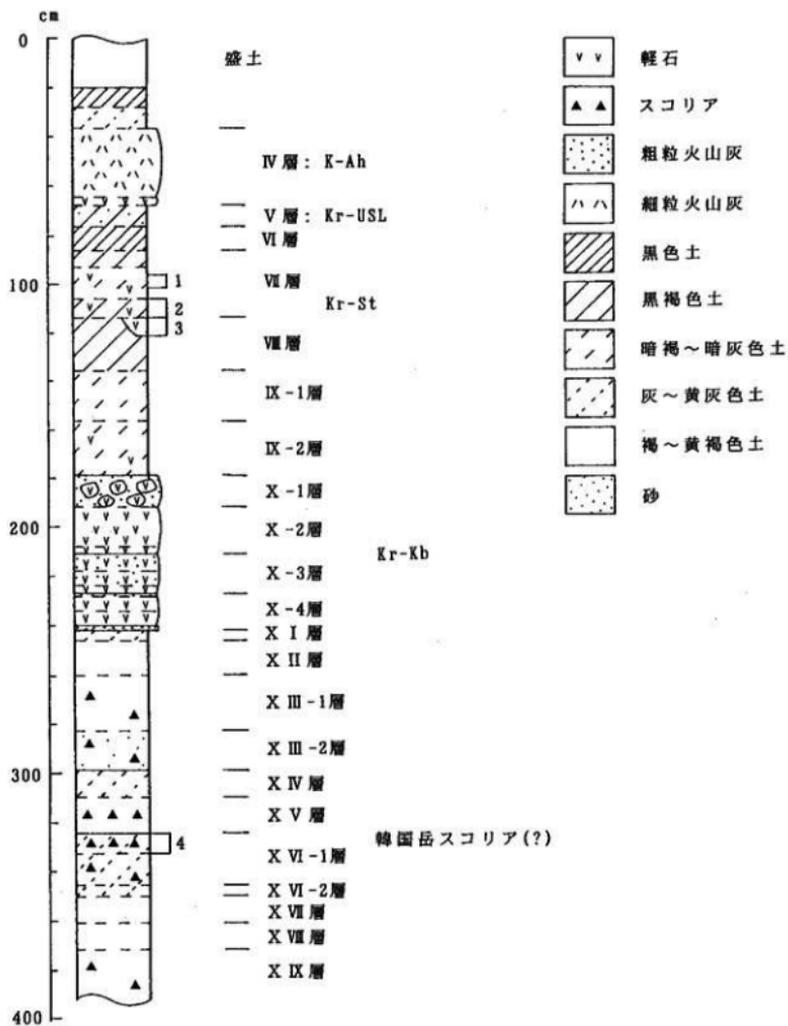


図1 9-1グリッドの土層柱状図 数字はテフラ分析の試料番号

第2節 内屋敷遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 1987)。

2. 試料

試料は、9-Iグリッドで採取された30点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾) 2) 試料約1gに対して直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量) 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10 \times 5g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ススキ属(ススキ)の換算係数は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属(チシマザサ節・チマキザサ節)は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

【イネ科】機動細胞由来: キビ族型、ススキ属型(ススキ属など)、ウシクサ族型、ウシクサ族型(人型)

【イネ科-タケ亜科】機動細胞由来: メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキウウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型(おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

【イネ科-その他】表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、莖部起源、未分類等

【樹木】その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

盛土直下層（試料1）からXIV層（試料30）までの層準について分析を行った。その結果、XIV層（試料30）ではウシクサ族型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、棒状珪酸体などが検出されたが、いずれも少量である。XVIII層（試料29）から韓国岳スコリア？直下のXVI層（試料26）にかけては、クマザサ属型やミヤコザサ節型が大幅に増加しており、キビ族型やススキ属型なども検出された。韓国岳スコリア？直上のXV層（試料25）では各分類群とも大幅に減少しているが、Kr-Kbより下位のXIII-1層（試料21）からXI層（試料19）にかけては、クマザサ属型やミヤコザサ節型などが増加傾向を示している。

Kr-Kb直上のIX-2層下部（試料17）では、Kr-Kb直下のXI層と同様の分類群が検出されたが、いずれも少量である。同層上部（試料16）からKr-St直下のVIII層（試料12）にかけては、クマザサ属型やミヤコザサ節型、棒状珪酸体が大幅に増加しており、ウシクサ族型も比較的多く検出された。また、メダケ節型やネザサ節型が出現している。Kr-St混のVIII層下部（試料9～11）ではミヤコザサ節型、VII層上部（試料8）ではクマザサ属型が大幅に減少しており、VIII層上部ではこれらに代わってメダケ節型やネザサ節型が急激に増加している。K-Ah直上層（試料2）では、ススキ属型やウシクサ族型、メダケ節型、ネザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。盛土直下層（試料1）では、ネザサ節型が増加している。

おもな分類群の推定生産量（図右側）によると、VIII層下部より下位ではクマザサ属型やミヤコザサ節型が卓越しているが、VIII層上部より上位ではメダケ節型やネザサ節型が優勢となっていることが分かる。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

以上の結果から、内屋敷遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

韓国岳スコリア（約1.8万年前）に対比される可能性のあるスコリアより下位のXVIII層からXVI層にかけては、クマザサ属（ミヤコザサ節を含む）などのササ類を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族なども見られるイネ科植生が継続されていたものと推定される。クマザサ属は森林の林床でも生育が可能であるが、ススキ属やチガヤ属は日当りの悪い林床では生育が困難である。このことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく比較的开かれた環境であったものと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、両者の推定生産量の比率である「ネザサ率」の変遷は、地球規模の水期-間水期サイクルの変動とよく一致することが知られている（杉山・早田, 1996）。ここでは、クマザサ属が圧倒的に卓越していることから、当時は寒冷な気候条件下で推移したものと推定される。クマザサ属は氷点下5℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高槻, 1992）。気候条件の厳しい水期にクマザサ属などのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

XV層からXIII-2層にかけては、テフラの堆積など何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない状況であったと考えられるが、XIII-1層からXI層にかけては、クマザサ属（ミヤコザサ節を含む）などが比較的多く見られたものと推定される。

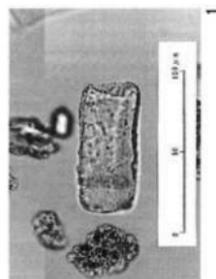
その後、霧島小林軽石（Kr-Kb, 約1.4～1.6万年前）の堆積によって当時の植生は一時的に破壊され

たと考えられるが、ススキ属やチガヤ属などは比較的早い時期に再生し、IX-2層上部の時期にはその他の植物も再生したものと推定される。IX-1層から霧島瀬田尾軽石(Kr-St, 約9,100年前)混のVII層下部にかけては、クマザサ属(ミヤコザサ節を含む)などのササ類を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族なども見られるイネ科植生が継続されていたと考えられるが、VIII層上部の時期にはクマザサ属の減少に伴って、メダケ節やネザサ節が急激に増加したものと推定される。このような植生変化は、完新世初頭における気候温暖化に対応したものと考えられる。

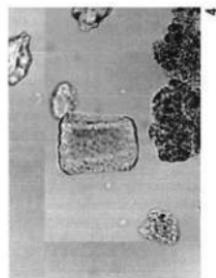
その後、霧島牛ノ徑テフラ下部(Kr-USL, 約6,300~6,500年前)や鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約6,300年前)の堆積によって、当時の植生は一時的に破壊されたと考えられるが、ススキ属やチガヤ属などは比較的早い時期に再生したものと推定される。

参考文献

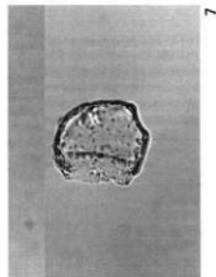
- 杉山 真二(1987)遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号, p.27-37.
- 杉山 真二(1987)タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
- 杉山 真二・早田勉(1996)植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古 環境推定-中期更新世以降の水期-間氷期サイクルの検討-. 日本第四紀学会 講演要旨集, 26, p.68-69.
- 杉山 真二(1997)人類をとりまく植生と環境. 宮崎県史通史編「原始・古代」, p.150-172.
- 高槻 成紀(1992)北に生きるシカたち-シカ、ササそして雪をめぐる生態学-. どうぶつ社.
- 藤原 宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培 植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.



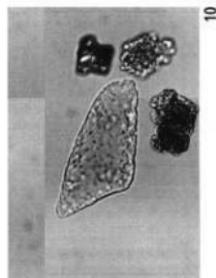
1



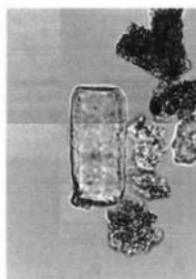
4



7



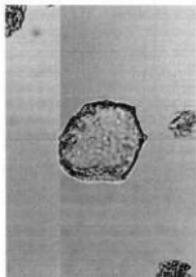
10



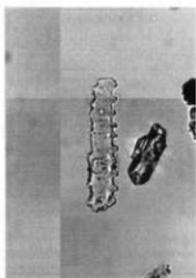
2



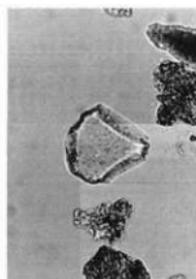
5



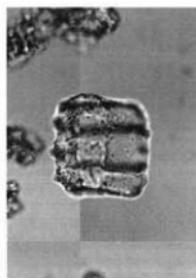
8



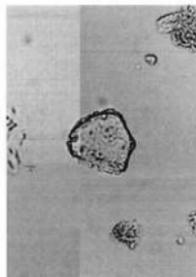
11



3



6



9



12

【植物珪酸体の顕微鏡写真】 1 キビ族型 2 キビ族型 3 ススキヤ属型 4 ウシクサ族型 5 メダケ節型 6 ネザサ節型
7 クマザサ属型 8 クマザサ属型 9 ミヤコザサ型 10 表皮毛起源 11 棒状珪酸体 12 樹木

第V章 まとめ

内屋敷遺跡は、小林盆地の標高約212mのシラス台地上に立地する。今回の調査では、縄文早期～中世の遺構・遺物を数多く検出した。特に、アカホヤ火山灰層下の調査は、南九州縄文時代の縄文時代早期を考える上で貴重な資料となった。ここでは、調査成果や課題について整理を行う。

1 縄文時代早期遺構について

遺構は、集石遺構10基、配石遺構3基、平地住居跡と考えられる掘立柱建物1棟が検出された。

集石遺構

集石遺構は10基確認された。集石遺構は一般的に炉としての機能が与えられている。内屋敷遺跡の集石遺構は、主として輝石安山岩の重円礫を用い、小規模のものが多く。検出された集石遺構は、わずかに10基ではあるが、土坑（掘り込み）の有無、被熱痕跡（礫の赤変・炭化物の出土など）の有無など、いくつかの形態差が確認された。こうした検出状況の差異によって、集石遺構にいくつかの段階が想定できる。まず、土坑をもち、被熱痕跡の認められるタイプ（S I 2・S I 3・S I 4・S I 8・S I 9・S I 10）は、炉としての使用の可能性がある。土坑をもち、被熱痕跡の認められるタイプ（S I 5）は、廃棄礫の集積の可能性がある。土坑の有無に関係せず、被熱痕跡の認められないタイプ（S I 1・S I 6・S I 7）は、準備礫の集積の可能性がある。

配石遺構

配石遺構は3基検出された。3基は、いずれも数枚の板石状礫を遺構内側に傾斜させ、逆ハの字状の断面形をもつ。確認状況に差異があるので明言はできないが、3基とも、長径1m前後、短径70cm前後の楕円形土坑を有すると考えられる。

類似する配石遺構は南・西九州において数例確認されている。掃除山遺跡（鹿児島県鹿儿島市）・楕ノ原遺跡（鹿児島県加世田市）・奥ノ仁田遺跡（鹿児島県西之表市）・鷹爪野遺跡（鹿児島県川辺町）・瀬田裏遺跡（熊本県大津町）などである。これらの殆どは、土壇や礫の赤変・炭化物の出土という被熱痕跡が確認され、炉跡と考えられている。内屋敷遺跡の配石遺構において、炉跡と裏付ける被熱痕跡は、3号で確認された礫の赤変のみである。1・2号は、被熱痕跡が見られず、炉跡と断言するのは難しい。しかし、他遺跡の遺構形状から考えても、内屋敷遺跡検出の配石遺構は、炉跡として機能していた可能性がある。配石遺構は、これまで縄文時代草創期の遺構として扱われてきた。鹿児島県の4遺跡は草創期に位置づけられている。内屋敷遺跡の配石遺構と最も形状が類似している掃除山遺跡の例も、やはり草創期に位置づけられており、若干の時期差がある。一方、瀬田裏遺跡の例は、早期に位置づけされている。今後の資料の増加が待たれるが、草創期に発生した配石遺構は、形状を若干変えながらも、早期まで継続していたと考えられる。

掘立柱建物（平地住居）

内屋敷遺跡において検出された掘立柱建物は、平地住居跡と考えられる。楕円形9基、半円形1基、方形1基である。楕円形9基は、備柱穴8～11本、直径2.5～3.4m（平均2.97m）、床面積4.9～9.0㎡

(平均6.8㎡)の規模である。半円形の1基も、楕円形に復元してみると同規模になる。方形の1基は、2.43×1.58m、床面積3.8㎡である。いずれも、一方向に入り口と考えられる、広めの柱間が確認された。

この掘立柱建物は、平地住居か堅穴住居かという問題がある。南九州縄文時代早期における住居跡の検出例は、札ノ元遺跡(宮崎県田野町)・留ヶ字戸遺跡(宮崎県串間市)・加栗山遺跡(鹿児島県鹿児島市)・鹿児島県上野原第4工区遺跡(鹿児島県国分市)・村山間谷遺跡(熊本県人吉市)・大丸・藤ノ迫遺跡(熊本県山江村)・狸谷遺跡(熊本県山江村)などがある。その殆どが堅穴住居であり、この中で平地住居として扱われているのは村山間谷遺跡のみである。内屋敷遺跡では堅穴が検出されないが、その理由として、堅穴住居の堅穴を検出し得なかった可能性と元来堅穴をもたない平地住居である可能性の2通りが考えられる。検出作業過程において、本来の遺構面(当時の地表面)を確認できなかった可能性があり、堅穴の存在を完全には否定できない。しかし、柱穴の埋土確認時点で、その周辺に堅穴の痕跡が全く確認されなかったことを考えると、内屋敷遺跡における掘立柱建物は、堅穴が存在しない平地住居と考える方が妥当であろう。

掘立柱建物と遺物との相伴関係について。遺構のA～D群の内、直上の第Ⅵ・Ⅶ層で遺物を伴うのは、A群のみである。B～D群は、直上及び周辺の第Ⅵ・Ⅶ層からも、遺物を出土していない。唯一、検出面上層に遺物を伴うA群においても、出土する土器には統一性がみられず、どれが遺構に伴う土器か判別できない。

また、11基の掘立柱建物は4つに分かれて群構造をなす。調査区域の制限などがあり、群全体が検出されたと思われるものは、B群とD群のみである。各群には、入口と想定される空間に方向性(外側に開く)があること、隣接しており重複がないことが認められる。このことを考慮すると、各群単位内は、同時期に存在していた可能性がある。しかし、各群が同時期に存在したのかという問題については、今回の検出状況から答えを導き出すことは難しい。

2 縄文時代早期遺物について

土器

内屋敷遺跡は、宮崎・鹿児島・熊本3県の県境に近く、中九州・南九州地域的一端に入る。出土した縄文時代早期土器は、地理的条件と相まって、複数の地域を結ぶ資料となり得る結果となった。本報告において縄文時代早期土器を、1～11類に分類を行ったが、型式不明の9～11類を除くと1～8類の8類型に分類される。ここでは、各類型について若干の記述を行う。

1～6類は、円筒形貝殻文土器であり、主として南九州に分布する。新東氏の編年(新東-1989)と照合すると、内屋敷遺跡出土の土器は、1類(岩本式)→2類(前平式)→3類(知覚式)→4類(吉田式)→5a類(倉園B式)→5b類(石坂式)→6類(下刺峰式)という一連の編年に沿う土器が出土している。しかし、各類型の中には若干変則的なものも見受けられる。内屋敷遺跡出土の2類土器は、文様施文(口縁部上端の斜位の貝殻腹縁連続刺突文・斜方向の貝殻腹縁条痕文)は同じであるが、器形の面で前平式と多少異なる。胴部が直線状の円筒形ではなく、胴部が膨らむ器形を呈する。このタイプは、前原西遺跡(宮崎県宮崎市)・芳ヶ迫第一遺跡(宮崎県田野町)・札ノ元遺跡(宮崎県田野町)などで確認されている。前原西遺跡において、この類型は前平式に前後する時期に位置づけている。(面高-1988)

7類は、押型文土器である。これらの中に、山形押型文を施文に平底の底部の特徴をもつ土器がある。この外來系の押型文土器と、在地系の円筒形の混合形である円筒形押型文土器は、内屋敷遺跡の他、牟田尻遺跡（鹿児島県出水市）・仮牧段遺跡（鹿児島県市来町）など南九州西北部に限って確認されている。

8類は、円筒形条痕文土器であり、木崎氏の設定する（木崎—1998）の中原式Ⅰ～Ⅴ期に相当する。124～143は、口唇部から口縁部上端の狭い範囲にかけて、貝殻腹縁による連続刺突文を施している。これは、中原Ⅰ期に相当すると思われる。144～153は、口縁部から胴部上位にかけて、貝殻腹縁による横方向の条痕文である。中原Ⅳ期に相当すると思われる。154～158は、外器面全体に、貝殻腹縁による条痕文を施している。剥落などが著しく不明な点が多いが、少なくとも158は、外器面全体にかけての施文が確認できる。中原Ⅴ期に相当すると思われる。中原式は、縄文時代前半期、主に中九州西部に分布する土器である。

今回の調査では、縄文時代早期前半から早期後半にかけて時期幅のある土器が出土した。これを、垂直分布・平面分布の両面において、土器の相伴関係を明確にすることは困難である。しかし、1類（岩本式）・4類（吉田式）・7類（押型文）・8類（中原式）は、互いにある程度独立した分布の集中が見られる。このことが、同時期の集団差を示すものか、時期差を示すものか判じ難いが、興味深い結果となった。

石器

内屋敷遺跡では、狩猟具としての石鏃・尖頭状石器、加工用工具としての石鏃・楔形石器、動物性食料加工用具としての削器、植物性食料加工用具（一部土器製作目的も含む）としての磨石・敲石・台石・石皿、伐採用具としての局部磨製石斧、石器製作を示す石核などバラエティーに富んだ石器類が出土した。こうした石器は、内屋敷遺跡で狩猟と植物採取の両方が行われていたことを如実に示す。石材は黒曜石・チャートが主体であり、特に黒曜石石材は、桑ノ木津留をはじめとする周辺地域で入手した可能性がある。また、石核の出土とともに黒曜石の剥片・チップ類が集中する場所が6C区などで確認されており、本遺跡で石器製作が行われた可能性がある。

3 弥生時代遺構について

弥生時代に属する遺構は、堅穴住居2基が検出された。SA1・SAの2基は、方形プランに4本支柱穴配置という弥生時代後期後半から主流を占めるタイプである（石川—1991）。SA2では、北壁中央付近に土坑が検出された。土坑の性格として、入口の梯固定穴と炉の2通りが考えられる。SA2の土坑は、炭化物を多く含む埋土と周辺に灰と炭化物を含む土が確認されたことから、炉である可能性が高い。SA1については、中央部にピットが存在する。しかし、焼土など確認できない上に残存状態も悪く、柱穴とも判断ができない。SA1・SA2から出土した遺物は、レベル的に住居埋土の下位に位置しており遺構との時期差は小さいものと考えられ、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に位置づけられる。

【参考文献】

- 八木澤一郎 1992 「鹿児島県下の縄文期集石Ⅰ」『南九州縄文通信』No.6 南九州縄文研究会
- 上東克彦 1995 「配石遺構」『旧石器から縄文へ』鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会
- 鹿児島市教育委員会 1992 「掃除山遺跡」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
- 加世田市教育委員会 1998 「椀ノ原遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
- 西之表市教育委員会 1995 「奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡」西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
- 上村純一 1993 「鷹爪野遺跡」『南九州における縄文時代草創期の諸問題』宮崎考古学会・南九州の縄文時代草創期を考える会
- 大津町教育委員会 1993 「瀬田裏遺跡調査報告Ⅱ」大津町文化財調査報告
- 長津宗重 1995 「宮崎県内の縄文時代早期竪穴住居一覧表」『旧石器から縄文へ』鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会
- 田野町教育委員会 1986 「芳ヶ迫第1遺跡・芳ヶ迫第2遺跡・芳ヶ迫第3遺跡・札ノ元遺跡」田野町文化財調査報告書 第3集
- 串間市教育委員会 1994 「留ヶ字戸遺跡」串間市文化財調査報告書 第11集
- 人吉市教育委員会 1988 「村山開谷遺跡発掘調査報告書」
- 鹿児島県教育委員会 1981 「加栗山遺跡・神ノ木遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
- 新東晃一 1989 「早期九州貝殻文系土様式」『縄文土器大観』小学館
- 面高哲郎 1988 「前原西遺跡の調査 第5節 まとめ」宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第4集 宮崎県教育委員会
- 木崎康弘 1998 「中原式土器について」『九州縄文土器編年の諸問題』九州縄文研究会
- 水ノ江和同 1998 「九州における押型土器の地域性」『九州の押型土器』九州縄文研究会
- 石川悦雄 1991 「宮崎における弥生時代竪穴式住居の展開」『宮崎県史研究』第5号 宮崎県

おわりに

本書を作成するにあたり、多くの方々にお世話になった。文末ではあるが、記して謝意を述べたい。
(順不同・敬称略)

青山尚友・石川悦雄・菅付和樹・谷口武範・東憲章・日高広人(埋蔵文化財センター)、桑畑光博(都城市教育委員会)、中村真由美(小林市教育委員会)、上田寿美子・藤川留美子(整理作業員)、米久出真二、発掘・整理作業に携わった作業員の方々

遺物番号	種別	種別	出土 地点	法量 (m)	手法・調整・文様はか		色		胎土の特徴	備考
					外	内	外	内		
1	縄文土器	深鉢 口縁			口縁部にのみ目玉 三条の角状隆起による横筋の具装束列文 ナメ スス付着	横方向のナメ	黒褐色	黒褐色	2.5mm以下の乳白色砂粒 透明光沢	
2	縄文土器	深鉢 口縁・胴部			口縁部にのみ目玉 三条の角状隆起による横筋の具装束列文 ナメ スス付着	横方向のナメ	黒褐色	灰青褐色	4mm以下の乳白色砂粒 2.5mm以下の透明光沢 1mm以下の黒色炭粒	
3	縄文土器	深鉢 口縁・胴部	7層	30.7	斜方向の具装束列 ナメ 口縁部上端部に只装束列による斜方向の連続列点文	ミダキ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微細な透明・半透明光沢粒 2mm以下の灰・灰黄色砂粒	鹿平系 7と同一関係
4	縄文土器	深鉢 口縁・胴部	7層	21.9	斜方向の具装束列 口縁部による連続列点文 口唇部にミダキ	ミダキ 下等なナメ	にぶい黄褐色	黄褐色	微細な透明・半透明光沢粒 2mm以下の灰・褐色 乳白色砂粒	鹿平系
5	縄文土器	深鉢 口縁・胴部	7層	18.0	斜方向の具装束列 角状隆起による連続列点文 ナメ スス付着	口唇部にミダキ ナメ	黄褐色	黄褐色	2mm以下の黄・茶・白色砂粒 1mm以下の透明光沢	鹿平系
6	縄文土器	深鉢 口縁	7層		斜方向の具装束列 ナメ スス付着	工具による横方向のナメ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	0.5-2mmの灰白・黄赤・赤黄・褐色色砂粒	鹿平系
7	縄文土器	深鉢 口縁・胴部	7層		斜方向の具装束列 斜筋の具装束列による連続列点文 ナメ スス付着	口唇部にミダキ 1等なナメ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微細な透明・半透明光沢粒 2mm以下の灰・灰黄色砂粒	鹿平系 8と同一関係
8	縄文土器	深鉢 口縁	7層		斜方向の具装束列 斜筋の具装束列による連続列点文 ナメ スス付着	横筋の1等なナメ 指	灰青褐色	にぶい赤褐色	0.5-1.5mmの透明・褐色光沢粒 灰白・黄赤・褐色色砂粒	鹿平系
9	縄文土器	深鉢 口縁	7層		斜方向の具装束列 斜筋の具装束列による連続列点文 ナメ スス付着	ミダキ スス付着	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微細な透明・半透明光沢粒 2mm以下の灰・褐色 1mm程度の白・赤・黄・褐色色砂粒	鹿平系
10	縄文土器	深鉢 口縁	7層		斜方向の具装束列 斜筋の具装束列による連続列点文 ナメ スス付着	ナメ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	0.5-1mmの透明・褐色光沢粒 灰白・褐色・黄褐色砂粒	鹿平系
11	縄文土器	深鉢 口縁	7層		斜方向の具装束列 斜筋の具装束列による連続列点文 ナメ スス付着	口唇部にミダキ	灰青	黄褐色	微細な透明・褐色光沢粒 灰白・褐色・黄褐色砂粒	鹿平系
12	縄文土器	深鉢 口縁	7層		斜方向の具装束列 斜筋の具装束列による連続列点文 ナメ スス付着	口唇部にミダキ 1等なナメ	黄褐色	黄褐色	1.5mm以下の灰白・灰・褐色色砂粒 光沢	鹿平系
13	縄文土器	深鉢 口縁	7層		斜方向の具装束列 斜筋の具装束列による連続列点文 ナメ スス付着	口唇部にミダキ 横筋の1等なナメ	黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の灰白・灰色砂粒 光沢	鹿平系
14	縄文土器	深鉢 口縁・胴部	7層		斜方向の具装束列 斜筋の具装束列による連続列点文 ナメ	口唇部にミダキ 下等なナメ	黄褐色	灰青褐色	1mm以下の灰白・乳白色砂粒 透明光沢	鹿平系
15	縄文土器	深鉢 口縁	7層		斜方向の具装束列 斜筋の具装束列による連続列点文 ナメ	口唇部にミダキ 下等なナメ	黄褐色	灰青褐色	1mm以下の乳白色砂粒 透明光沢	鹿平系
16	縄文土器	深鉢 口縁	7層		斜方向の具装束列 斜筋の具装束列による連続列点文 ナメ	横筋の1等なナメ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の乳白色・灰色砂粒・透明光沢	鹿平系
17	縄文土器	深鉢 口縁	7層		斜方向の具装束列 斜筋の具装束列による連続列点文 ナメ	口唇部にミダキ 下等なナメ	にぶい黄褐色	灰青褐色	1mm以下の透明褐色光沢粒	鹿平系
18	縄文土器	深鉢 口縁・胴部	7層		斜方向の具装束列 斜筋の具装束列による連続列点文 ナメ	ナメ	にぶい黄褐色	黄褐色	3.5mm以下の灰白色・赤褐色・青褐色砂粒 透明褐色光沢	鹿平系
19	縄文土器	深鉢 口縁	7層		斜方向の具装束列 斜筋の具装束列による連続列点文 ナメ	下等なナメ	にぶい黄褐色	黒褐色	1mm以下のにぶい黄褐色・褐色色砂粒	鹿平系
20	縄文土器	深鉢 口縁	7層		斜方向の具装束列 斜筋の具装束列による連続列点文 ナメ	横筋のミダキ	にぶい黄褐色	黒褐色	1mm以下の乳白色・灰色砂粒 透明光沢	鹿平系
21	縄文土器	深鉢 口縁	7層		ナメ 具装束列による縦筋の連続列点文	下等なナメ	黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の灰白・褐色色砂粒 黒色光沢	鹿平系
22	縄文土器	深鉢 口縁	7層		角状隆起による三条の角状隆起による連続列点文 ナメ	横筋のナメ	灰青	黄褐色	2.5mm以下の灰白色砂粒・透明光沢	鹿平系
23	縄文土器	深鉢 口縁	7層	6.0	ナメ 斜方向の具装束列	下等なナメ	にぶい黄褐色	黄褐色	2mm以下の灰・褐色・乳白色の砂粒微細な透明光沢	鹿平系
24	縄文土器	深鉢 (角筒) 口縁	7層		口唇部に連続列点文 斜筋の具装束列の具装束列による列点文 横筋の連続列点文	ナメ	黒褐色	黒褐色	1mm以下の灰白・褐色・赤褐色砂粒	加賀式
25	縄文土器	深鉢 (角筒) 口縁	7層		口唇部に連続列点文 斜筋の具装束列の具装束列による列点文 横筋の連続列点文	ナメ	黒褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の灰白・褐色・赤褐色砂粒	加賀式
26	縄文土器	深鉢 口縁	7層		口唇部に連続列点文 斜筋の具装束列の具装束列による列点文 横筋の連続列点文	ナメ	にぶい黄褐色	黒褐色	2mm以下の乳白色・黄褐色砂粒 透明光沢	加賀式
27	縄文土器	深鉢 口縁	7層		口唇部に連続列点文 斜筋の具装束列の具装束列による列点文 横筋の連続列点文	黄褐色の具装束列	にぶい黄褐色	黒褐色	微細な透明・褐色光沢粒 微細な乳白・黄褐色砂粒	加賀式
28	縄文土器	深鉢 (角筒) 胴部	7層		縦筋の具装束列による連続列点文 斜筋の具装束列による連続列点文	斜筋のナメ	にぶい黄褐色	黒褐色	2mm以下の黄・灰・褐色色砂粒 微細な透明・褐色光沢	加賀式
29	縄文土器	深鉢 (角筒) 胴部	7層		縦筋の具装束列による連続列点文	横筋のナメ	灰青	黒褐色	2mm以下の白・灰色砂粒 透明光沢	加賀式
30	縄文土器	深鉢 (角筒) 胴部	7層		縦筋の具装束列による連続列点文	ナメ	にぶい黄褐色	黒褐色	2mm以下の白・褐色色砂粒 透明光沢	加賀式
31	縄文土器	深鉢 (角筒) 胴部	7層		縦筋の具装束列による連続列点文	ナメ	にぶい黄褐色	黒褐色	2mm以下の白・褐色色砂粒 透明光沢	加賀式
32	縄文土器	深鉢 (角筒) 胴部	7層		縦筋の具装束列による連続列点文	横方向のナメ	にぶい黄褐色	灰青褐色	0.5mm以下の黄・褐色色砂粒 透明光沢	加賀式
33	縄文土器	深鉢 (角筒) 胴部	7層		斜方向の具装束列 縦筋の連続列点文	縦方向のナメ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の黄・灰白・灰色砂粒	加賀式
34	縄文土器	深鉢 (角筒) 胴部	7層		横方向の具装束列 縦筋の連続列点文 斜筋付列点文	ナメ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の黒・乳白色砂粒 透明光沢	加賀式
35	縄文土器	深鉢 (角筒) 胴部	7層		横方向の具装束列 縦筋の連続列点文 斜筋付列点文	ナメ	黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の褐色・乳白色砂粒	加賀式
36	縄文土器	深鉢 (角筒) 胴部	7層	12.7	下等なナメ ナメ 横筋の連続列点文	ナメ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の灰白色砂粒	加賀式

第3表 出土土器観察表 (1)

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	流量 (cm)		形、調整、文様ほか		色調		胎土の質感	備考
				口徑	底徑	外面	内面	外面	内面		
37	縄文土器	深鉢 底部	7層	10.1		丁寧なナゲ 縦位の副線	縦いナゲ	明褐色 灰褐色	灰褐色	2mm以下の灰白・明黄褐色砂粒 透明光沢粒	知識式
38	縄文土器	深鉢 口縁・底部分	7層	30.0		1層部に連続的み目 横位の連続列点文 横位の連続列点文	横位のナゲ	灰褐色 明褐色	灰褐色	5mm以下の浅緑・灰褐色砂粒 3mm以下の黒褐色白色砂粒	古冊式
39	縄文土器	深鉢 1層・胴部	7層	30.7		口唇部に連続的み目 横位の連続列点文 横位の連続列点文	横位の丁寧なナゲ	黒褐色	浅褐色	1mm以下の黒砂粒 3mm以下の灰・黒色の透明光沢粒 1mm以下の底	古冊式
40	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の具敷線による連続列点文 スス付書	斜位のナゲ	にぶい黒	にぶい黄黒	1mm以下の黒砂粒 1mm以下の底・黒色の透明光沢粒 1mm以下の底	古冊式
41	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の具敷線による連続列点文 スス付書	ナゲ	にぶい黒	橙	4mm以下の赤色砂粒 1-2mmの乳白色砂粒 透明光沢粒	古冊式
42	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の具敷線による連続列点文 スス付書	横位の丁寧なナゲ	明褐色	にぶい黒	1-2mmの淡黄・灰色砂粒・透明光沢粒 金色光沢粒	古冊式
43	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の具敷線による連続列点文 1層部に横位の一直の列点文 スス付書	斜位の丁寧なナゲ	にぶい黒	灰褐色	2mm以下の灰白・灰黄・灰色砂粒・透明光沢粒 金色光沢粒	古冊式
44	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の具敷線による連続列点文 スス付書	横位の丁寧なナゲ 指痕	にぶい黒	にぶい黄黒	1mm以下の黄緑 1mm以下の灰・黒色の透明光沢粒 1mm以下の底	古冊式
45	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の具敷線による連続列点文 スス付書	斜位の丁寧なナゲ	にぶい黒	灰褐色	2mm以下の灰白・灰白・灰黄色・黒色砂粒 透明光沢粒	古冊式
46	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の具敷線による連続列点文 スス付書	丁寧なナゲ	にぶい黄黒	にぶい赤黒	1mm以下の灰白・灰白・赤褐色砂粒 0.5mm以下の透明光沢粒	古冊式
47	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の具敷線による連続列点文 スス付書	横位の丁寧なナゲ	橙	にぶい黒	5mm以下の淡黄・橙・灰白色砂粒	古冊式
48	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の連続列点文 横位の連続列点文 穿孔	横位の丁寧なナゲ 穿孔 指痕	黒褐色 暗灰黄	黒オリーブ 黒	2mm以下の淡黄・灰白色砂粒 金色光沢粒	古冊式
49	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の具敷線による連続列点文 スス付書	斜位のナゲ	にぶい黄黒 にぶい橙	にぶい黄黒 補灰	1mm以下の透明光沢粒 乳白色・褐色砂粒	古冊式
50	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の具敷線による連続列点文 スス付書	ナゲ	にぶい黒	補灰	1mm以下の透明光沢粒 乳白・褐色砂粒	古冊式
51	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の具敷線による連続列点文 横位の連続列点文	ナゲ	にぶい黄黒	橙	1mm以下の透明光沢粒 1mm以下の底・黒色の透明光沢粒 黒褐色光沢粒	古冊式
52	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の具敷線による連続列点文 横位の副線	ナゲ	にぶい黒	明褐色	2mm以下の灰・灰・褐色砂粒 微細な半透明光沢粒	古冊式
53	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の具敷線による連続列点文 横位の副線	風化の具敷線不明	にぶい橙	にぶい橙	3mm以下の白色砂粒 1mm以下の透明・金色光沢粒	古冊式
54	縄文土器	深鉢 胴部	7層			横位の具敷線による連続列点文 横位の副線	ナゲ	黒	にぶい黒	2mm以下の灰・灰白色砂粒 透明粒	古冊式
55	縄文土器	深鉢 胴部	7層			ナゲ 横方向の具敷線による連続列点文	丁寧なナゲ	にぶい黄黒	明褐色	2mm以下の灰白色砂粒	古冊式
56	縄文土器	深鉢 口縁	7層			横方向の具敷線による連続列点文 口唇部に連続的み目 横位の具敷線による二条以上の連続列点文 横位の具敷線による二条以上の連続列点文	横方向の具敷線不明	にぶい黄黒	にぶい黒	3mm以下の乳白色砂粒 透明光沢粒 金色砂粒	古冊式
57	縄文土器	深鉢 口縁	7層			横方向の具敷線による連続列点文 横位の具敷線による二条以上の連続列点文 横位の具敷線による二条以上の連続列点文	丁寧なナゲ	にぶい黄黒 黒褐色	暗灰黄	3mm以下の透明・灰白色砂粒 1mm以下の金色光沢粒	古冊式 58と同型
58	縄文土器	深鉢 口縁	7層			横位の具敷線による二条以上の連続列点文 横位の具敷線による二条以上の連続列点文	丁寧なナゲ	にぶい黄黒 黒褐色	暗灰黄	3mm以下の透明・灰白色砂粒 1mm以下の金色光沢粒	古冊式 57と同型
59	縄文土器	深鉢 口縁	7層			横方向の具敷線による二条文 口唇部に連続的み目 横位の具敷線による二条以上の連続列点文 横方向の具敷線による二条以上の連続列点文	横方向の丁寧なナゲ	にぶい黒 黒褐色	にぶい黒 黒褐色	3mm以下の黄・灰黄・黄褐色砂粒	古冊式
60	縄文土器	深鉢 口縁	7層			横方向の具敷線による二条文 口唇部に連続的み目 横位の具敷線による二条以上の連続列点文 横方向の具敷線による二条以上の連続列点文	横方向のナゲ	にぶい黒	にぶい黒	2mm以下の淡黄・橙・灰白・黒砂粒 透明光沢粒	古冊式
61	縄文土器	深鉢 口縁	7層			口唇部に連続的み目 横位の具敷線による二条以上の連続列点文 横方向の具敷線による二条文	横方向の丁寧なナゲ	にぶい黒	にぶい黒	2mm以下の乳白色砂粒 透明・黒色光沢粒	古冊式
62	縄文土器	深鉢 口縁	7層			1層部に連続的み目 横位の具敷線による二条以上の連続列点文 横方向の具敷線による二条文	ナゲ	明褐色	明褐色	3mm以下の黄緑・灰褐色砂粒 透明砂粒	古冊式
63	縄文土器	深鉢 口縁	7層			横方向の具敷線による二条以上の連続列点文 横位の具敷線による二条以上の連続列点文	横方向のナゲ	にぶい黄黒	にぶい黄黒	1mm以下の黄緑・黒褐色・灰白色砂粒 5mm以下の白色砂粒	古冊式
64	縄文土器	深鉢 口縁	7層			1層部に連続的み目 横位の具敷線による二条以上の連続列点文 横方向の具敷線による二条以上の連続列点文	横方向のナゲ	にぶい黄黒	にぶい黄	1.5mm以下の乳白色砂粒 透明黒色光沢粒	古冊式
65	縄文土器	深鉢 口縁	7層			1層部に横位の連続的み目 横位の具敷線による二条以上の連続列点文 横方向の具敷線による二条文	ミダギ	黒褐色	暗褐色	3mm以下の乳白色砂粒 透明黒色光沢粒	古冊式
66	縄文土器	深鉢 口縁	7層			口唇部に横位の連続的み目 横位の具敷線による二条以上の連続列点文	横方向の丁寧なナゲ	にぶい黄黒	にぶい黄黒	2mm以下の乳白・灰黄・赤褐色砂粒 微細な光沢粒	古冊式
67	縄文土器	深鉢 1層	7層			口唇部に連続的み目 横位の具敷線による二条以上の連続列点文	横方向のナゲ	にぶい黄黒	赤褐色	1mm以下の乳白・灰褐色砂粒 透明・黒色光沢粒	古冊式
68	縄文土器	深鉢 1層	7層			口唇部に横位の連続的み目 横位の具敷線による二条以上の連続列点文	横方向のナゲ	にぶい黒	にぶい黒	1-2mmの乳白色砂粒 透明・黒色光沢粒	古冊式
69	縄文土器	深鉢 1層	7層			口唇部に連続的み目 横位の具敷線による二条以上の連続列点文	横方向の丁寧なナゲ	灰褐色	にぶい赤黒	3mm以下の灰黄色砂粒 0.5mm以下のガラス状に光る粒	古冊式
70	縄文土器	深鉢 1層	7層			口唇部に横位の連続的み目 横位の具敷線による二条以上の連続列点文	風化の具敷線不明	補灰	にぶい黄黒	1mm以下の白・褐色砂粒	古冊式
71	縄文土器	深鉢 1層	7層			口唇部に横位の連続的み目 横位の具敷線による二条以上の連続列点文	丁寧なナゲ	にぶい黄黒	にぶい赤黒	1mm以下の黄褐色砂粒 2mm以下の赤褐色砂粒 0.5mm以下の黄色透明粒	古冊式
72	縄文土器	深鉢 口縁	7層			口唇部に横位の連続的み目 横方向の具敷線による連続列点文	横・縦方向のナゲ	橙	橙	5mm以下の赤色砂粒 3mm以下の白色砂粒 微細な光沢粒	古冊式

第3表 出土土器観察表 (2)

遺物番号	種別	器位	出土地点	数量 (個)	口径	口径	器高	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考		
								外 形		内 面				外 面	内 面
								口唇部に浅い連続凹凸目 横位の二条以上の連続刺突文	口唇部に浅い連続凹凸目 横位の二条以上の連続刺突文	口唇部に浅い連続凹凸目 横位の二条以上の連続刺突文	口唇部に浅い連続凹凸目 横位の二条以上の連続刺突文				
73	縄文土器	深鉢 口縁	7層					口唇部に浅い連続凹凸目 横位の二条以上の連続刺突文	スズ付青	割割の為の調整不明	灰青	緑灰	1.5mm以下の灰白色砂粒	倉庫式	
74	縄文土器	深鉢 口縁	7層					口唇部に浅い連続凹凸目 横位の二条以上の連続刺突文		ナデ	灰青	灰青	3mm以下の灰白色砂粒 透明・黒色光沢粒	倉庫式	
75	縄文土器	深鉢 口縁	7層					横位の二条以上の連続刺突文	スズ付青	ミガキ スズ付青	灰青	灰青	1-2mmの茶・黄褐色砂粒 透明光沢粒 黒色光沢粒	倉庫式	
76	縄文土器	深鉢 口縁	7層					口唇部に浅い連続凹凸目 横位の二条以上の連続刺突文		ミガキ	灰青	緑灰	3mm以下の灰・灰青・黒色砂粒 黒色・透明光沢粒	倉庫式	
77	縄文土器	深鉢 口縁	7層					口唇部に連続凹凸目 横位の二条以上の連続刺突文		ナデ	浅黄	灰青	3mm以下の灰白・灰青・黒色砂粒 黒色・透明光沢粒	倉庫式	
78	縄文土器	深鉢 胴部	7層					横位の二条以上の連続刺突文 横方向の肩線跡による連続引き文 横方向の肩線跡による連続文		斜方向のナデ	暗赤黄	暗赤黄	1mm以下の赤灰透明粒	倉庫式	
79	縄文土器	深鉢 胴部	7層					横方向の肩線跡による連続引き文 横方向の肩線跡による連続文		横方向の丁草なナデ	灰青	灰青	微細～1mmの透明光沢粒 灰白・洗砂・黒・暗赤色砂粒	倉庫式	
80	縄文土器	深鉢 胴部	7層					横方向の肩線跡による連続引き文 横方向の肩線跡による連続文		ナデ 斜線黄	灰青	灰青	微細～1mmの透明光沢粒 灰白・洗砂・黒・暗赤色砂粒 3-4mmの洗灰・黄褐色砂粒	倉庫式	
81	縄文土器	深鉢 胴部	7層					横方向の肩線跡による連続引き文 横方向の肩線跡による連続文		ナデ	灰青	灰青	2mm以下の洗砂・灰黄・灰白・黒色砂粒	倉庫式	
82	縄文土器	深鉢 胴部	7層					横方向の肩線跡による連続引き文 横方向の肩線跡による連続文		斜方向の丁草なナデ	暗赤灰	暗赤	3mm以下の灰・灰黄・洗砂・黒色砂粒 微細透明光沢粒	倉庫式	
83	縄文土器	深鉢 胴部	7層					横方向の肩線跡による連続引き文 横方向の肩線跡による連続文		割割の為調整不明	暗赤	暗赤	1mm以下の灰白・灰白・黒色砂粒	倉庫式	
84	縄文土器	深鉢 胴部	7層					横方向の肩線跡による連続文		横方向のナデ	灰青	灰青	1mm以下の乳白色砂粒・透明光沢粒	倉庫式	
85	縄文土器	深鉢 胴部	7層					横方向の肩線跡による連続文		ナデ	灰青	灰青	3mm以下の黄褐色・黒・灰褐色砂粒 透明光沢粒	倉庫式	
86	縄文土器	深鉢 胴部	7層					横方向の肩線跡による連続文		横方向の横いナデ	暗赤	暗赤	3mm以下の灰黄・灰白・黒色砂粒 透明光沢粒	倉庫式	
87	縄文土器	深鉢 胴部	7層					横位の肩線跡による二条以上の連続刺突文		風化の為調整不明	灰青	灰青	1.5mm以下の灰白・黄褐色砂粒 1mm以下の透明光沢粒	倉庫式	
88	縄文土器	深鉢 口縁一割部	7層	29.2				肩線の肩線跡による連続刺突文 肩線跡による連続文		風化の為調整不明	暗赤	暗赤	1.5mm以下の灰白・黒色砂粒 透明・黒色砂粒 光沢粒	石版式	
89	縄文土器	深鉢 口縁一割部	7層	13.3				五条の横位の連続刺突文 肩線跡による連続文		割位のナデ 微黒黄	暗赤	暗赤	3mm以下の黄褐色砂粒 1.5mm以下の乳白色砂粒 透明光沢粒	石版式	
90	縄文土器	深鉢 口縁一割部	7層					口唇部に連続凹凸目 肩線跡工具による七条の横位の連続刺突文 肩線跡による連続文		ナデ	灰青	灰青	5mm以下の黄褐色・灰白・黒色砂粒 微細透明光沢粒	石版式	
91	縄文土器	深鉢 口縁	7層					肩線跡による連続刺突文		1層部にミガキ 横いナデ 微黒黄	暗赤	灰青	1mm以下の透明光沢粒	石版式	
92	縄文土器	深鉢 口縁	7層					肩線跡による連続刺突文		1層部にミガキ 丁草なナデ	灰青	灰青	1mm以下の暗赤・灰白色砂粒 透明光沢粒	石版式	
93	縄文土器	深鉢 胴部	7層					横方向下真による二条以上の横位の連続刺突文 肩線跡による連続文		微細黄 灰青	暗赤 灰青	暗赤 灰青	2mm以下の灰白・洗砂・黒色砂粒 透明光沢粒	石版式	
94	縄文土器	深鉢 胴部	7層					肩線跡による連続文		横いナデ	灰青	暗赤	3mm以下の透明・黒色光沢粒	石版式	
95	縄文土器	深鉢 胴部	7層					肩線跡による連続文		横いナデ	灰青	暗赤	3mm以下の透明・黒色光沢粒	石版式	
96	縄文土器	深鉢 胴部	7層					肩線跡による連続文		横方向のナデ	暗赤	暗赤	3mm以下の透明・黒色光沢粒	石版式	
97	縄文土器	1層一割部		27.0				ヘラ状工具による連続刺突文 横位の肩線跡刺突文		ミガキ・微細黄	灰青	灰青	3mm以下の灰白・透明光沢粒	下割式	
98	縄文土器	深鉢 口縁	S 1 2					ヘラ状工具による連続刺突文 横位の肩線跡刺突文		ミガキ	黄灰	暗赤 灰青	4mm以下の灰白・透明光沢粒	下割式	
99	縄文土器	深鉢 口縁付五割部						ヘラ状工具による連続刺突文 横位の肩線跡刺突文		丁草なナデ	灰青	灰青	2mm以下の乳白色砂粒 1mm以下の透明光沢粒	下割式	
100	縄文土器	深鉢 胴部	6層					ヘラ状工具による連続刺突文 横位の肩線跡刺突文		ミガキ	灰青	灰青	2mm以下の乳白色砂粒 1mm以下の透明光沢粒	下割式	
101	縄文土器	深鉢 胴部						ヘラ状工具による連続刺突文 二条の横位線		ミガキ	灰青	暗赤	1mm以下の乳白色砂粒 透明光沢粒	下割式	
102	縄文土器	深鉢 胴部						ヘラ状工具による連続刺突文		ミガキ	暗赤	暗赤	2mm以下の乳白色砂粒 1mm以下の透明光沢粒	下割式	
103	縄文土器	深鉢 口縁	7層					ヘラ状工具による連続刺突文		ミガキ	灰青	暗赤	5mm以下の乳白・黒色砂粒	下割式	
104	縄文土器	深鉢 胴部	7層					ヘラ状工具による連続刺突文		ミガキ	灰青	暗赤	3mm以下の乳白・黒色砂粒	下割式	
105	縄文土器	深鉢 胴部						肩線跡による連続刺突文 風化味		ナデ	暗赤	暗赤	4mm以下の灰・灰白色砂粒 透明光沢粒	下割式	
106	縄文土器	深鉢 胴部						肩線跡刺突文による連続刺突文と横位の刺突文		ミガキ	灰青	暗赤	2mm以下の乳白・白色砂粒	下割式	
107	縄文土器	深鉢 胴部	S 1 4					肩線跡による連続刺突文		ナデ	灰青	暗赤	3mm以下の灰黄・黒色砂粒 透明光沢粒	下割式	
108	縄文土器	深鉢 胴部	7層					肩線跡による連続刺突文の横三又状の肩線跡刺突文		ナデ	灰青	灰青	3mm以下の灰黄・黒・灰白・茶褐色砂粒 透明光沢粒	下割式	

第3表 出土土器観察表 (3)

遺物番号	遺物種別	出土部位	出土地点	法基 (m)	手法・製法・文様ほか		色 調		胎土の特長	備考
					外 面	内 面	外 面	内 面		
109	縄文土器	深鉢 胴部付近	S15		具敷線跡による斜削文	ナデ	黄褐色 灰黄色	黒	2mm以下の浅黄緑砂粒	下割式
110	縄文土器	深鉢 口縁	7層	28.5	ナデ 押型文の後ナデ 山形押型文	横方向のミガキ	浅黄 灰黄色	黒	1mm以下の透明・黒色乳 白色砂粒・黒色乳白色砂 粒・黒色砂粒	押型文
111	縄文土器	深鉢 1段～胴部付近	7層	23.1	口唇部施文・ミガキ 山形押型文	横・斜方向にミガキ	灰黄色	黒	5mm以下の赤褐色・黒・乳 白色砂粒 透明光沢	押型文
112	縄文土器	深鉢 胴部	7層		山形押型文	ナデ	黒灰 灰黄色	灰黄色	3mm以下の黒・灰褐色 黒色砂粒・黒色乳白色砂 2mmの黒色砂粒	押型文
113	縄文土器	深鉢 胴部	7層		斜方向の条痕 山形押型文	粗いミガキ	黒	灰黄	1mm以下の乳白・灰白色 砂粒	押型文
114	縄文土器	深鉢 胴部	7層		山形押型文	ナデ	黒灰 灰黄色	灰黄色	5mm以下の灰白・茶褐色・黄 褐色砂粒・黒色砂粒・黒色 砂粒 2mmの黒色砂粒	押型文
115	縄文土器	深鉢 胴部～底部	7層	10.8	山形押型文	斜方向の横いナデ	黒	灰黄	4mm以下の黒褐色・乳白・ 灰白色砂粒	押型文
116	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層	16.5	山形押型文の後、工具による不定斜方向の 条痕文	口唇部にミガキ 横・ 斜方向の粗いミガキ	黒	灰黄	2mm以下の赤・乳白・灰・ 黒・黄褐色砂粒・黒色砂粒 透明・半透明光沢	押型文
117	縄文土器	深鉢 口縁	7層		工具による不定斜方向の条痕文	口唇部 ミガキ 斜方向の粗いミガキ	浅黄	灰黄	2mm以下の灰・乳白・黄 灰色砂粒	押型文
118	縄文土器	深鉢 口縁	7層		工具による不定斜方向の条痕文	風化の龜裂不明	黒	灰黄	4mm以下の乳白・灰色砂 粒	押型文
119	縄文土器	深鉢 口唇	7層		工具による不定斜方向の条痕文	口唇部にミガキ 縦方 向のミガキ	黒	黒	3mm以下の黒・乳白色砂 粒	押型文
120	縄文土器	深鉢 胴部	7層		工具による不定斜方向の条痕文	粗いミガキ	灰黄	灰黄	2mm以下の乳白・灰白色 砂粒	押型文
121	縄文土器	深鉢 胴部	7層		工具による不定斜方向の条痕文 山形押型文	粗いミガキ	灰黄	灰黄	3mm以下の灰・黄灰色砂 粒	押型文
122	縄文土器	深鉢 1段～胴部	7層	23.1	横肉押型文 ナデ	口唇部に横肉押型文 ナデ 縦線	灰黄色 灰黄色	黒	5mm以下の灰白・黒色砂 20と同一個体	押型文
123	縄文土器	深鉢 口縁	7層		横肉押型文 ナデ	口唇部に横肉押型文 ナデ 縦線	灰黄色 灰黄色	黒	3mm以下の灰白・黒色砂 2mm以下の黒色砂粒 黒色砂粒	押型文
124	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層		縦位の具敷線跡による横方向の連続斜削文 (3単位) ミガキ	ミガキ・ナデ	灰黄色 灰黄色	黒	5mm以下の灰・乳白色の砂 2mm以下の赤・乳白色砂粒 黒色砂粒	中置式
125	縄文土器	深鉢 口縁	7層		縦位の具敷線跡による横方向の連続斜削文 (2単位以上) ナデ	ミガキ・ナデ	灰黄色 灰黄色	黒	1.5cm以下の赤・黒色の砂 1.5cm以下の赤・黒色の砂 1.5cm以下の赤・黒色の砂	中置式
126	縄文土器	深鉢 口唇	7層		縦位の具敷線跡による横方向の連続斜削文 (4単位) 縦方向の丁寧ナデ	横方向のミガキ ナデ	灰黄色	黒	1.5cm以下の灰白・黄褐色 の砂粒・透明光沢 黒	中置式
127	縄文土器	深鉢 口唇	7層		縦位の具敷線跡による横方向の連続斜削文 (3単位) 丁寧ナデ	横方向のミガキ ナデ	灰黄色	黒	5mm以下の黄褐色の砂 3mm 以下の黄褐色・乳白灰色砂粒	中置式
128	縄文土器	深鉢 口唇	7層		縦位の具敷線跡による横方向の連続斜削文 (4単位) 丁寧ナデ	横方向のミガキ 丁寧ナデ	灰黄	黒	2mm以下の黄色砂粒 3mm以下の乳白色砂粒	中置式
129	縄文土器	深鉢 口唇	7層		縦位の具敷線跡による横方向の連続斜削文 (3単位) ナデ	横方向の丁寧ナデ 横方向のミガキ	灰	浅黄	縦線・2mmの透明・黒色砂 粒・灰・黄・黒色砂粒 3-5mmの灰白・黒色砂粒	中置式
130	縄文土器	深鉢 口唇	7層		縦位の具敷線跡による横方向の連続斜削文 (3単位) 丁寧ナデ	横方向のミガキ ナデ	黒	灰黄	2.5mm以下の白色・乳白色 砂粒	中置式
131	縄文土器	深鉢 口唇	7層	23.4	縦位の具敷線跡による横方向の連続斜削文 (3単位) 卑孔 横方向のナデ	横方向のミガキ 卑孔・丁寧ナデ	黒	灰黄	1mm以下の乳白色砂粒 黒色・透明光沢	中置式
132	縄文土器	深鉢 口唇	7層		縦位の具敷線跡による横方向の連続斜削文 (3単位) 丁寧ナデ	横方向のミガキ 丁寧ナデ	黒	灰黄	1mm以下の乳白色砂粒 透明光沢	中置式
133	縄文土器	深鉢 口唇	7層		縦位の具敷線跡による横方向の連続斜削文 ナデ	横方向のミガキ 丁寧ナデ	黒	灰黄	縦線・1.5mmの透明光沢 浅黄・黒・白・黒灰色砂粒	中置式
134	縄文土器	深鉢 口唇	7層		縦位の具敷線跡による横方向の連続斜削文 (3単位) 丁寧ナデ	横方向のミガキ 丁寧ナデ	黒	灰黄	0.5-1mmの浅黄・灰白・黒 色砂粒 透明・黒色砂粒	中置式
135	縄文土器	深鉢 口唇	7層		縦位の具敷線跡による横方向の連続斜削文 (2単位以上)	ミガキ	黒	黒	2mm以下の黒・黄褐色・灰 黄色砂粒	中置式
136	縄文土器	深鉢 1段～胴部	7層	23.5	縦位の具敷線跡による横方向の押し風連続 斜削文 (3単位) 横・横方向の丁寧ナデ	横方向の丁寧ナデ	明黄褐色 黒	黒	3mm以下の黒・黄褐色・灰 黄色砂粒	中置式
137	縄文土器	深鉢 口唇	7層		縦位の具敷線跡による横方向の押し風連続 斜削文 (2単位以上) 横位の具敷線跡による 横肉斜削文 (2単位以上)	横方向の丁寧ナデ	黒	黒	0.5-1.5mmの茶・黄褐色砂 1.5mm以下の赤・乳白色砂 粒・黒色砂粒	中置式
138	縄文土器	(深鉢) 口唇	7層		縦位の具敷線跡による横方向の押し風連続 斜削文 (2単位以上)	横方向の丁寧ナデ	灰黄色	黒	1.5mm以下の赤・黒・黄褐色 砂粒 1.5mm以下の赤・ 黒色砂粒	中置式
139	縄文土器	深鉢 口唇	7層		縦位の具敷線跡による横方向の押し風連続 斜削文 (3単位以上)	横方向のミガキ	灰黄	黒	5mm以下の黄褐色砂粒 透明光沢・全光沢	中置式
140	縄文土器	深鉢 口唇	7層		縦位の具敷線跡による連続斜削文 (4単位) 丁寧ナデ	横方向のミガキ 丁寧ナデ	灰黄色	黒	3mm以下の黒く充ちた砂 1.5mm以下の赤・黄褐色 砂粒	中置式
141	縄文土器	深鉢 口唇	7層		縦位の具敷線跡による押し風連続斜削文 (2単位以上) ナデ	横肉 ナデ	黒	明黄褐色	1.5-2.5mmの茶・灰・黄褐色 乳白色砂粒 1mm以下の赤・ 黒色砂粒	中置式
142	縄文土器	深鉢 口唇	7層		縦位の具敷線跡による押し風連続斜削文 (1単位以上)	横方向のミガキ 丁寧ナデ	黒	黒	2mm以下の黒・灰黄・灰白 黄褐色砂粒 透明・黒色砂粒	中置式
143	縄文土器	深鉢 胴部	7層		縦位の具敷線跡による横方向の連続斜削文 ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	5mm以下の赤・黒・灰・黄 褐色砂粒・黒色砂粒	中置式
144	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層	22.7	具敷線跡による横方向の条痕文 ナデ	横方向のミガキ ナデ	黒 黄褐色 灰黄色	黒	4mm以下の灰・灰黄・黒 灰色砂粒 2mm以下の黒色乳光沢	中置式

第3表 出土土器観察表 (4)

発掘 番号	種別	器 種 名	出土 地点	数量 (個)	寸法 (cm)		手法・調整・文様ほか		色 質		胎土の特征	備 考
					口径	高さ	外 面	内 面	外 面	内 面		
145	陶文土器	深鉢 口縁一部破	7層	19.6			貝殻塵埃 横ナゲ 黒炭	横・斜方向のミガキ	浅黄灰	浅黄灰	5mm以下の乳白・黒・灰白色砂粒 2mm以下の黒色光沢粒	中厚式
146	陶文土器	深鉢 口縁一部破	7層				貝殻塵埃 ナゲ・スス付着	横方向のミガキ 丁寧ナゲ	灰白黄泥	灰白黄泥	6mm以下の乳白・黒・茶色砂粒 2mm以下の黒色光沢粒	中厚式
147	陶文土器	深鉢 口縁一部破	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文 ミガキ 灰塵	丁寧ナゲ 横方向のミガキ 黒炭	灰白黄泥	灰白黄泥	2mm以下の乳白・黒・茶色砂粒 1mm以下の透明光沢粒	中厚式
148	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文 ミガキ	横方向のミガキ 丁寧ナゲ	黄	灰白黄泥	2mm以下の灰白色砂粒 1mm以下の透明・黒色光沢粒	中厚式
149	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文 スス付着	横方向の粗ミガキ	灰黄陶	黒泥	微細な透明・半透明・黒色光沢粒 2mm以下の黒・黄・茶色砂粒	中厚式
150	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文	横方向のミガキ 丁寧ナゲ	灰白黄泥	灰白黄泥	微細な透明・半透明・黒色光沢粒 2mm以下の黒・黄・茶色砂粒	中厚式
151	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文	横方向のミガキ 丁寧ナゲ	灰白黄泥	灰白黄泥	微細な透明・半透明・黒色光沢粒 2mm以下の黒・黄・茶色砂粒	中厚式
152	陶文土器	深鉢 口縁	7層				ナゲ 貝殻塵埃による横方向の赤黄文 穿孔	横方向のミガキ	浅黄灰	ミガキ	2mm以下の乳白・黒色砂粒	中厚式
153	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文 粗ミガキ	粗ミガキ	黄灰	黄灰	3.5mm以下の灰・黒・灰白色砂粒 2mm以下の黒色光沢粒	中厚式
154	陶文土器	深鉢 口縁一部破	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文 ナゲ	横方向のミガキ 粗ミガキ ナゲ	灰白黄泥	灰白黄泥	4mm以下の黄灰・灰白色砂粒	中厚式
155	陶文土器	深鉢 口縁一部破	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文 ナゲ スス付着	ナゲ 横方向のミガキ	灰白黄泥	黄泥	6mm以下の茶・乳白・黒色砂粒 2mm以下の黒色光沢粒	中厚式
156	陶文土器	深鉢 口縁一部破	7層				ナゲ 貝殻塵埃による横方向の赤黄文	ナゲ 横方向のミガキ	灰白黄泥	灰白黄泥	4mm以下の灰白・黒・茶色砂粒 0.5-2mmの黒色光沢粒	中厚式
157	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文 ナゲ	風化の烏黒斑不明	灰黄陶 黒泥	灰白黄泥	9mm以下の灰白・黒・灰・茶・黄・赤・黒色砂粒 2mm以下の黄・黒色光沢粒	中厚式
158	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文 ナゲ	横・斜方向の丁寧ナゲ 黒炭	灰白黄泥	灰白黄泥	3mm以下の乳白・灰・黒色砂粒 1mm以下の透明光沢粒	中厚式
159	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文 ナゲ	ナゲ	灰白黄泥 黒泥	黒泥	微細な透明・半透明・黒色光沢粒 1mm以下の透明光沢粒	中厚式
160	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文	横方向のミガキ 横方向のナゲ	黒泥	灰白黄泥	3mm以下の茶・黄・灰白色砂粒 2mm以下の黒色光沢粒	中厚式
161	陶文土器	深鉢 口縁	7層				ナゲ 貝殻塵埃による横方向の赤黄文	横方向のミガキ	灰黄	灰黄	3mm以下の黄灰・黒・灰・茶・黄・赤・黒色砂粒 2mm以下の透明光沢粒	中厚式
162	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文 スス付着	横方向のミガキ	灰白黄泥	灰白黄泥	2mm以下の灰黄・黒色砂粒 1mm以下の透明・黒色光沢粒	中厚式
163	陶文土器	深鉢 口縁	7層				ナゲ 貝殻塵埃による横方向の赤黄文 ミガキ 振痕	横方向のミガキ ナゲ・振痕	黄泥	黄泥	4mm以下の乳白色・黒色砂粒 2mm以下の透明・黒色光沢粒	中厚式
164	陶文土器	深鉢 口縁一部破	S14	14.8			ミガキ 振痕	横方向の貝殻塵埃 黒炭	明赤陶	明赤陶	2mm以下の茶・黒色砂粒 2mm以下の茶・黒・乳白・黒色・透明光沢粒	164と同一
165	陶文土器	深鉢 口縁一部破		9.9			横方向の貝殻塵埃 黒炭 ミガキ	ミガキ	明赤陶	明赤陶	6mm以下の茶・黒色砂粒 2mm以下の茶・黒・乳白・黒色・透明光沢粒	164と同一
166	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による不定向の赤黄文	ミガキ 丁寧ナゲ	黄	明赤陶 黒泥	2mm以下の灰白・褐色の砂粒 2mm以下の黒色・透明光沢粒	
167	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文	ナゲ	灰白黄泥	灰白黄泥	4mm以下の白色砂粒 1mm以下の黒色砂粒 全色光沢粒	
168	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文 ナゲ	ナゲ・黒炭	灰白黄泥	黒泥	1.5mm以下の茶・乳白色砂粒 透明光沢粒	
169	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の引き貝殻塵埃	ナゲ	明赤陶	灰白黄泥	1.5mm以下の黄白・黒・茶色砂粒 透明光沢粒	
170	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文	斜方向のナゲ	黄	灰白黄泥	2mm以下の黄灰・灰白色砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
171	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文	ナゲ	黄	灰白黄泥	4mm以下の赤褐色砂粒 1mm以下の灰白・透明光沢粒	
172	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文 ナゲ	横方向の丁寧ナゲ 黒炭	灰白黄泥	灰白黄泥	3mm以下の灰・灰白色砂粒 0.5mm以下の透明光沢粒	
173	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文	丁寧ナゲ	灰白黄泥	灰白黄泥	5mm以下の茶褐色砂粒 2mm以下の白色砂粒 透明光沢粒	
174	陶文土器	深鉢 口縁	6層				斜方向の貝殻塵埃	ナゲ・黒炭	灰白黄泥	黒泥	3mm以下の茶褐色・灰・灰白色砂粒 0.5mm以下の透明光沢粒	
176	陶文土器	深鉢 口縁	6層				2段の貝殻塵埃による斜黄文	ナゲ	灰白黄泥	明赤陶	1mm以下で乳白・褐色砂粒 微細な黒色光沢粒	
176	陶文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻塵埃による横方向の赤黄文 穿孔	横方向の丁寧ナゲ 穿孔	灰白黄泥	灰白黄泥	4mm以下の黒・褐色砂粒	
177	陶文土器	深鉢 口縁	7層				ミガキ	丁寧ナゲ	灰白黄泥	黒泥	微細な透明・半透明・黒色光沢粒 1mm以下の透明光沢粒	
178	陶文土器	深鉢 口縁	6層				横位の粗ミガキ ナゲ	丁寧ナゲ	灰白黄泥	灰白黄泥	3mm以下のオリーブ黒・灰白・褐色砂粒 0.5mm以下の透明光沢粒	
179	陶文土器	深鉢 口縁	7層				横方向のナゲ・横位の粗ミガキ 横方向に工具痕 振痕	ナゲ 黒炭	灰白黄泥	灰白黄泥	6mm以下の褐色・黒色砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
180	陶文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の粗ミガキによる粗ミガキ 丁寧ナゲ	丁寧ナゲ	黄	黄	2.5mm以下の黄灰・灰白色砂粒 黒色光沢粒・透明光沢粒	

第3表 出土土器観察表 (5)

通称番号	種別	部	種	出土地点	法量 (m)	手記、調査、文様ほか		色		胎土の特徴	備考
						外	内	外	内		
181	縄文土器	深鉢	底部	7層	14.3	ナゲ 黒灰	ナゲ	明赤陶	にぶい	黄褐色透明、半透明、黒色光沢。乳白、黒、乳白色砂粒	
182	縄文土器	深鉢	底部	7層	10.2	ナゲ	黄褐色の角礫混入	明赤陶	明赤陶	黄褐色透明、半透明、黒色光沢。2mm以下の黄灰、黒、乳白、褐色砂粒	
183	縄文土器	深鉢	底部	7層	15.1	縦砂の副線 ナゲ	ナゲ	黒陶	黒陶	2.5mm以下の黄砂、灰白、灰色砂粒	
184	縄文土器	深鉢	胴部-底部	7層	10.0	ミガキ 丁寧なナゲ	縦、横方向のミガキ 黒灰	灰黄	にぶい	1.5-3mmの褐色砂粒 1mm以下の透明、黒色光沢	
185	縄文土器	深鉢	底部	7層	10.0	縦位の副線 異敷線跡による糸状文 ナゲ	ナゲ	明赤陶	明赤陶	3mm以下の灰白色砂粒、透明、黒色光沢	
186	縄文土器	深鉢	底部	7層	7.7	丁寧なナゲ	工具によるナゲ 黒灰	灰白	灰	1mm以下の透明光沢 灰色砂粒	
187	縄文土器	深鉢	底部	7層	6.5	縦方向のミガキ ミガキ	ミガキ	橙	紺灰黄	1mm程度の乳白色砂粒 黒色、透明光沢	
188	縄文土器	深鉢	底部	7層		異敷線跡による横方向の糸状 縦位の縦比線による副線	丁寧なナゲ	にぶい	黄褐色	3mm以下の灰白色砂粒	
307	縄文土器	深鉢	口縁	3層		口縁部に連続的目目 短沈線文 (横、斜)	短沈線 (横) ナゲ	陶	陶	2mm以下の乳白、灰褐色砂粒 透明、黒色光沢	
308	縄文土器	深鉢	口縁	3層		口縁部に連続的目目 短沈線文 (横、斜)	短沈線 (横)	陶	陶	1mm以下の黄褐色、灰褐色砂粒 透明、黒色光沢	
309	縄文土器	深鉢	口縁	3層		口縁部に連続的目目 短沈線文 (横、斜)	短沈線 (斜)	陶	陶	2mm以下の黄褐色、灰白色砂粒 黄褐色透明光沢	
310	縄文土器	深鉢	口縁	3層		ナゲ 短沈文 (横)	ナゲ、短沈線文 (横)	にぶい	陶	1.5mm以下の黄、灰黄、灰白、黒色砂粒	
311	縄文土器	深鉢	口縁	3層		口縁部に連続的目目 短沈線文 (横) ナゲ	短沈線文 (横)、ナゲ	灰陶	灰陶	8mm大のにぶい黄褐色砂粒 2mm以下の黄、黄褐色砂粒 透明光沢	
312	縄文土器	深鉢	口縁	3層		縦位副線 短沈線文 (横) スス付着	ナゲ、短沈線文 (横)	明赤陶	明赤陶	1mm以下の黄砂、灰白、褐色砂粒 黒色光沢	
313	縄文土器	深鉢	胴部	3層		横方向のナゲ 短沈線文 (横、斜)	横方向のナゲ	陶	にぶい	2mm以下の乳白、灰白色砂粒	
314	縄文土器	深鉢	胴部	3層		短沈文 (横) 短沈線文 (斜)	ナゲ 短沈線文 (横)	赤陶	赤陶	3mm以下の灰陶、橙、灰黄色砂粒 黒色透明光沢	
315	縄文土器	深鉢	胴部	3層		胎付突帯 短沈線文 (横、斜)	横方向のナゲ 円形目目、短沈線文 (横)	黒陶	暗赤陶	1.5mm以下の乳白色砂粒、透明光沢	
316	縄文土器	深鉢	胴部	3層		短沈線文 (横、斜、斜)	横方向のナゲ 短沈線文 (横)	にぶい	にぶい	1mm以下の灰白、灰褐色砂粒 黒色、透明光沢	
317	縄文土器	深鉢	胴部	3層		短沈文 (横、斜) 横方向のナゲ	横方向のナゲ 短沈線文 (横)	にぶい	にぶい	3mm以下の黄砂、にぶい陶、灰白色砂粒、透明光沢	
318	縄文土器	深鉢	胴部	3層		短沈文 (横、斜) 黒灰	横方向のナゲ	灰陶	陶	3mm以下の灰色砂粒 透明光沢	
319	縄文土器	深鉢	胴部	3層		短沈文 (斜) 胎付突帯 明赤文 (横)	丁寧なナゲ	赤陶	赤陶	2mm以下の褐色、黄、灰黄色砂粒、黒色、透明光沢	
320	縄文土器	深鉢	胴部	3層		短沈文 (横、斜) 短沈線文 (斜)	ナゲ	陶	黒陶	1mm以下の乳白色、灰色砂粒 透明光沢	
321	縄文土器	深鉢	胴部	3層		ナゲ 短沈線文 (横)	ナゲ	陶	陶	微細な透明光沢	
322	縄文土器	深鉢	胴部	3層		短沈線文 (横、斜) ナゲ	ナゲ	灰陶	にぶい	1mm以下の透明光沢	
323	縄文土器	深鉢	胴部	3層		短沈文 (横、斜) ナゲ スス付着	ナゲ	にぶい	赤陶	2mm以下の褐色、乳白色砂粒 透明、黒色光沢	
324	縄文土器	深鉢	胴部	3層		短沈線文 (横、斜、斜)	ナゲ	黒陶	にぶい	2mm以下の乳白、黒、褐色砂粒 微細な透明光沢	
325	縄文土器	深鉢	胴部	3層		短沈線文 (横、斜) 短沈文 (横) スス付着	横方向のナゲ	灰陶	にぶい	1.5mm以下の黄褐色砂粒、透明光沢	
326	縄文土器	深鉢	胴部	3層		ナゲ 短沈線文 (横、斜)	ナゲ	陶	にぶい	2mm以下の灰、黄褐色砂粒 微細な透明光沢	
327	縄文土器	深鉢	胴部	3層		短沈による山形文 ナゲ	ナゲ	陶	灰黄陶	1mm以下の褐色砂粒	
328	縄文土器	深鉢	胴部	3層		短沈線文 (斜)	ナゲ	灰陶	にぶい	0.5mm以下の透明光沢	
329	縄文土器	深鉢	胴部	3層		短沈文 (横) ナゲ	ナゲ 黒灰	にぶい	陶	1.5mm以下の褐色砂粒 透明光沢	
330	縄文土器	深鉢	口縁	3層		短沈文 (横) ナゲ	丁寧なナゲ	にぶい	灰陶	1mm以下の黄褐色、灰褐色砂粒 黒色光沢	底状口縁
335	弥生土器	深鉢	口縁	22.1		口縁部に連続的目目 横ナゲ、スス付着	横ナゲ	灰黄陶	にぶい	2mm以下の黄、赤、乳白色砂粒 1mm以下の透明光沢	336と同一
336	弥生土器	深鉢	口縁			口縁部に連続的目目 横ナゲ、スス付着	横ナゲ 黄褐色	灰黄陶	にぶい	4mm以下の黄褐色、灰、乳白色砂粒 1mm以下の透明光沢	335と同一
337	弥生土器	深鉢	口縁			口縁部に連続的目目 横ナゲ、スス付着	横ナゲ、黄褐色	陶	陶	2mm以下の黒、乳白色、砂粒 透明光沢	
338	弥生土器	深鉢	口縁		10.3	ナゲ 横方向のハケ目	横ナゲ、黄褐色 斜方向のハケ目の後ナゲ	にぶい	陶	3mm以下の黒、黒、乳白色砂粒 黒色光沢	

第3表 出土土器観察表 (6)

遺物 番号	種別	器 種 類	出土 地点	数量 (個)	口径 (cm)		高さ (cm)		手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備考	
					口径	底径	全高	外 面		内 面		外面			内面
								外 面	内 面	外 面	内 面				
339	弥生土器	甕 底部							ハケ目	ナデ 炭化動物糞	横	黒褐色	3.5cm以下の灰白・にぶい黄褐色 1cm以下の透明光沢粒		
340	弥生土器	口縁-胴部	SA 1	6.8					ナデ 縦・斜方向のハケ目	ナデ-指痕痕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2.5cm以下の透明・黒褐色光沢粒	341と同一	
341	弥生土器	胴部-底部	SA 1	8.0					ナデ 縦・斜方向のハケ目 底部にへつによる沈痕	ナデ-指痕痕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2.5cm以下の褐色砂粒 黒色・透明光沢粒	340と同一	
342	弥生土器	口縁-胴部	SA 1						ハケ目	工具ナデ	赤褐色	赤褐色	3.5cm以下の乳白・黄・褐色砂粒	343と同一	
343	弥生土器	底 底部-胴部	SA 1						ハケ目	工具ナデ-指痕痕	赤褐色	赤褐色	5mm以下の茶褐色・黒褐色砂粒 1.5cm以下の灰褐色光沢粒	342と同一	
344	弥生土器	口縁-胴部							ナデ	ナデ-風化灰味	横	横	2.5cm以下の灰・乳白色砂粒 微細な透明光沢粒		
345	弥生土器	器 胴部							縦・斜方向のハケ目 ハケ目の後ミガキ	横・斜方向のハケ目 ハケ目の後ナデ-指痕痕	横	にぶい黄褐色	3.5cm以下の灰・乳白色砂粒 微細な透明光沢粒		
346	弥生土器	甕 底部		8.0					ハケ目・ミガキ 粘土のかえり	ナデ-肌裏 指痕痕	横	にぶい黄褐色 灰褐色	3.5cm以下の灰白・褐色砂粒 透明・黒色光沢粒		
347	弥生土器	甕 底部		4.7					ミガキ-肌裏	丁寧なナデ-肌裏	にぶい黄褐色 透明光沢	ナリーブ調	3.5cm以下の灰白・褐色砂粒 透明光沢粒	347と同一	
348	弥生土器	高杯 杯部	SA 1	25.0					ミガキ-スス付着	ミガキ (風化の薄平位 不明) スス付着-肌裏	横 透明光沢	透明光沢	2.5cm以下の透明・黒色光沢粒	346と同一	
349	弥生土器	高杯 杯部							ミガキ-風化灰味	ナデ-ハケ目 指痕痕	横	横	1.5cm以下の灰白色砂粒 黒色透明光沢粒		
353	弥生土器	甕 口縁-胴部	SA 2	22.7					ナデ-斜方向の工具ナデ 指痕痕-スス付着	横ナデ-指痕痕 斜方向 のハケ目の後ナデ	明褐色	明褐色	4.5cm以下の赤褐色・乳白色砂粒 2.5cm以下の黒色・透明光沢粒		
354	弥生土器	甕 口縁-胴部	SA 2	12.5					ナデ	ナデ-指痕痕-スス付着	横	明褐色	2.5cm以下の乳白・褐色砂粒 透明光沢粒		
355	弥生土器	甕 口縁-胴部	SA 2	14.4					ナデ-ハケ目 指痕痕 スス付着	横方向のハケ目 指痕痕	横	にぶい黄褐色	3.5cm以下の赤褐色・黒褐色砂粒 赤褐色・灰白色砂粒		
356	弥生土器	甕 口縁-底部	SA 2						縦・斜方向のハケ目 指痕痕-スス付着	ハケ目の後ナデ ナデ-工具痕	にぶい黄褐色 灰褐色	明褐色	3.5cm以下のにぶい黄褐色・ 灰白色砂粒		
357	弥生土器	甕 胴部	SA 2						縦・斜方向のハケ目の後ナデ スス付着	斜方向のハケ目の後ナデ	にぶい黄褐色	黒褐色	1.5cm以下の明褐色砂粒・ 黒色光沢粒		
358	弥生土器	甕 口縁-底部	SA 2	11.2					ハケ目 (斜・縦)・ナデ スス付着	ハケ目の後ナデ 指痕痕	にぶい黄褐色 灰褐色	にぶい黄褐色	6.5cm以下の褐色砂粒 2.5cm以下の赤褐色・黄褐色砂粒 透明光沢粒		
359	弥生土器	甕 口縁	SA 2	10.6					縦方向のハケ目・ナデ スス付着	横ナデ-指痕痕	にぶい黄褐色 灰褐色	横褐色	1.5cm以下の褐色・淡黄色砂粒 透明光沢粒		
360	弥生土器	甕 胴部	SA 2						ナデ	縦方向のナデ	横	黄褐色	2.5cm以下の褐色砂粒 黒色・透明光沢粒		
361	弥生土器	甕 胴部	SA 2						ミガキ	ミガキ	横	横	1.5cm以下の乳白色砂粒 黒色・透明光沢粒		
362	弥生土器	甕 胴部	SA 2						縦方向のミガキ	ナデ-指痕痕	横	黄褐色	2.5cm以下の灰・乳白色砂粒 微細な透明光沢粒		
363	弥生土器	甕 胴部	SA 2						直線文	縦方向のナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3.5cm以下の白色砂粒 微細な透明光沢粒		
364	弥生土器	甕 胴部	SA 2						直線文	ナデ	黒褐色	黒褐色	2.5cm以下の赤褐色砂粒 微細な透明光沢粒		
365	弥生土器	甕 胴部	SA 2						直線文	ナデ	にぶい黄褐色	黒褐色	1.5cm以下の灰・赤褐色砂粒 微細な透明光沢粒		
366	弥生土器	甕 胴部	SA 2						直線文	ナデ	灰褐色	黒褐色	2.5cm以下の淡褐色・赤褐色砂粒 微細な透明光沢粒		
367	弥生土器	甕 胴部	SA 2						直線文	ナデ	黒褐色	灰褐色	2.5cm以下の赤褐色・白・褐色砂粒 微細な透明光沢粒		
368	弥生土器	甕 胴部	SA 2						直線文	ナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	1.5cm以下の乳白・黄褐色砂粒 0.5cm以下の透明光沢粒		
369	弥生土器	甕 底部	SA 2	4.5					風化著しく調整不明	風化著しく調整不明	横	黄褐色	3.5cm以下の灰・乳白色砂粒 6.5cm以下の茶褐色色粒		
370	弥生土器	鉢 口縁-胴部	SA 2	11.0					斜方向のハケ目 ナデ-スス付着	ナデ-ハケ目-指痕痕 スス付着	横	横	3.5cm以下の灰・乳白・褐色砂粒 微細な透明光沢粒		
375	弥生土器	甕 口縁	3層	20.0					横ナデ-肌裏 趾付突起	ナデ	にぶい黄褐色	横	6.5cm以下の褐色の粒 1.5cm以下の透明光沢粒		
376	弥生土器	甕 口縁	5層1						ナデ-ハケ目	風化の著しい不明	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	5.5cm以下の黒褐色・褐色砂粒 黒色光沢粒		
377	弥生土器	甕 底部	3層	10.3					ナデ-横方向の上具ナデ スス付着	ナデ-工具ナデ	横	横	2.5cm以下の灰・黄褐色・褐色・ 乳白色砂粒		
378	弥生土器	甕 胴部	5層2						ナデ-直線文	ナデ	灰褐色	灰褐色	2.5cm以下の灰褐色・灰白色砂粒 透明光沢粒		
379	弥生土器	不用 口縁	3層						口唇部斜方向のハケ目 縦方向のミガキ-肌裏	ナデ	横	にぶい黄褐色	1.5cm以下の灰褐色砂粒		

第3表 出土土器観察表 (7)

番号	器種	石 材	出土層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)
189	石鏃	石英	Ⅷ層	3.7	1.7	0.3	2.1
190	石鏃	チャート	Ⅵ層	2.4	2.0	0.4	1.5
191	石鏃	チャート	Ⅷ層	2.3	2.2	0.5	1.7
192	石鏃	チャート	Ⅷ層	2.5	2.2	0.5	1.6
193	石鏃	チャート	Ⅷ層	3.1	1.8	0.3	1.2
194	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	2.4	1.6	0.6	1.3
195	石鏃	チャート	Ⅷ層	2.2	1.7	0.4	1.0
196	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	2.3	1.7	0.5	1.0
197	石鏃	チャート	Ⅷ層	2.1	1.1	0.3	0.5
198	石鏃	チャート	Ⅵ層	2.4	2.0	0.5	1.2
199	石鏃	チャート	Ⅶ層	2.1	1.7	0.4	1.0
200	石鏃	石英	Ⅷ層	2.7	1.7	0.3	1.0
201	石鏃	チャート	Ⅵ層	2.1	1.4	0.3	0.5
202	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.7	1.3	0.2	0.3
203	石鏃	チャート	Ⅷ層	2.4	2.0	0.5	1.5
204	石鏃	チャート	Ⅷ層	1.8	1.9	0.2	0.6
205	石鏃	チャート	Ⅶ層	2.2	1.6	0.4	0.7
206	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	2.3	0.9	0.3	0.4
207	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	2.3	1.5	0.2	0.6
208	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	2.0	1.1	0.3	0.7
209	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.8	1.5	0.4	0.6
210	石鏃	チャート	Ⅷ層	1.6	1.4	0.3	0.4
211	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.8	1.3	0.3	0.5
212	石鏃	チャート	Ⅷ層	1.6	1.3	0.3	0.4
213	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.6	1.2	0.3	0.4
214	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.5	1.3	0.3	0.4
215	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	0.9	0.8	0.2	0.1
216	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.0	1.2	0.2	0.1
217	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.1	1.0	0.2	0.2
218	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	0.9	0.9	0.3	0.1
219	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.1	1.1	0.2	0.2
220	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.2	1.1	0.3	0.2
221	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.5	1.2	0.2	0.3
222	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.4	1.1	0.2	0.2
223	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.3	1.2	0.2	0.2
224	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.6	1.0	0.4	0.5
225	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.4	1.4	0.3	0.4
226	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.3	1.4	0.3	0.3
227	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.1	1.4	0.3	0.2
228	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.1	1.3	0.3	0.3
229	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.2	1.3	0.3	0.3
230	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.1	1.1	0.3	0.2
231	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.0	1.2	0.2	0.1
232	石鏃	チャート	Ⅷ層	1.3	1.2	0.3	0.2
233	石鏃	チャート	Ⅷ層	1.2	1.2	0.2	0.2
234	石鏃	黒曜石	Ⅷ層	1.8	0.8	0.2	0.2
235	尖頭状石器	チャート	Ⅷ層	3.8	2.8	1.0	9.7
236	尖頭状石器	チャート	Ⅷ層	2.4	2.1	0.7	2.2
237	尖頭状石器	チャート	Ⅷ層	2.2	2.0	0.5	2.0
238	尖頭状石器	チャート	Ⅶ層	2.2	1.7	0.3	1.1
239	尖頭状石器	チャート	Ⅷ層	2.6	2.0	0.4	1.5
240	尖頭状石器	チャート	Ⅷ層	2.3	1.4	0.6	1.2
241	削器	チャート	Ⅷ層	6.3	3.2	1.3	17.8
242	削器	チャート	Ⅷ層	4.2	2.8	1.0	11.6
243	削器	チャート	Ⅷ層	4.7	3.1	1.1	1.4
244	削器	黒曜石	Ⅷ層	3.4	2.5	1.0	6.2
245	削器	チャート	Ⅷ層	2.8	3.1	1.1	8.5
246	削器	黒曜石	Ⅷ層	2.8	3.8	0.8	6.6
247	削器	チャート	Ⅷ層	2.8	4.1	0.9	7.1
248	削器	チャート	Ⅷ層	4.3	3.9	1.2	21.5
249	削器	黒曜石	Ⅷ層	3.0	3.3	1.2	9.2
250	石錐	黒曜石	Ⅷ層	2.3	2.2	0.8	3.1
251	石錐	黒曜石	Ⅷ層	2.1	1.6	0.7	1.9
252	石核	黒曜石	Ⅷ層	3.0	4.6	1.2	14.6
253	石核	黒曜石	Ⅷ層	3.4	2.8	1.3	11.9
254	石核	黒曜石	Ⅷ層	3.3	2.6	1.0	7.4
255	楔形石器	チャート	Ⅷ層	2.3	3.7	0.8	6.3

第3表 出土石器観察表 (1)

番号	器 種	石 材	出 土 層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 さ (g)
256	楔形石器	黒曜石	Ⅲ層	2.3	2.8	0.8	4.0
257	折衝刺片	ホルンフェルス	Ⅲ層	3.9	5.6	1.5	25.8
258	使用痕刺片	ホルンフェルス	Ⅲ層	4.8	4.9	1.2	24.9
259	使用痕刺片	ホルンフェルス	Ⅲ層	4.3	5.2	1.1	25.1
260	使用痕刺片	黒曜石	Ⅲ層	2.1	3.4	1.0	6.1
261	使用痕刺片	黒曜石	Ⅲ層	2.3	2.6	0.7	3.2
262	使用痕刺片	チャート	Ⅲ層	2.5	1.4	0.2	0.7
263	使用痕刺片	砂岩	Ⅲ層	4.3	10.8	1.7	68.0
264	使用痕刺片	黒曜石	Ⅲ層	3.7	2.2	1.1	8.1
265	使用痕刺片	黒曜石	Ⅲ層	1.6	3.4	0.7	3.6
266	使用痕刺片	黒曜石	Ⅲ層	3.0	3.4	0.8	6.9
267	使用痕刺片	黒曜石	Ⅲ層	2.1	3.2	0.9	3.6
268	使用痕刺片	チャート	Ⅲ層	3.3	2.4	0.9	5.8
269	使用痕刺片	チャート	Ⅲ層	3.9	2.0	0.6	3.6
270	二次加工刺片	チャート	Ⅲ層	3.4	4.2	1.5	20.3
271	二次加工刺片	黒曜石	Ⅲ層	3.5	3.3	1.1	10.1
272	二次加工刺片	黒曜石	Ⅲ層	2.3	2.8	1.5	8.0
273	二次加工刺片	黒曜石	Ⅲ層	3.0	2.7	1.2	6.1
274	不明刺片	珪質岩	Ⅲ層	2.4	1.5	0.3	0.6
275	不明刺片	チャート	Ⅲ層	2.7	1.3	0.2	0.8
276	不明恰円形石製品	粘板岩	Ⅲ層	3.4	5.5	0.5	8.9
277	局部磨製石斧	ホルンフェルス	Ⅲ層	12.3	7.7	3.5	430.0
278	磨石・砥石	凝灰岩	Ⅲ層	8.1	6.1	4.6	294.7
279	磨石・砥石	凝灰岩	Ⅲ層	9.8	8.3	3.8	371.5
280	磨石・砥石	尾鈴山系酸性凝灰岩	Ⅲ層	9.1	7.8	4.5	450.1
281	磨石・砥石	砂岩	Ⅲ層	7.0	6.2	2.8	170.9
282	磨石・砥石	輝石安山岩	Ⅲ層	11.7	12.9	9.3	2000.0
283	磨石・砥石	尾鈴山系酸性凝灰岩	Ⅲ層	8.7	10.0	5.4	700.0
284	磨石・砥石	凝灰岩	Ⅲ層	9.4	8.5	5.8	710.0
285	磨石・砥石	尾鈴山系酸性凝灰岩	Ⅲ層	8.2	7.9	4.7	405.0
286	磨石・砥石	砂岩	Ⅲ層	9.8	9.1	4.5	550.0
287	磨石・砥石	砂岩	Ⅲ層	16.7	8.7	3.4	725.0
288	磨石・砥石	砂岩	Ⅲ層	10.3	8.6	5.7	620.0
289	磨石・砥石	砂岩	Ⅲ層	10.8	7.7	4.0	430.0
290	磨石・砥石	砂岩	Ⅲ層	8.2	10.0	5.1	257.0
291	磨石・砥石	尾鈴山系酸性凝灰岩	Ⅲ層	4.4	9.9	4.0	208.5
292	磨石・砥石	砂岩	Ⅲ層	9.8	7.0	5.5	435.0
293	磨石・砥石	砂岩	Ⅲ層	4.9	4.7	2.9	100.0
294	台石	輝石安山岩	Ⅲ層	26.5	28.0	7.7	6300.0
295	台石	輝石安山岩	Ⅲ層	18.3	27.2	6.4	4700.0
296	台石	輝石安山岩	Ⅲ層	18.5	18.6	6.2	3200.0
297	台石	輝石安山岩	Ⅲ層	20.2	20.5	5.7	3500.0
298	台石	輝石安山岩	Ⅲ層	18.3	16.7	5.3	2500.0
299	台石	輝石安山岩	Ⅲ層	13.0	12.8	3.9	1000.0
300	台石	輝石安山岩	Ⅲ層	22.1	14.7	3.8	2000.0
301	台石	輝石安山岩	Ⅲ層	28.4	21.2	10.1	7400.0
302	台石	凝灰岩	Ⅲ層	24.9	30.9	5.9	6300.0
303	台石	凝灰岩	Ⅲ層	26.7	15.1	7.1	5000.0
304	台石	輝石安山岩	Ⅲ層	9.4	15.5	8.4	1700.0
305	台石	輝石安山岩	Ⅲ層	9.4	14.5	8.1	2400.0
306	台石	輝石安山岩	Ⅲ層	6.9	9.9	4.5	389.8
331	石匙	珪質岩	Ⅲ層	5.2	3.9	0.8	15.8
332	石匙	珪質岩	Ⅲ層	4.4	3.0	0.8	10.8
333	石鏃	黒曜石	Ⅲ層	1.4	1.4	0.4	0.4
334	石鏃	黒曜石	Ⅲ層	1.8	1.4	0.4	0.5
350	台石	輝石安山岩	SA 1	25.1	19.2	6.1	4500.0
351	磨石・砥石	輝石安山岩	SA 1	8.8	8.1	7.3	659.0
352	磨石・砥石	凝灰岩	SA 1	12.0	10.9	8.8	1600.0
371	砥石	砂岩	SA 2	3.4	9.4	0.4	22.6
372	砥石	ホルンフェルス	SA 2	10.6	3.9	3.7	278.0
373	石施丁	粘板岩	SA 2	3.1	2.8	0.4	5.0
380	磨製石器	粘板岩	Ⅲ層	2.2	2.0	0.3	1.7

第9表 出土石器観察表 (2)

374	鉄鏃		SA 2	3.3	2.5	0.1	3.9
381	鉄貨		Ⅲ層				
382	硯	シルト岩	Ⅲ層	2.9	4.3	1.1	16.7

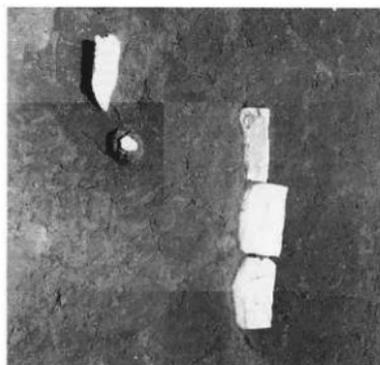
第10表 出土遺物観察表



内屋敷遺跡全景



調査区全景



配石遺構 ① (2号配石)



土層断面



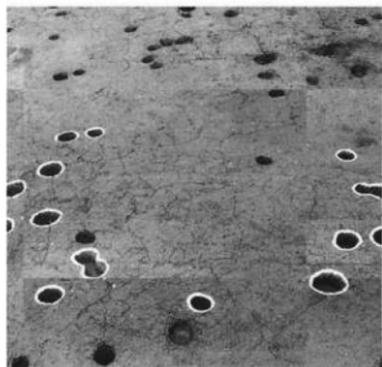
配石遺構 ② (3号配石)



集石遺構 (S12)



掘立柱建物跡 ① (SB11)



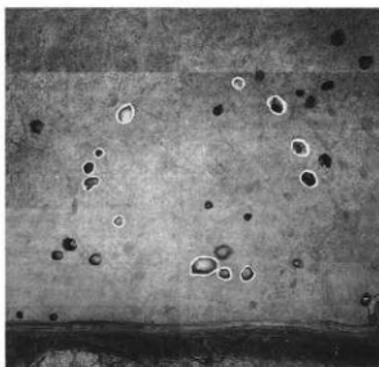
掘立柱建物跡 ② (平地住居 SB7)



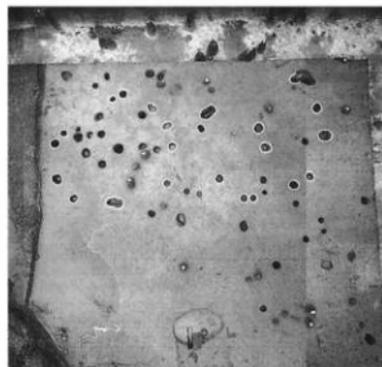
掘立柱建物跡 ⑤ (平地住居 B群)



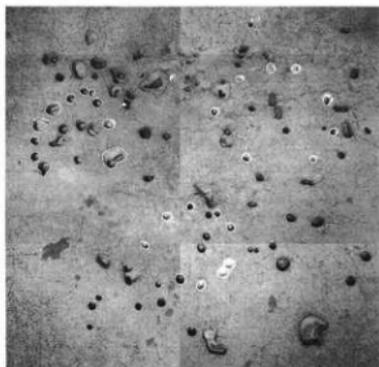
掘立柱建物跡 ③ (平地住居 B~D群)



掘立柱建物跡 ⑥ (平地住居 C群)



掘立柱建物跡 ④ (平地住居 A群)



掘立柱建物跡 ⑦ (平地住居 D群)



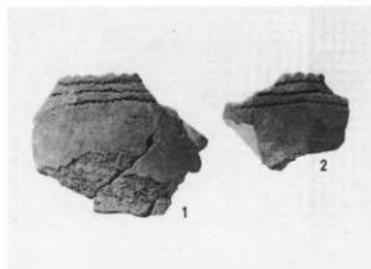
竪穴住居 (SA1)
完掘状況



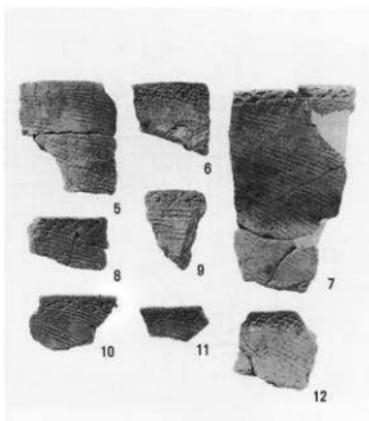
竪穴住居 (SA2)
完掘状況



掘立柱建物 (SB13~15)
完掘状況



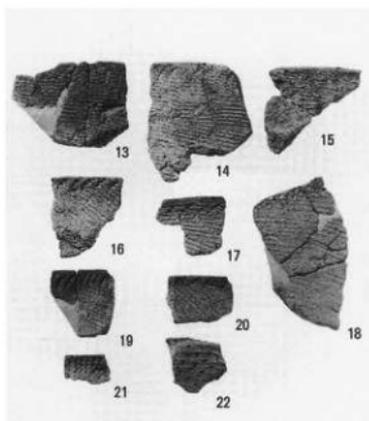
縄文時代早期土器 1類



縄文時代早期土器 2類 ③



縄文時代早期土器 2類 ①



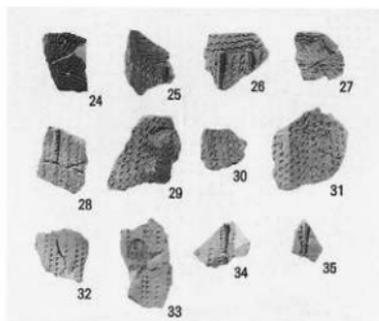
縄文時代早期土器 2類 ④



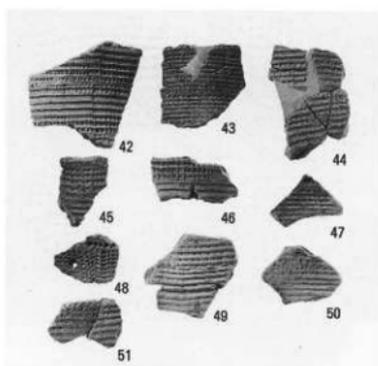
縄文時代早期土器 2類 ②



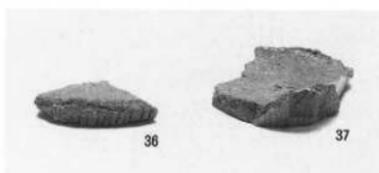
縄文時代早期土器 2類 ⑤



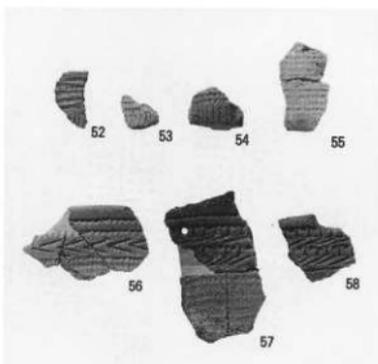
縄文時代早期土器 3類 ①



縄文時代早期土器 4類 ③



縄文時代早期土器 3類 ②



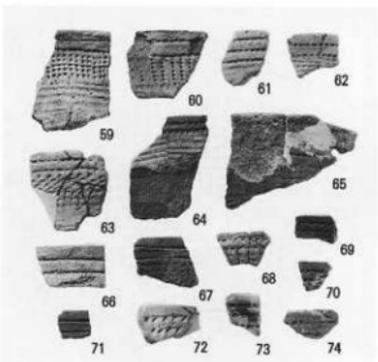
縄文時代早期土器 4類 ④



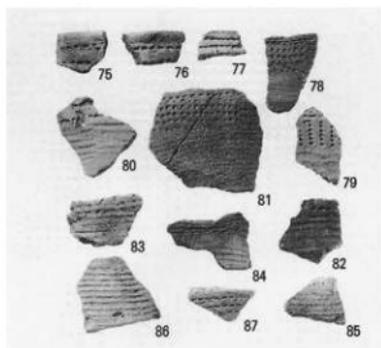
縄文時代早期土器 4類 ①



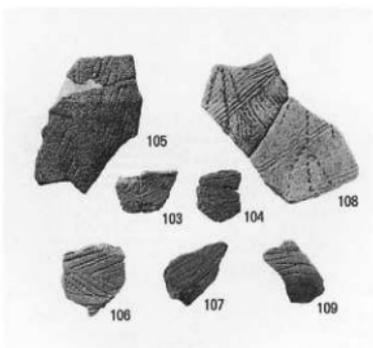
縄文時代早期土器 4類 ②



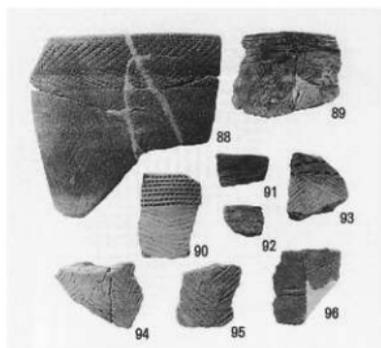
縄文時代早期土器 5類 ①



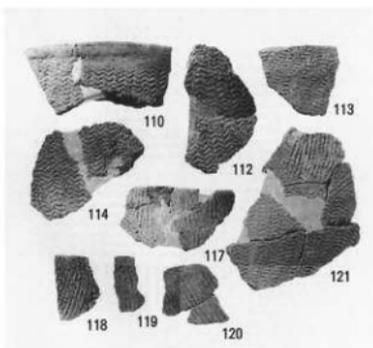
縄文時代早期土器 5 a類 ②



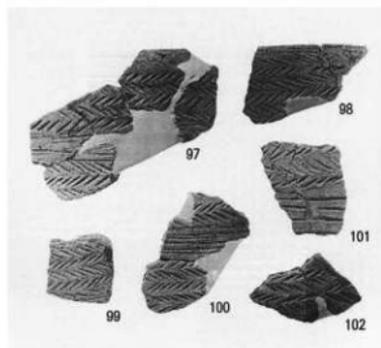
縄文時代早期土器 6 類 ②



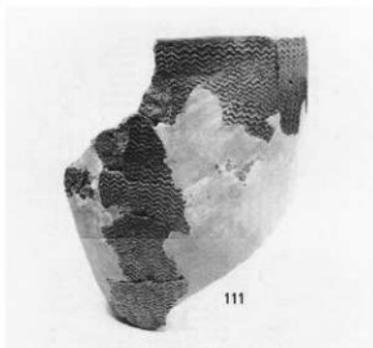
縄文時代早期土器 5 b類



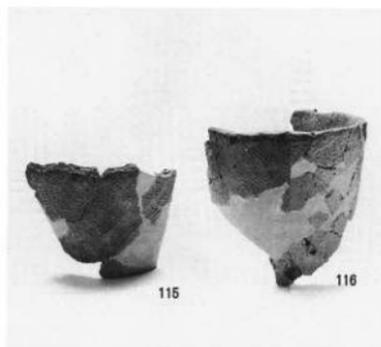
縄文時代早期土器 7 a類 ①



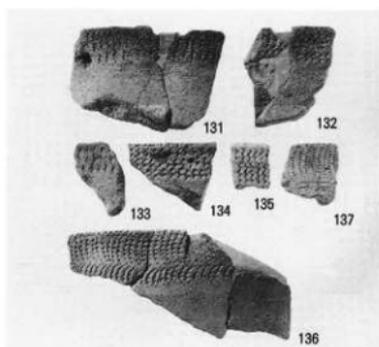
縄文時代早期土器 6 類 ①



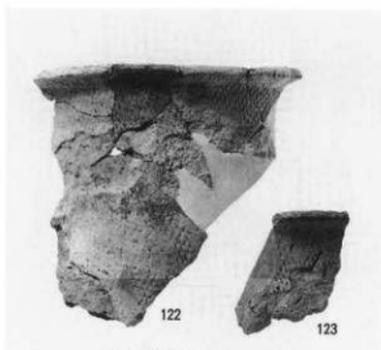
縄文時代早期土器 7 a類 ②



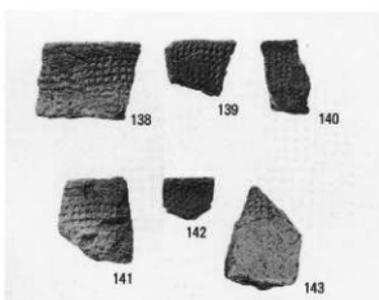
縄文時代早期土器 7a類 ③



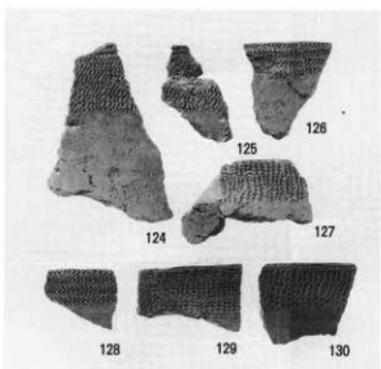
縄文時代早期土器 8類 ②



縄文時代早期土器 7b類



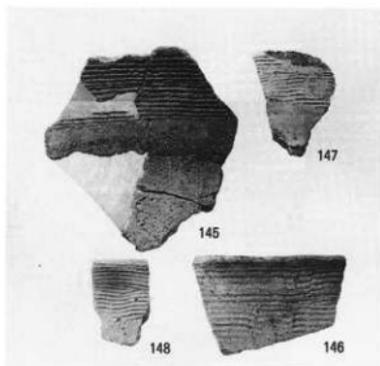
縄文時代早期土器 8類 ③



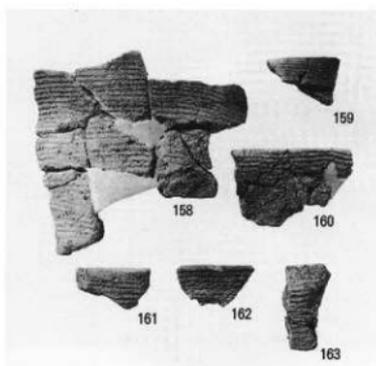
縄文時代早期土器 8類 ①



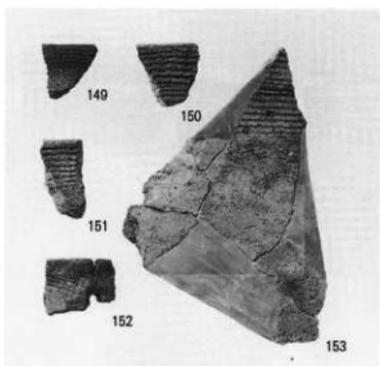
縄文時代早期土器 8類 ④



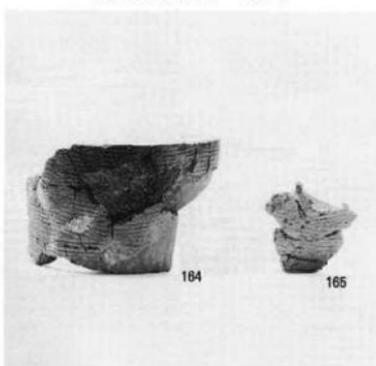
縄文時代早期土器 8類 ⑤



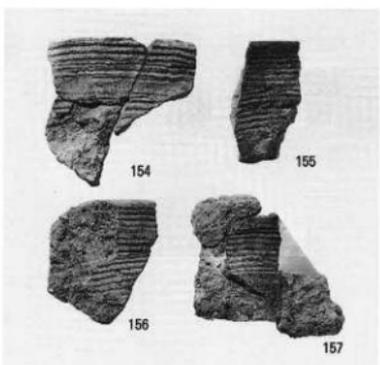
縄文時代早期土器 8類 ⑧



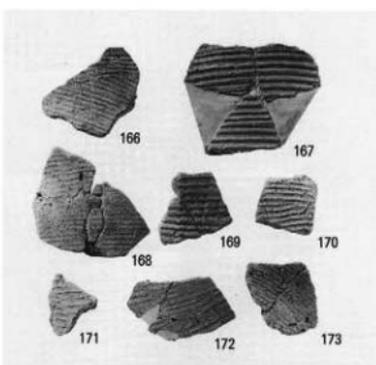
縄文時代早期土器 8類 ⑥



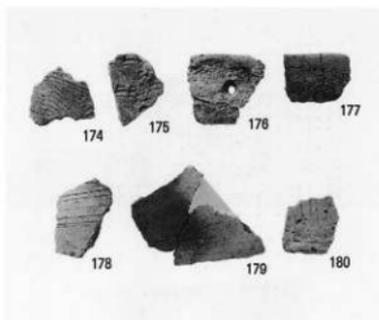
縄文時代早期土器 9類 ①



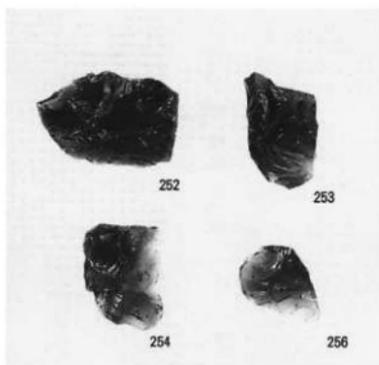
縄文時代早期土器 8類 ⑦



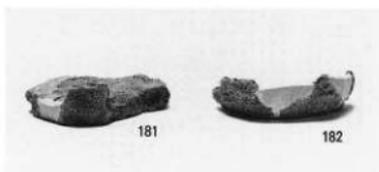
縄文時代早期土器 9類 ②



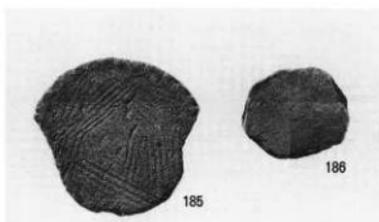
縄文時代早期土器 9類 ③・10類



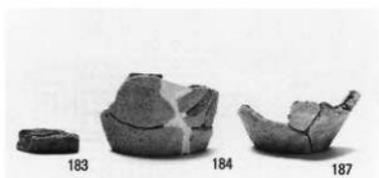
出土石器（石核・楔形石器）



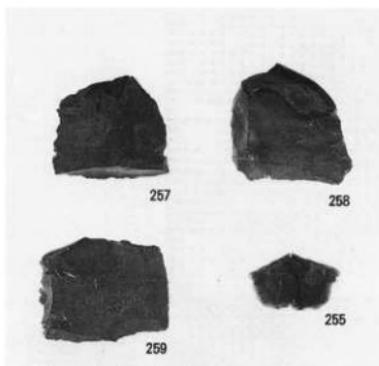
縄文時代早期土器 11類 ①



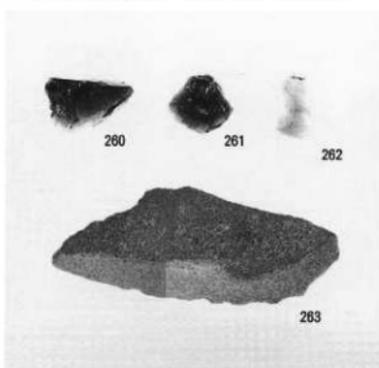
縄文時代早期土器 11類 ②



縄文時代早期土器 11類 ③



出土石器（折断剥片・使用痕剥片・楔形石器）



出土石器（使用痕剥片）